

館報 2014 63

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館
石橋財団 石橋美術館

館報 2014 63

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館
石橋財団 石橋美術館

館報63号(2014年度)

Annual Report of Bridgestone Museum of Art &
Ishibashi Museum of Art No. 63 (2014)

編集・発行

Edited and published by

石橋財団ブリヂストン美術館
〒104-0031 東京都中央区京橋1-10-1

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundation
1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

石橋財団石橋美術館
〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015

Ishibashi Museum of Art, Ishibashi Foundation
1015, Nonaka-machi, Kurume-shi, Fukuoka 839-0862, Japan

印刷
株式会社昭和堂

Printed by
Showado Co., Ltd.

2015年3月発行

©2015
Bridgestone Museum of Art,
Ishibashi Museum of Art,
Ishibashi Foundation

目次 Contents

1	設立趣旨、機構・運営	4
	Brief Histories of the Museums, Organization and Management	5
2	展覧会	
	• プリヂストン美術館	6
	• 石橋美術館	25
3	教育普及	
	• プリヂストン美術館	41
	• 石橋美術館	46
4	入場者数	51
5	新収蔵作品 New Acquisitions	52
6	新収図書	58
7	修復記録	59
8	作品貸出記録	
	• プリヂストン美術館	60
	• 石橋美術館	63
9	刊行物一覧	65
10	研究報告	
	• ジャン=フランソワ・ミレー 《乳しぼりの女》 賀川恭子	72
	• 中村彝の2つの《自画像》 田所夏子	82
	• 坂本繁二郎滞欧期の資料紹介 伊藤絵里子	89
	• 《古今和歌集卷一断簡 高野切》付随資料の紹介 平間理香	97
11	美術館案内 Guide to the Museums	103
12	石橋財団職員	104

設立趣旨

ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎(1889-1976)が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952(昭和27)年1月8日、ブリヂストンビルディング竣工とともに同ビル内に開設されたものである。その後1956(昭和31)年4月に設立された財団法人石橋財団(現 公益財団法人石橋財団)がその経営を継承し、1961(昭和36)年9月には同財団が石橋正二郎から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、2003(平成15)年1月に一階部分の増床工事をを行い、ティールームを開設した。

石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎が1956(昭和31)年4月26日、株式会社ブリヂストンの創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977(昭和52)年、石橋正二郎の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその管理運営に当たっている。

なお、本館に付随する別館は、1995(平成7)年1月8日、石橋正二郎によって蒐集された石橋コレクションのうち、書画・陶磁器類を収蔵展示する施設として石橋幹一郎により久留米市に建設寄贈され、一年余の養生期間を経て1996(平成8)年10月17日に開館した。

機構・運営

石橋財団

(2014年12月31日現在)

理事長	石橋 寛					
理事	西嶋大二	滝口勝昭	水戸岡鋭治	石橋直樹	今津幸子	
監事	林 克次	小野寺重穂				
評議員	加嶋昭男	高階秀爾	村上 浩	小林 忠	加瀬英明	小嶋英熙
	鈴木エドワード					

美術館運営委員会

委員長	石橋 寛				
委員	高階秀爾	小林 忠	島田紀夫	西嶋大二	松本 透

寄付助成選考委員会

委員長	石橋 寛					
委員	加嶋昭男	村上 浩	島田紀夫	小嶋英熙	石橋直樹	西嶋大二
	今津幸子					

常務理事 西嶋大二

事務局

事務局長 山内和徳

ブリヂストン美術館

館長 石橋 寛

石橋美術館

館長 西嶋大二

Brief Histories of the Museums

Bridgestone Museum of Art

On January 8, 1952, ISHIBASHI Shojiro (1889-1976), the founder of the Bridgestone Corporation, wishing to promote cultural development in Japan, opened to the public a museum of art within the newly-completed Bridgestone Building under the name of the “Bridgestone Gallery”. The works of art, both Japanese and foreign, which he had collected over the years formed the nucleus of the exhibits. In April 1956, the Ishibashi Foundation was established to take over the management of the Gallery, and in September 1961, ISHIBASHI donated the works in the Gallery to the Foundation. In January 1968, the English name was changed from the “Bridgestone Gallery” to the “Bridgestone Museum of Art”. In January 2003, the ground floor was enlarged and a tea room was opened.

Ishibashi Museum of Art

On April 26, 1956, in commemoration of the 25th anniversary of the Bridgestone Corporation, ISHIBASHI Shojiro donated the Ishibashi Cultural Center to his home town of Kurume to render a public service and promote cultural development. The Ishibashi Museum of Art (originally the Ishibashi Art Gallery) is the principal institution in the Center. In 1977, the Museum building was enlarged and renovated, thanks to a contribution from the Ishibashi family, and in April of the same year the city of Kurume entrusted the Ishibashi Foundation with the management of the Museum.

On January 8, 1995, ISHIBASHI Kan'ichiro, son of ISHIBASHI Shojiro donated to the city of Kurume a new museum especially designated to exhibit Shojiro's collection of Asian Arts, such as brush painting, calligraphy, porcelain works. It has been open to the public since October 17, 1996.

Organization and Management

Ishibashi Foundation

(As of December 31, 2014)

President of the Board of Directors

	ISHIBASHI Hiroshi			
Directors	NISHIJIMA Taiji IMAZU Yukiko	TAKIGUCHI Katsuaki	MITOOKA Eiji	ISHIBASHI Naoki
Auditors	HAYASHI Katsuji	ONODERA Shigeo		
Council Members	KASHIMA Akio KASE Hideaki	TAKASHINA Shuji KOJIMA Hidehiro	MURAKAMI Hiroshi SUZUKI Edward	KOBAYASHI Tadashi

Executive Committee of the Museums

Chairman	ISHIBASHI Hiroshi			
Members	TAKASHINA Shuji MATSUMOTO Toru	KOBAYASHI Tadashi	SHIMADA Norio	NISHIJIMA Taiji

Program Development Grant Committee

Chairman	ISHIBASHI Hiroshi			
Members	KASHIMA Akio ISHIBASHI Naoki	MURAKAMI Hiroshi NISHIJIMA Taiji	SHIMADA Norio IMAZU Yukiko	KOJIMA Hidehiro

Managing Director NISHIJIMA Taiji

Administration

Executive Secretary YAMAUCHI Kazunori

Bridgestone Museum of Art

Director ISHIBASHI Hiroshi

Ishibashi Museum of Art

Director NISHIJIMA Taiji

画家の目、彫刻家の手〈コレクション展示〉

会期：2014年1月18日(土)–4月13日(日)

会場：第1–10室、彫刻ギャラリー1、2

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：本展では、絵画と彫刻が同じ時代背景をもとに制作されたこと、また、画家が彫刻を作成し、彫刻家が絵画を描いたということ、さらには、画家と彫刻家とのあいだの交流があったことを解説パネルで紹介しつつ、各展示室に彫刻を1、2点設置した。展示室内に絵画と彫刻をあわせて展示することで、それぞれの特徴を際立たせた。ロダンやブールデル、ザツキン、アーキペンコ、ブランクーシなど、当館の彫刻ギャラリーに常設されている作品に注目してもらうことも目的とした。

出品内容：絵画102点、彫刻44点、陶器14点 計160点

入場者総数：25,496人(1日平均345人)



ポスター画像

出品目録：

エントランス / 階段

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》 / 大理石 / 外彫81
2. アリステイド・マイヨール《欲望》 / 1905-08年 / ブロンズ / 外彫66

彫刻ギャラリー1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》 / 1884年頃 / 大理石 / 外彫40
4. オーギュスト・ロダン《考える人》 / 1902年頃 / ブロンズ / 外彫39
5. オーギュスト・ロダン《青銅時代》 / 1904年 / ブロンズ / 外彫38
6. エミール=アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》 / 1904-08年 / ブロンズ / 外彫43
7. エミール=アントワヌ・ブールデル《ペネロープ》 / 1909年 / ブロンズ / 外彫45
8. エミール=アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》 / 1909年 / ブロンズ / 外彫46
9. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》 / 1918年 / ブロンズ / 外彫48
10. シャルル・デスピオ《クラ=クラ》 / 1919年 / ブロンズ / 外彫49

彫刻ギャラリー2

11. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》 / 1907-10年 / 石膏 / 外彫100
12. アレキサンダー・アーキペンコ《ゴンドラの船頭》 / 1914年 / ブロンズ / 外彫86
13. オシップ・ザツキン《三美神》 / 1950年 / ブロンズ / 外彫56
14. オシップ・ザツキン《ボモナ (トルソ)》 / 1951年 / 黒檀 / 外彫55
15. ヘンリー・ムア《横たわる人体》 / 1976年 / ブロンズ / 外彫89
16. マリノ・マリーニ《騎手》 / 1952年 / ブロンズ / 外彫70
17. ペリクレ・ファッツィーニ《爽風 (B)》 / 1972-73年 / ブロンズ / 外彫88

第3室 古代美術

18. シュメール《女の胸像》 / 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1

-
19. パルミユラ《人物像》/ 1-2世紀 / 石灰岩 / 外彫27
 20. エジプト《セクメト神像》/ 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
 21. エジプト アマルナ・レリーフ断片《柘榴と葡萄》/ 紀元前1360年 / 石灰岩、彩色 / 外彫95
 22. エジプト レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》/ 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
 23. エジプト レリーフ断片《神牛》/ 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
 24. エジプト《彩色木棺》/ 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
 25. エジプト《ホルス神浮彫》/ 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
 26. エジプト《聖猫》/ 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
 27. ギリシア《獅子頭部》/ 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
 28. ギリシア《哲人の顔》/ 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
 29. ギリシア《ヴィーナス》/ ヘレニスティック期 (紀元前323-30年) / 大理石 / 外彫14
 30. グレコ=ローマン《アテナ頭部》/ 大理石 / 外彫79
 31. コリントス球形アリュバロス「ルクスス・グループ」(?)《鷲と鶏図》/ 紀元前610-590年 / 陶器182
 32. アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「ブローニウ441の画家」《ヘラクレスとケルベロス図》/ 紀元前520-510年 / 陶器197
 33. アッティカ黒絵式オイノコエ《デュオニュソスとマイナス図》/ 紀元前500年頃 / 陶器76
 34. アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス、サテュロスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器67
 35. アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》/ 紀元前490-480年 / 陶器66
 36. アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器68
 37. アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》/ 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
 38. アッティカ白地レキュトス《墓参図》/ 紀元前5世紀第4四半期 / 陶器71
 39. アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》/ 紀元前4世紀第1四半期 / 陶器91
 40. 《カンパニア赤絵式魚文皿》/ 紀元前4世紀第2四半期 / 陶器42
 41. カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》/ 紀元前350年頃 / 陶器87
 42. カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》/ 紀元前4世紀第3四半期 / 陶器88
 43. アプリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》/ 紀元前330年頃 / 陶器92
 44. エトルリア《建築装飾フリーズ部分、泉水に向う二頭の馬》/ 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
 45. ローマ《ヴィーナスの頭部》/ 大理石 / 外彫23
 46. ローマ モザイク断片《牧羊頭部》/ 1世紀 / 陶器114
 47. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》/ 1世紀 / フレスコ / 外洋2

第1室 バルビゾン派

48. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / 外洋7
49. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/ 1845年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋8
50. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / 外洋159
51. アントワーヌ=ルイ・バリー《牛》/ ブロンズ / 外彫31
52. アントワーヌ=ルイ・バリー《馬》/ ブロンズ / 外彫32
53. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しぼりの女》/ 1854-60年 / 油彩・カンヴァス / 外洋119
54. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サーブル=ドロンヌ》/ 油彩・板 / 外洋10
55. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170
56. カミーユ・ピサロ《ブージュヴァルのセヌ河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / 外洋19
57. カミーユ・ピサロ《菜園》/ 1878年 / 油彩・カンヴァス / 外洋20
58. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25

59. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》/ 1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26

第4室 印象派

60. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
61. エドゥアール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
62. エドゥアール・マネ《メリー・ローラン》/ 1882年 / パステル・カンヴァス / 外洋15
63. エドガー・ドガ《踊り子》/ 1873年頃 / 鉛筆、油彩・紙 / 外洋16
64. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋162
65. エドガー・ドガ《右足で立ち、右手を地面にのばしたアラベスク》/ 1882-95年 / ブロンズ / 外彫76
66. エドガー・ドガ《踊りの稽古場にて》/ 1895-98年 / パステル・紙 / 外洋17
67. エドガー・ドガ《右手で右足を持つ踊り子》/ 1896-1911年 / ブロンズ / 外彫37
68. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジュ・シャルパンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169
69. ピエール=オーギュスト・ルノワール《少女》/ 1887年 / パステル・紙 / 外洋165
70. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 外洋35
71. ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋229
72. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋122
73. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《サーカスの舞台裏》/ 1887年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋227
74. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《ムーラン・ルージュ、ラ・グーリュ》/ 1891年 / リトグラフ / 外版38
75. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《騎手》/ 1899年 / カラーリトグラフ / 外版181

第5室 印象派とポスト印象派

76. ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ《ノルマンディー（マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第4号所収）》/ 1893年刊 / 転写リトグラフ / 外版6
77. ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ《女性習作（マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第9号所収）》/ 1895年刊 / 写真平版 / 外版294
78. ポール・セザンヌ《水浴》/ 1865-70年頃 / 水彩・紙 / 外洋231
79. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
80. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
81. オーギュスト・ロダン《カミーユ・クローデル》/ 1889年 / ブロンズ / 外彫42
82. オーギュスト・ロダン《ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ》/ 1891年 / ブロンズ / 外彫41
83. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
84. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22
85. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24
86. ポール・ゴーガン《ボン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37
87. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / 外洋38
88. モーリス・ドニ《バッカス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋65

第6室 日本の近代洋画

89. 浅井忠《グレーの洗濯場》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋290
90. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
91. 黒田清輝《ブレハの少女》/ 1891年 / 油彩・カンヴァス / 日洋8

-
92. 黒田清輝《杣》 / 油彩・カンヴァス / 日洋10
 93. 藤島武二《黒扇》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
 94. 岡田三郎助《婦人像》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋60
 95. 山下新太郎《読書》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋83
 96. 山下新太郎《供物》 / 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋84
 97. 青木繁《天平時代》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋91
 98. 青木繁《海景（布良の海）》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋100

第7室 世紀末美術

99. ギュスターヴ・モロー《化粧》 / 1885-90年頃 / グワッシュ、水彩・紙 / 外洋120
100. フランソワ・ポンポン《家鴨》 / 1911年 / ブロンズ / 外彫53
101. オディロン・ルドン《神秘の語り》 / 油彩・カンヴァス / 外洋178
102. オディロン・ルドン《供物》 / 油彩・厚紙 / 外洋179
103. エドゥアル・ヴェイヤール《鏡の前》 / 1924年頃 / パステル・紙 / 外洋55
104. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》 / 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64
105. ジョルジュ・ルオー《赤鼻のクラウン》 / 1925-29年 / 油彩・板で裏打ちされた紙 / 外洋236
106. ジョルジュ・ルオー《エルサレム》 / 1953年 / 油彩・カンヴァスで裏打ちされた紙 / 外洋238

第8室 マティスとピカソ

107. アリステイド・マイヨール《裸婦》 / ブロンズ / 外彫65
108. アンリ・マティス《画室の裸婦》 / 1899年 / 油彩・紙 / 外洋56
109. アンリ・マティス《横たわる裸婦》 / 1919年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋58
110. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》 / 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋59
111. アンリ・マティス《石膏のある静物》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋232
112. パブロ・ピカソ《道化師》 / 1905年 / ブロンズ / 外彫61
113. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》 / 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / 外洋173
114. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》 / 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143
115. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》 / 1922年 / 油彩・カンヴァス / 外洋83
116. パブロ・ピカソ《女の顔》 / 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / 外洋84
117. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160
118. パブロ・ピカソ《馬》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋239
119. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》 / 1924年 / 油彩・板 / 外洋86

第9室 エコール・ド・パリ

120. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》 / 1924-25年 / 油彩・カンヴァス / 外洋87
121. アンドレ・ドラン《自画像》 / 1913年 / 油彩・カンヴァス / 外洋240
122. アンドレ・ドラン《聖母子》 / 1913年頃 / 油彩・板 / 外洋71
123. モーリス・ユトリロ《サン=ドニ運河》 / 1906-08年 / 油彩・紙 / 外洋77
124. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》 / 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114
125. マリー・ローランサン《二人の少女》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72
126. マリー・ローランサン《女と犬》 / 1923年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋186
127. 藤田嗣治《インク壺の静物》 / 1926年 / 油彩・カンヴァス / 日洋124
128. 藤田嗣治《猫のいる静物》 / 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131
129. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋132

-
130. オシップ・ザツキン《母子》 / 1919年 / 着色されたセメント / 外彫54
 131. 佐伯祐三《テラスの広告》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋174
 132. 佐伯祐三《ガラージュ》 / 1927-28年 / 油彩・カンヴァス / 日洋175
 133. 岡鹿之助《セース河畔》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋583

第10室 20世紀美術1

134. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》 / 1940年 / ミクストメディア・カードボード / 外洋217
135. パウル・クレー《島》 / 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
136. パウル・クレー《冬》 / 1932年 / 水彩・紙 / 外洋248
137. フェルナン・レジェ《抽象的コンポジション》 / 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋219
138. ジョアン・ミロ《絵画》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187
139. 古賀春江《涯しなき逃避》 / 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋166
140. 古賀春江《感傷の静脈》 / 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋165
141. アルベルト・ジャコメッティ《ディエゴの胸像》 / 1954-55年 / ブロンズ / 外彫75
142. アルベルト・ジャコメッティ《アネットの顔》 / 1955年 / エッチング / 外版124
143. アルベルト・ジャコメッティ《アネット》 / インク・紙 / 外洋206

第2室 20世紀美術2

144. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》 / 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211
145. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》 / 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188
146. ジャン・フォートリエ《旋回する線》 / 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋189
147. ジャン・デュビュッフェ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》 / 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192
148. 猪熊弦一郎《Sky Triangle》 / 1968年 / 油彩・カンヴァス / 日洋482
149. バーバラ・ハップワース《翼のある人物 I》 / 1957年 / 真鍮、鉄線 / 外彫93
150. アンス・アルトウング《T 1963 K 7》 / 1963年 / アクリル・カンヴァス / 外洋228
151. 斎藤義重《WORK》 / 1961年 / 油彩・合板 / 日洋578
152. 斎藤義重《作品》 / 1965年 / 油彩・合板 / 日洋527
153. セルジュ・ポリアコフ《コンポジション》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス / 外洋215
154. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
155. 菅井汲《赤い鬼》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋579
156. 菅井汲《OKA》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋526
157. ピエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
158. ザオ・ウーキー《07.06.85》 / 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197
159. 白髪一雄《観音普陀落浄土》 / 1972年 / 油彩・カンヴァス / 日洋544
160. 堂本尚郎《連続の溶解9》 / 1964年 / 油彩、アクリル・カンヴァス / 日洋530

*すべてブリヂストン美術館蔵。

関連事業：

土曜講座「彫刻を知る、学ぶ」→ p.41
ギャラリートーク→ p.42

広報記録：

新聞・雑誌：

「ブリヂストン美術館コレクション展 画家の目、彫刻家の手」『ふらんす』2014年1月号、p.77

「ブリヂストン美術館コレクション展 画家の目、彫刻家の手」『新美術新聞』2014年2月21日

渋谷和彦「美の扉・立体と平面 際立つ親密さ」『産経新聞』2014年3月30日

「彫刻家ドガがいたから画家ドガの『踊り子』」『週刊新潮』2014年3月27日号、p.143

テレビ・ラジオ：

「美の巨人たち・藤島武二『黒扇』」(出演：野見山暁治 他)、テレビ東京、2014年3月8日放映

「ぶらぶら美術・博物館・『画家の目、彫刻家の手』～印象派・モネからロダンまで 名画と彫刻の傑作コラボ～」出演：貝塚健、BS日テレ、2014年3月21日放映

「The Art Sight-seeing～新感覚！地元アート探訪番組～」出演：賀川恭子、J.COMチャンネル(関東エリア版)、2014年3月1日～3月15日 複数回放映

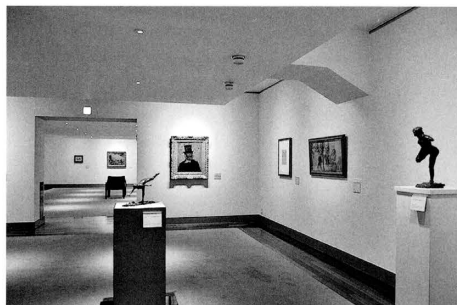
WEB：

「ショコラ」Podcast インタビュー：賀川恭子 2014年1月18日～配信

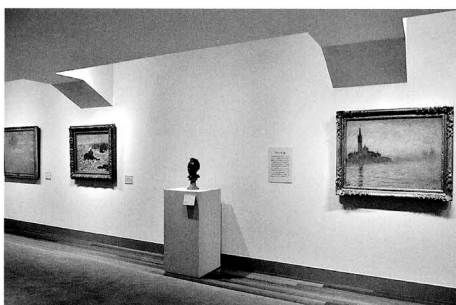
<http://fr-chocolat.com/podcast-chocolat/911-371-sculptures-et-claquettes>



会場写真



会場写真



会場写真



会場写真

描かれたチャイナドレス—藤島武二から梅原龍三郎まで〈テーマ展示〉

会期：2014年4月26日(土)－7月21日(月・祝)

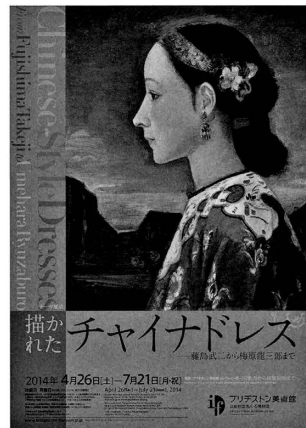
会場：第1-2室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：1910年代から40年代までの、日本人洋画家による中国服女性像を集めた企画。中国は、有史以来の日本がつねに仰ぎ見てきた先進大国であり、日本は政治制度・仏教・儒教・文学・美術にいたるまで数多くものを中国から学び取ってきた。1890年代の日清戦争での日本の勝利によって、初めてその構図が崩れてくる。さらに1912年の清朝崩壊によって様々な文物が日本に流入し、大正期に新たな中国趣味が湧き起こってきた。谷崎潤一郎や芥川龍之介が中国を題材にした文学作品を次々に発表する。それらに呼応するように、油彩画の分野でも中国ブームがあらわれた。1915年の藤島武二作品を嚆矢として、1940年代の梅原龍三郎が北京で描いた連作まで、様々な中国服女性像が描かれた。興味深いのは、ヨーロッパで学んだ画家たちが、中国服を着た日本人女性を日本で描いている作品が目につくことである。政治的・軍事的に中国を凌駕したという自負と、中国文化への強い憧憬が混ざりあい、日本のオリエンタリズムともいべき様相が出現している。明治初年から日本の洋画家たちは、何を描くべきかという課題に取り組んできたのだが、その一つの帰結がこれらの作品にあらわれている。

出品内容：油彩画26点、水彩画2点、版画1点 計29点

入場者総数：30,484人(1日平均386人)



ポスター画像

出品目録：

1. 藤島武二《匂い》 / 1915年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立近代美術館
2. 藤島武二《唐様三部作》 / 1924年 / 左：水彩、油彩・紙 中央：水彩、油彩、パステル、木炭、チョーク・紙 右：水彩、油彩・紙 / 日洋45 / IMA
3. 藤島武二《東洋振り》 / 1924年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
4. 藤島武二《女の横顔》 / 1926-27年 / 油彩・板 / ポーラ美術館
5. 藤島武二《鉸剪眉》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 鹿児島市立美術館
6. 藤島武二《台湾の女》 / 1935年頃 / 油彩・板 / メナード美術館
7. 小林萬吾《銀屏の前》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 福富太郎コレクション資料室
8. 満谷国四郎《焦山》 / 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋70 / IMA
9. 児島虎次郎《お茶時》 / 1918年 / 油彩・カンヴァス / 大原美術館
10. 児島虎次郎《中国の少女》 / 1918年 / 油彩・カンヴァス / 大原美術館
11. 児島虎次郎《西湖の画舫》 / 1921年 / 油彩・カンヴァス / 高梁市成羽美術館
12. 児島虎次郎《花卓の少女》 / 1926年 / 油彩・カンヴァス / 高梁市成羽美術館
13. 正宗得三郎《赤い支那服》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 府中市美術館
14. 正宗得三郎《支那服》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 府中市美術館
15. 正宗得三郎《中国服を着た女》 / 制作年不明 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵

-
16. 藤田嗣治《力士と病児》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 大日本印刷株式会社
 17. 小出檐重《周秋蘭立像》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / リーガロイヤルホテル
 18. 清水登之《松江の茶館》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 栃木県立美術館
 19. 安井曾太郎《金蓉》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立近代美術館
 20. 梅原龍三郎《姑娘とチューリップ》/ 1942年 / 油彩、岩彩・間似合紙 / 東京国立近代美術館
 21. 梅原龍三郎《玉鈴と三鈴》/ 1942年 / 油彩、岩彩・カンヴァス / メナード美術館
 22. 岸田劉生《照子像》/ 1920年 / 水彩・紙 / 郡山市立美術館
 23. 恩地孝四郎《白壁（蘇州所見）》/ 1940年 / 木版多色摺・紙 / 千葉市美術館
 24. 久米民十郎《支那の踊り》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
 25. 矢田清四郎《支那服の少女》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 島根県立美術館
 26. 朝井閑右衛門《蘇州風景》/ 1941年 / 油彩・カンヴァス / 横須賀美術館
 27. 岡田謙三《満人の家族》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 横浜美術館
 28. 三岸好太郎《支那の少女》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 北海道立三岸好太郎美術館
 29. 三岸好太郎《中国の女》/ 1927-28年 / 水彩・紙 / メナード美術館

参考出品

- A-1. 蟒袍 / 19世紀後半 / 謝黎コレクション
- A-2. 旗袍 / 19世紀後半 / 謝黎コレクション
- A-3. ロングベスト（長背心）/ 1910年代 / 謝黎コレクション
- A-4. 旗袍 / 1920年代 / 謝黎コレクション
- A-5. 旗袍 / 1930年代 / 謝黎コレクション
- A-6. 旗袍 / 1930年代 / 謝黎コレクション

*IMA は石橋美術館の所蔵であることを示す。

関連事業：

土曜講座「異国趣味とオリエンタリズム」→ p.42
ギャラリートーク→ p.42

広報記録：

新聞・雑誌：

「ディテールが生む狂気」『美術の窓』2014年4月号、p.64

貝塚健「中国服女性像と『オリエンタリズム絵画』」『新美術新聞』2014年4月21日

“Chinese Style Dresses: From Fujishima Takeji to Umehara Ryuzaburo”, *The Japan Times*, April 24, 2014

前田恭二「『描かれたチャイナドレス』展：服飾に潜むアジアの力学」『読売新聞』2014年5月15日

宮川匡司「往年の中国趣味を再考：描かれたチャイナドレス展」『日本経済新聞』2014年5月21日

山田優「日本とアジア—美の歩み再考、チャイナドレス巡る展覧会—東洋趣味と向き合う」『朝日新聞』2014年5月28日夕刊

C. B. Liddell, “CHINA DRESS Cosplay as art”, *METROPOLIS*, May 30, 2014, p.11

「中国服姿の女性画展示」『徳島新聞』2014年5月31日（他、地方紙に配信）

永峰美佳「ブリヂストン美術館：描かれたチャイナドレス—藤島武二から梅原龍三郎まで」『美術手帖』2014年6月号、pp.130-131

貝塚健「ぎゃらりいモール」『読売新聞』2014年6月17日夕刊

金大偉「展評：ぬぐえぬ中国への憧れ：描かれたチャイナドレス—藤島武二から梅原龍三郎まで」『カトリック』

ク新聞』2014年6月22日

藤原えりみ「比べてわかるビジュツのヒ・ミ・ツ・異国趣味という幻想」『和楽』2014年7月号、p.13

板倉聖哲「展覧会の壺 no.3・チャイナドレス競艶」『芸術新潮』2014年7月号、p.131

岸桂子「中国への憧憬」『毎日新聞』2014年7月9日夕刊

堀井正純「東京で『描かれたチャイナドレス』展・画布に刻んだ東洋の美」『神戸新聞』2014年7月12日

井上晋治「回顧2014 アート…東アジアの中の日本再認識」『読売新聞』2014年12月11日

テレビ・ラジオ：

「日曜美術館」（アートシーン）NHK 教育テレビ、2014年5月25日放映

「TOKYO MX NEWS」（美術館へ行こう！）、TOKYO MX、2014年6月23日放映

「アートステージ～美の饗宴～」TOKYO MX、2014年6月30日放映

WEB：

仲宇佐ゆり「なぜ日本人はチャイナドレスが好きか？大戦前の複雑な心境が生んだミステリー」東京経済オンライン

<http://toyokeizai.net/articles/-/37704>

コトリング「チャイナドレスのコトリングと巡る『描かれたチャイナドレス』展」CINRA.NET

<http://www.cinra.net/column/chinesestyledresses-report>

けんいちろう「コラム：京橋・八丁堀」HAPPY PLUS ART

<https://art.flagshop.jp/column/nologin/262>



会場風景



会場風景



会場風景

絵画の時間—24のエピソード〈コレクション展示〉

会期：2014年8月2日(土)―9月23日(火・祝)

会場：第1―10室、彫刻ギャラリー1、2

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：本展では、古代美術、レンブラントからモネ、ルノワールなどの印象派を中心とした西洋の近・現代美術、浅井忠、小出楯重などの日本近代洋画まで約170点を展示した。各部屋に数点ずつ、それぞれの作品に見え隠れする時間にまつわるエピソードを紹介する解説パネル（400字程度）を24ヶ所設置した。また、夏休みに来館する小中学生向けのワークシートを配布するとともに、一般来館者を対象に「絵画の時間—あなたのエピソード」と名付けた投稿BOXを設置。寄せられた感想の一部を1階ホール前、2階情報コーナー、ブログ等で紹介した。当館のコレクションをゆっくりと楽しんでいただくこと、親しみを持っていただくことを目的とした。

出品内容：絵画125点、彫刻29点、陶器14点 計168点

入場者総数：25,305人(1日平均496人)



ポスター画像

出品目録：

エントランス

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》/ 大理石 / 外彫81

階段

2. アリステイド・マイヨール《欲望》/ 1905-08年 / ブロンズ / 外彫66

彫刻ギャラリー1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/ 1884年頃 / 大理石 / 外彫40
4. オーギュスト・ロダン《考える人》/ 1902年頃 / ブロンズ / 外彫39
5. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ 1904年 / ブロンズ / 外彫38
6. エミール=アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》/ 1904-08年 / ブロンズ / 外彫43
7. エミール=アントワヌ・ブールデル《ベネロープ》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫45
8. エミール=アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫46
9. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》/ 1918年 / ブロンズ / 外彫48
10. シャルル・デスピオ《クラ=クラ》/ 1919年 / ブロンズ / 外彫49

彫刻ギャラリー2

11. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / 外彫100
12. アレキサンダー・アーキベンコ《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / 外彫86
13. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / 外彫54
14. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / 外彫56
15. オシップ・ザツキン《ボモナ (トルソ)》/ 1951年 / 黒檀 / 外彫55
16. マリノ・マリーニ《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / 外彫70

-
17. ヘンリー・ムア《横たわる人体》 / 1976年 / ブロンズ / 外彫102
 18. ペリクレ・ファッツィーニ《爽風 (B)》 / 1972-73年 / ブロンズ / 外彫89

第3室 古代美術

19. シュメール《女の胸像》 / 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1
20. パルミユラ《人物像》 / 1-2世紀 / 石灰岩 / 外彫27
21. エジプト《セクメト神像》 / 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
22. エジプト レリーフ断片《柘榴と葡萄》 / 紀元前1360年頃 / 石灰岩、彩色 / 外彫95
23. エジプト レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》 / 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
24. エジプト レリーフ断片《神牛》 / 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
25. エジプト《彩色木棺》 / 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
26. エジプト《ホルス神浮彫》 / 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
27. エジプト《聖猫》 / 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
28. ギリシア《獅子頭部》 / 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
29. ギリシア《哲人の顔》 / 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
30. ギリシア《ヴィーナス》 / ヘレニスティック期 (紀元前323-30年) / 大理石 / 外彫14
31. グレコ=ローマン《アテナ頭部》 / 大理石 / 外彫79
32. ギリシア コリントス球形アリュバロス《鷲と鶏図》 / 紀元前610-590年 / 陶器182
33. ギリシア アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「プーローニュの画家」《ヘラクレスとケルベロス図》 / 紀元前520-510年 / 陶器197
34. ギリシア アッティカ黒絵式オイノコエ《デュオニュソスとマイナス図》 / 紀元前500年頃 / 陶器76
35. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス、サテュロスとマイナス図》 / 紀元前490-480年 / 陶器67
36. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》 / 紀元前490-480年 / 陶器66
37. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》 / 紀元前490-480年 / 陶器68
38. ギリシア アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》 / 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
39. ギリシア アッティカ白地レキュトス《墓参図》 / 紀元前5世紀第4四半期 / 陶器71
40. ギリシア アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》 / 紀元前4世紀第1四半期 / 陶器91
41. ギリシア カンパニア赤絵式魚文皿 / 紀元前375-350年頃 / 陶器42
42. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》 / 紀元前350年頃 / 陶器87
43. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》 / 紀元前350-325年頃 / 陶器88
44. ギリシア アブリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》 / 紀元前330年頃 / 陶器92
45. エトルリア 建築装飾フリーズ部分《泉水に向う二頭の馬》 / 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
46. ローマ《ヴィーナスの頭部》 / 大理石 / 外彫23
47. ローマ モザイク断片《牧神頭部》 / 1世紀 / 陶器114
48. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》 / 1世紀 / フレスコ / 外洋2

第1室 伝統から近代へ

49. アントニー・ヤンスゾーン・ファン・デル・クロース《レイスウェイク城》 / 油彩・板 / 外洋4
50. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》 / 1626-28年 / 油彩・銅板 / 外洋5
51. レンブラント・ファン・レイン《帽子と襟巻を着けた暗い顔のレンブラント》 / 1633年 / エッチン

グ・紙 / 外版175

52. レンブラント・ファン・レイン《説教するキリスト》 / 1652年頃 / エッチング、ドライポイント、ビュラン / 外版177
53. 三連祭壇画《デイシス図》 / 17世紀後半 (?) / 板絵・板 / 外洋126
54. ジャン=バティスト・パテル《水浴》 / 油彩・カンヴァス / 外洋175
55. ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル《若い女の頭部》 / 油彩・カンヴァス / 外洋161
56. オノレ・ドーミエ《ちょ！ネクタイぐらい結べるぞ！（『おしゃれ』より）》 / 1839年 / リトグラフ・紙 / 外版155-4
57. オノレ・ドーミエ《たくさんたくさん、とても窮屈だ…（『おしゃれ』より）》 / 1839年 / リトグラフ・紙 / 外版155-5
58. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》 / 1850年頃 / 油彩・板 / 外洋171
59. オノレ・ドーミエ《ラタポワール》 / 1850年頃 / ブロンズ / 外彫91
60. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サーブル=ドロヌ》 / 油彩・板 / 外洋10
61. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》 / 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170
62. ギュスターヴ・クールベ《石切り場の雪景色》 / 1870年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋11
63. ジョージ・スミス《婦人像》 / 1866年 / 油彩・板 / 外洋147

第4室 印象派へのいざない

64. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》 / 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / 外洋7
65. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》 / 1845年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋8
66. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》 / 1865年頃 / 油彩・板 / 外洋172
67. カミーユ・ピサロ《菜園》 / 1878年 / 油彩・カンヴァス / 外洋20
68. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》 / 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
69. エドゥアール・マネ《自画像》 / 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
70. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》 / 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25
71. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》 / 1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26
72. アルフレッド・シスレー《レディーズ・コーヴ、ウェールズ》 / 1897年 / 油彩・カンヴァス / 外洋133
73. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》 / 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169
74. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 外洋33
75. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》 / 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34
76. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》 / 1917年 / 油彩・カンヴァス / 外洋35
77. ピエール=オーギュスト・ルノワール《青帽子の女》 / 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋137
78. ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》 / 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋229

第5室 モネ、そして印象派以降

79. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》 / 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28
80. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》 / 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
81. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》 / 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
82. クロード・モネ《アルジャントウイユ》 / 1874年 / 油彩・カンヴァス / 外洋180
83. クロード・モネ《雨のベリール》 / 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
84. クロード・モネ《睡蓮》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22
85. クロード・モネ《睡蓮の池》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 外洋23
86. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》 / 1908年頃 / 外洋24

-
87. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋168
 88. ポール・ゴーガン《ポン・タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37
 89. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋122
 90. ポール・シニャック《夕暮れ(『パン』第4年次第1号所収)》/ 1898年刊 / リトグラフ・紙 / 外版196-68
 91. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45

第6室 マティスとフォーヴィスム

92. アンリ・マティス《画室の裸婦》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋56
93. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141
94. アンリ・マティス《縞ジャケット》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57
95. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋117
96. アンリ・マティス《石膏のある静物》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋232
97. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 外洋62
98. アルベール・マルケ《出発》/ 1912年 / 墨・紙 / 外洋68
99. アルベール・マルケ《道行く人、ラ・フレット》/ 1946年 / 外洋181
100. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩・カンヴァス / 外洋69
101. アンドレ・ドラン《自画像》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 外洋240
102. アンドレ・ドラン《聖母子》/ 1913年頃 / 油彩・板 / 外洋71

第7室 世紀末から20世紀へー内面を見つめる世界

103. オディロン・ルドン《神秘の語り》/ 油彩・カンヴァス / 外洋178
104. オディロン・ルドン《供物》/ 油彩・厚紙 / 外洋179
105. エドヴァルト・ムンク《病める少女》/ 1894年 / ドライポイント、ルーレット・紙 / 外版178
106. フェリックス・ヴァロットン《入浴(マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第8号所収)》/ 1894年刊 / 木版・紙 / 外版52
107. フェリックス・ヴァロットン《信頼する人》/ 1895年 / 木版・紙 / 外版321
108. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋51
109. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / 外洋142
110. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64

第8室 ビカソからキュビスムの周辺

111. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋43
 112. アンリ・ルソー《牧場》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / 外洋42
 113. ラウル・デュフィ《静物》/ 1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋73
 114. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 外洋123
 115. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / 外彫61
 116. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》/ 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / 外洋173
 117. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143
 118. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / 外洋84
 119. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160
 120. パブロ・ピカソ《馬》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋239
 121. パブロ・ピカソ《画家とモデル》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / 外洋144
 122. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/ 1924年 / 油彩・板 / 外洋86
 123. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/ 油彩・カンヴァス / 外洋91
-

第9室 20世紀美術の広がり

124. モーリス・ユトリロ《サン＝ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・紙 / 外洋77
125. モーリス・ユトリロ《パリのアンジュー河岸》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋185
126. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72
127. 藤田嗣治《自画像》/ 1927年 / エッチング・紙 / 日版1
128. 藤田嗣治《猫のいる静物》/ 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131
129. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋132
130. マルク・シャガール《ヴァンスの新月》/ 1955-56年 / グワッシュ・紙 / 外洋90
131. 国吉康雄《夢》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋304
132. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114
133. ゲオルゲ・グロス《プロムナード》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 外洋167
134. 佐伯祐三《ガラージュ》/ 1927-28年 / 油彩・カンヴァス / 日洋175
135. ジャン・デュビュッフェ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》/ 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192
136. ジャン・デュビュッフェ《暴動》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋193
137. ベルナルド・ピュッフェ《アナベル夫人像》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 外洋96

第10室 抽象への道

138. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》/ 1940年 / ミクストメディア・カードボード / 外洋217
139. パウル・クレー《島》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
140. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211
141. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187
142. ハンス・アルトウング《T 1963 K 7》/ 1963年 / アクリル・カンヴァス / 外洋228
143. 斎藤義重《WORK》/ 1961年 / 油彩・合板 / 日洋578
144. 斎藤義重《作品》/ 1965年 / 油彩・合板 / 日洋527
145. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
146. 菅井汲《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋526
147. ピエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
148. ザオ・ウーキー《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197
149. 田中敦子《無題》/ 1965年 / エナメル塗料・カンヴァス / 日洋566

第2室 日本の洋画

150. 浅井忠《グレーの洗濯場》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋290
151. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
152. 藤島武二《黒扇》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
153. 藤島武二《東海旭光》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋51
154. 小出橋重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋137
155. 小出橋重《横たわる裸身》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋140
156. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋143
157. 安井曾太郎《F夫人像》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋589
158. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋217
159. 梅原龍三郎《ノートルダム》/ 1965年 / 油彩・金箔押しした羊皮紙 / 日洋191
160. 岸田劉生《街道（銀座風景）》/ 1911年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋228
161. 岸田劉生《南瓜を持てる女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋293
162. 岸田劉生《麗子坐像》/ 1920年 / 水彩・紙 / 日洋154
163. 古賀春江《遊園地》/ 1926年 / 水彩・紙 / 日洋193

164. 古賀春江《涯しなき逃避》 / 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋166
 165. 古賀春江《感傷の静脈》 / 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋165
 166. 岡鹿之助《雪の発電所》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋297
 167. 関根正二《子供》 / 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋178

特別出品

梅原龍三郎《林檎園》 / 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋464

*すべてブリヂストン美術館蔵。

関連事業：

ギャラリートーク→ p.42

広報記録：

新聞・雑誌：

「西洋近代美術・日本の洋画が充実 ブリヂストン美術館コレクション展 絵画の時間-24のエピソード」
 『MOE』2014年8月号、p.35

「ブリヂストン美術館コレクション展 絵画の時間-24のエピソード」『ふらんす』2014年8月号、p.77

“Time and the Painting: 24 Episodes”, *The Japan Times*, August 1, 2014

「美術・絵画の時間 24のエピソード」『毎日新聞』2014年8月5日

「絵画の時間-24のエピソード ブリヂストン美術館コレクション展」『新美術新聞』2014年8月1・11日合併号

「絵画の時間-24のエピソード展 近代洋画など160点展示」『陸奥新報』2014年8月24日

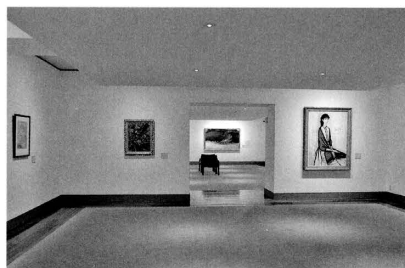
貝塚健「美のコンシェルジュ・お気に入りの名画に会いに行く」『アゴラ』2014年8月、9月号、pp.82-83



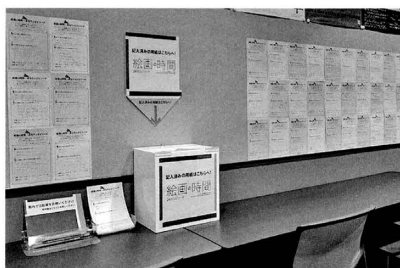
エントランス・パナー



会場風景



会場風景



1階ホール前

ウィレム・デ・クーニング展（テーマ展示）

会期：2014年10月8日(水)－2015年1月12日(月・祝)

会場：第1－2室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

協力：日本航空

特別協力：パナソニック株式会社、AVC ネットワークス社、(株)サビア

概要：ウィレム・デ・クーニング（1904-1997）は、ジャクソン・ポロックと並んで、第二次世界大戦後にアメリカで開花した、抽象表現主義を先導した画家のひとりとしてその名を知られている。その作品は、具象と抽象のはざまの表現と、激しい筆触を特色とする。本展の核を成すのは、デ・クーニングの有数のコレクションを誇る、アメリカ合衆国コロラド州を本拠地とするジョン・アンド・キミコ・パワーズ・コレクション（リョービ・ファウンデーション蔵）からの、1960年代の女性像を中心とした作品群。これら作品群に加えて、ニューヨーク近代美術館が現在所蔵するパワーズ・コレクション旧蔵の素描作品、日本国内の美術館が所蔵する油彩作品、そして個人所蔵の彫刻を併せて紹介した。

出品内容：絵画（油彩・素描）34点、彫刻1点 計35点

入場者総数：38,654人(1日平均476人)



ポスター画像

出品目録

第1室

1. 《マリリン・モンローの習作》 / 1951年 / パステル、鉛筆・3点の素描で構成 / *
2. 《ふたりの女》 / 1951-52年 / 鉛筆、木炭、パステル・ヴェラム紙 / *
3. 《リーグ》 / 1964年 / 油彩・板に貼られた新聞紙 / *
4. 《女》 / 1964年 / 油彩・板 / *
8. 《サッグ・ハーバー》 / 1965年 / 油彩・板に貼られた紙、マスキングテープ / *
9. 《歌う女》 / 1965年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / *
10. 《水の中の女》 / 1965年 / 油彩・板に貼られた紙 / *
12. 《女》 / 1965年 / 鉛筆・紙 / *
13. 《女》 / 1965年 / 鉛筆・紙 / *
14. 《青い眼の女》 / 1965年 / 油彩・ヴェラム紙 / *

第2室

5. 《頭部》 / 1965年 / 木炭、パステル・紙 / *
6. 《無題（女の頭部）》 / 1965年 / リトグラフ / *
7. 《茶色の髪の子》 / 1965年 / 木炭、パステル・紙 / *
11. 《水の中の女》 / 1965年 / 油彩・板に貼られた紙 / *
15. 《女》 / 1965年 / 木炭・半透明紙 / ニューヨーク近代美術館
16. 《ふたりの女》 / 1965年 / 油彩・板に貼られた紙 / *
17. 《ふたりの女》 / 1965年 / 鉛筆・紙 / *

18. 《〈ふたりの女〉(1965年)の習作》 / 1965年 / 鉛筆・紙 / *
19. 《風景の中の女》 / 1966年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 東京国立近代美術館
20. 《無題(女)》 / 1966-67年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 東京都現代美術館
21. 《無題》 / 1966年 / 油彩・板に貼られたタオル地 / *
22. 《無題》 / 1966年 / 鉛筆・紙 / *
23. 《無題》 / 1966年 / 木炭、パステル・紙 / *
24. 《女》 / 1966年 / 鉛筆・紙 / *
25. 《無題(女)》 / 1966年 / 鉛筆・紙 / *
26. 《二人の人物》 / 1967年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 豊田市美術館
27. 《風景の中の女VI》 / 1968年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 広島市現代美術館
28. 《無題》 / 1968年 / 木炭、油彩・パーチメントペーパー / *
29. 《無題》 / 1968年 / 木炭、油彩・パーチメントペーパー / *
30. 《無題》 / 1969年 / 油彩・板に貼られた紙 / *
31. 《無題》 / 1969年 / 油彩・板に貼られた和紙 / *
32. 《記号の女Ⅲ》 / 1969年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 公益財団法人池田20世紀美術館
33. 《無題》 / 1969年 / 木炭・パーチメントペーパー / *
34. 《水》 / 1970年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 国立国際美術館
35. 《座る女》 / 1969-80年 / ブロンズ / 個人蔵

*は、リョービ・ファウンデーション所蔵。

関連事業：

パナソニック4Kタブレットによる所蔵作品画像観賞システムと LIAM（超高精細大型スキャナー）による所蔵作品画像観賞システム

第6室で、タブレット端末を用いたブリヂストン美術館の所蔵品の高精細画像のプレゼンテーションを行った。機材は、パナソニック株式会社 AVC ネットワークス社の協力を得て、パナソニックの「タフパッド4K UT-MB 5」を使用。ブリヂストン美術館とパナソニックは、今回の展示に併せて、このタブレットPCを用いた所蔵品のデジタル観賞システムを共同で制作した。

4台使用している4Kタブレット端末のうちの1台では、最新の高精細スキャニングによるコレクション画像を提示。このタブレットにおさめられたコレクションの画像は、(株)サビアの協力を得て、超高精細大型スキャナー「LIAM (リアム)」を用い、光学1,000 dpi で撮影されたものである。



土曜講座「ウィレム・デ・クーニング」→ p.42
ギャラリー・トーク→ p.42

マイケル・フィンドレー特別講演会

「デ・クーニングとパワーズ・コレクション、そして1960年代のアメリカ美術」

講演者：マイケル・フィンドレー(ニューヨーク、アクアベラ・ギャラリー ディレクター)

通訳：横田佳世子

日時：10月10日(金)18:00-19:30

会場：ブリヂストン美術館ホール

定員：130名



ウィレム・デ・クーニング スペシャル・ナイト

「ナカムラクニオ(6次元店主/映像ディレクター)による『デ・クーニングから読み解く抽象絵画史』」

日時：11月19日(木)18:30-20:30

会場：ブリヂストン美術館展示室

定員：30名



広報記録：

新聞・雑誌：

新畑泰秀「ウィレム・デ・クーニング展 国内の美術館では初の個展」『新美術新聞』2014年10月1日

新畑泰秀「ウィレム・デ・クーニング展」『美術の窓』2014年10月号、p.148

「戦後の抽象表現主義 激しい筆触と強烈な色彩 1960年代の女性像」『自動車タイヤ新聞』2014年10月8日・15日合併号

アートテラー・とに～「4で知るアート・事前の知識が大切」『朝日新聞』2014年10月22日夕刊

渋谷和彦「デ・クーニング展 60年代の女性像中心 ブリヂストン美術館」『産経新聞』2014年10月23日

「東京美術散歩・ブリヂストン美術館」『ミセス』2014年11月号、p.258

「ウィレム・デ・クーニング展」『ART NAVI』2014年11月号、p.13

鈴木芳雄「色彩や力強い筆触が女性美を礼賛する？」『Harper's BAZZAR』2014年11月号、p.337

星野知子「アートをめぐる旅・私の好きな美術館」『ゆうゆう』2014年11月号、pp.72-73

中村英樹「美術評・ウィレム・デ・クーニング展 双方向の対話を促す」『東京新聞』2014年11月7日夕刊

C. B. Liddell, "Beneath the disarray lies a struggle", *The Japan Times*, November 7, 2015

窪田直子「フォルムを巡る実験 デ・クーニング展」『日本経済新聞』2014年11月12日

"WHAT'S GOING ON? Willem de Kooning From the John and Kimiko Powers Collection", *Tokyo Notice Board*, November 14, 2014, p.28

藤原えりみ「止めどなく膨張し、融解する身体『ウィレム・デ・クーニング展』」『美術手帖』2014年12月号、pp.250-252

武井地子「アート追考ー光と翳ー抽象と具象の狭間」『arch』2014年12月号、p.24

本江邦夫「Art・『ウィレム・デ・クーニング展』」『中央公論』2014年12月号、p.144

KAORU「こちら ART 探偵社！ vol.79・今月はウィレム・デ・クーニング」『BAILA』2014年12月号、p.25

大西若人「評・ウィレム・デ・クーニング展 人物を解体 色に抽象化」『朝日新聞』2014年12月3日夕刊

大島徹也「デ・クーニングを見つめ直す 二つの次元・モチーフの往来」『読売新聞』2014年12月4日

学芸通信社「ブリヂストン美術館で『デ・クーニング展』」『三陸新報』2014年12月5日（他、地方紙に配信）
堀越千秋「美を見て死ぬ vol.39 ウィレム・デ・クーニング 存在つまり世界を語る」『週刊朝日』2014年12月12日号、p.147

岸桂子「アート小路・ウィレム・デ・クーニング展 新時代の女性像」『毎日新聞』2014年12月22日夕刊

中野中「美術館で会いましょうウィレム・デ・クーニング展」『公明グラフ』2015年冬季号、p.41

宮田徹也「『裏切り者』の魅力」『新かながわ』2015年1月11日

平野啓一郎「クロスボーダーレビュー 小説家 平野啓一郎が見た美術展ウィレム・デ・クーニング」『日本経済新聞』2015年1月8日

坪内祐三「坪内洋三の美術批評 眼は行動する no. 129」『週刊ポスト』2015年1月23日号、p.118

テレビ・ラジオ：

「日曜美術館」（アートシーン）NHK E テレ、2014年11月9日放映

「アートステージ～美の饗宴～」TOKYO MX、2014年11月9日放映

WEB：

スガダイロー「40年振りにやってきた巨匠画家『ウィレム・デ・クーニング展』」CINRA.NET

http://www.cinra.net/column/willemdekooning_report

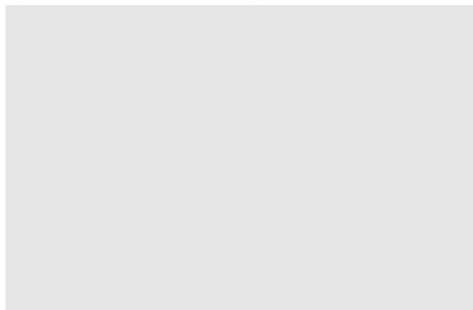
「ウィレム・デ・クーニング展@ブリヂストン美術館」ART iT

<http://www.art-it.asia/top/>

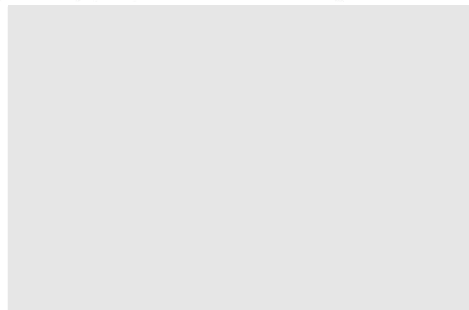
「東京・京橋で『ウィレム・デ・クーニング展』－日本未公開の27作品を展示」FASHION PRESS

<http://www.fashion-press.net/>

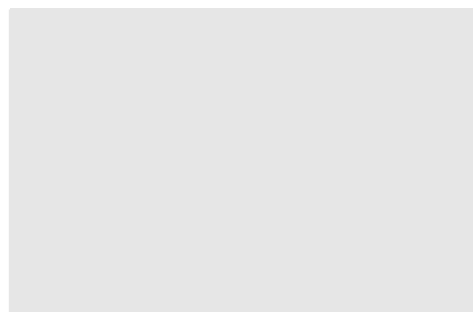
(c) 2014 The Willem de Kooning Foundation, New York/ Artists Rights Society (ARS), New York/ JASPAR, Tokyo D 0694



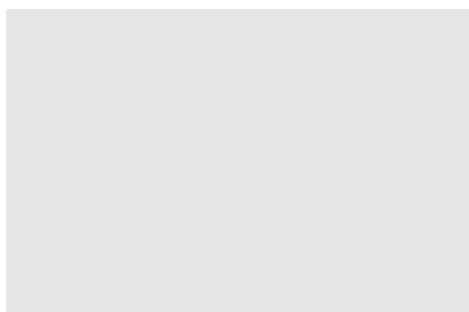
会場風景



会場風景



ウインドウ装飾



エントランス・バナー

はじめての美術館〈コレクション展示〉

会期：2014年1月11日(土)－4月13日(日)

会場：本館、別館

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：風景やグルメ、音楽、花、散歩といった気軽におでかけ気分を味わえるような親しみやすい雰囲気の作品126点を、「おめかししましょ」「たべたり、のんだり」「きこえてくるよ」「旅にでよう」「動物みつけた」「部屋のなか」「シカク・まる・ロッカケイ」「お散歩」「大きかったり、小さかったり」の9つのテーマで展示した。美術館ははじめてという人、なかでも乳幼児とその家族という新たな来館者層を意識して企画した展覧会。

出品内容：油彩等82点、水彩等18点、版画10点、書画8点、工芸等8点
計126点

入場者総数：8,095人(1日平均100人)



ポスター画像

出品目録：

1. おめかししましょ

1. 山下新太郎《山下みね八歳像》 / 1930年 / パステル、鉛筆・紙 / 日洋436
2. 満谷国四郎《裸婦》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋69
3. 藤島武二《チョチャラ》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋25
4. 山下新太郎《ブルターニュの女》 / 1908年 / 油彩・板 / 日洋206
5. 片多徳郎《芙蓉》 / 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋147
6. 青山熊治《男の像》 / 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋135
7. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
8. 清水多嘉示《衣裳室》 / 1926年 / 油彩・板 / 日洋472
9. 山下新太郎《ヴェラスケス〈マルガリータ女王〉の模写》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋391
10. 山下新太郎《ヴェラスケス〈王妃マリアーナ・デ・アウストリア〉の模写》 / 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋392
11. 原田直次郎《童女図》 / 1885年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋6
12. 安井曾太郎《玉蟲先生像》 / 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋144
13. 青木繁《わだつみのいろこの宮》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104

2. たべたり、のんだり

14. 荻須高德《角の居酒屋》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋281
15. 平賀亀祐《アペリチフの時間》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋150
16. 梅原龍三郎《静物（茄子と南瓜）》 / 1951年 / デトランプ・紙 / 日洋273
17. 小磯良平《二人》 / 1954年 / リトグラフ / 日版131
18. 北川民次《ざくろを持つ女》 / 1954年 / リトグラフ / 日版122
19. 山村秀一《さば》 / 1965年 / 水彩・紙 / 日洋514
20. 青木繁《海の幸》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95

-
21. 松田諦晶《野菜果物》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋313
 22. 梅原龍三郎《静物（りんごと梨）》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋270
 23. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋268
 24. 佐伯祐三《休息（鉄道工夫）》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋188
 25. 松本英一郎《平均的肥満体 No.9-J》/ 1967年 / 油彩・カンヴァス / 日洋554
 26. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
 27. 櫻井晨正《キャバツ測量報告》/ 1977年 / アクリル、色鉛筆、コンテ・カンヴァス / 日洋294

3. きこえてくるよ

28. 金山平三《習作・女》/ 1915-34年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋222
29. 伊原宇三郎《椅子によれる》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋277
30. 山下新太郎《見物席の一隅、テアトル・ド・ラ・ゲート》/ 1932年 / 油彩・板 / 日洋428
31. 和田英作《『コロークカステル・ガンドルフォの思い出』の模写》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋390
32. 島村三七雄《ルノワール〈ムーラン・ド・ラ・ギャレット〉の模写》/ 油彩・カンヴァス / 日洋411
33. 中西利雄《ピアノのある部屋》/ 1947年 / 水彩・紙 / 日洋181
34. 山下新太郎《フランス人形》/ 水彩、鉛筆・紙 / 日洋441
35. 藤島武二《琉球の女》/ 1936年 / パステル・紙 / 日洋54
36. 藤島武二《琉球の女》/ 1936年 / 鉛筆・紙 / 日洋55
37. 和田三造《『昭和職業絵尽第二輯』ダンサー》/ 1940-41年 / 木版 / 日版105
38. 和田三造《『昭和職業絵尽』洋楽師》/ 1939-40年 / 木版 / 日版73
39. 和田三造《『昭和職業絵尽第二輯』琵琶師》/ 1940-41年 / 木版 / 日版107
40. 和田三造《『昭和職業絵尽』虚無僧》/ 1939-40年 / 木版 / 日版90
41. 青木繁《春》/ 1904年 / 水彩、パステル・紙 / 日洋92
42. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
43. 古賀春江《ピカソ〈赤い布の上のギター〉の模写》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / 日洋323
44. 安井曾太郎《レコードを聴く人》/ 1935年 / 木版 / 日版35
45. 井上三綱《殷殷と鐘がなる》/ 1974年 / 油彩、墨、コラージュ・紙 / 日洋337

4. 旅にしよう

46. 高田力蔵《ターナー〈雨・蒸気・速力〉の模写》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 日洋409
 47. 林倭衛《サント・ヴィクトワール》/ 1925-29年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋170
 48. 藤島武二《ヴェルサイユ風景》/ 1906-07年 / 油彩・カンヴァス / 日洋21
 49. 吉田博《ウダイプール宮殿》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋248
 50. 高島野十郎《ベニスの昼》/ 1930-33年頃 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋467
 51. 高田力蔵《アテネのエレクテイオン》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋385
 52. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋1
 53. 和田英作《早春（富士）》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋66
 54. 松田諦晶《伯耆大山》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / 日洋344
 55. 坂宗一《久住（晩秋）》/ 油彩・カンヴァス（板に貼付） / 日洋510
 56. 小松清次《由布湖にかかった橋と由布岳》/ 油彩・カンヴァス / 日洋469
 57. 坂本繁二郎《放牧二馬》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 58. 吉田博《上高地》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋250
 59. 中沢弘光《ミラノ》/ 1922年 / 鉛筆、水彩・紙 / 日洋74
 60. 中沢弘光《ローマ》/ 1922年 / 鉛筆、水彩・紙 / 日洋75
-

-
61. 中沢弘光《ヴェネツィア》/ 1922年 / 水彩、チョーク・紙 / 日洋73
 62. 中沢弘光《ヴェネツィア》/ 1922年 / 水彩・紙 / 日洋76
 63. 中沢弘光《ナポリ》/ 1922年 / 水彩・紙 / 日洋78

5. 動物みつけた

64. 古賀春江《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋164
65. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
66. 藤田嗣治《猫》/ 1934年 / 胡粉、墨、顔彩・和紙 / 日洋262
67. 藤田嗣治《猫》/ 銅版（エッチング）/ 日版3
68. 古賀春江《〈檻〉（『東京パック』表紙）のためのスケッチ》/ 1929年 / 水彩・紙 / 日洋365
69. 益田義信《籠の鳥》/ 1954年 / リトグラフ / 日版134
70. 海老原喜之助《まつり》/ 1954年 / リトグラフ / 日版132
71. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋155
72. 脇田和《鳥を飼う人》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋186
73. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
74. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
75. 松本英一郎《花と雲と牛》/ 1998年 / 油彩・カンヴァス / 日洋557
76. 櫻井晨正《Miki 測量報告》/ 1977年 / アクリル、色鉛筆、コンテ・カンヴァス / 日洋295

6. 部屋のなか

77. 藤田嗣治《室内》/ 1943年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋134
78. 満谷国四郎《坐婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋67
79. 満谷国四郎《ばら（絶筆）》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋71
80. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
81. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋203
82. 児島善三郎《立つ》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋495
83. 坂本繁二郎《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋112
84. 山下新太郎《端午》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋423
85. 遠山五郎《婦人読書図》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋146
86. 藤田嗣治《人形を抱く子供》/ 1948年 / 墨・紙 / 日洋130
87. 石川寅治《農事忙》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / 日洋81

7. シカク・まる・ロッカクケイ

88. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 日洋184
89. 斎藤義重《作品》/ 1961年 / 油彩・合板 / BMA / 日洋524
90. 野見山暁治《かけがえのない空》/ 2011年 / 油彩・カンヴァス / 日洋588
91. 白髪一雄《白い扇》/ 1965年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋543
92. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋187
93. 村井正誠《人びと》/ 1983年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋549
94. 川端実《作品》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋569

8. お散歩

95. 古賀春江《散歩》/ 1932年頃 / 水彩・紙 / 日洋584
96. 山下新太郎《和子像》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋425
97. 辻永《春（パリ郊外）》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋117

-
98. 牧野虎雄《ひまわり》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋198
 99. 坂本繁二郎《バリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
 100. 松本英一郎《さくら・うし 95-1》/ 1995年 / 油彩・カンヴァス / 日洋555
 101. 松本英一郎《さくら・うし 95-2》/ 1995年 / 油彩・カンヴァス / 日洋556
 102. 伊東静尾《土 (A)》/ 1961年 / 油彩・板 / 日洋341
 103. 山下新太郎《山下百合子像》/ 1919年頃 / 油彩・板 / 日洋424
 104. 藤田嗣治《カルポーの公園》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋133
 105. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/ 1913年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋68
 106. 坂本繁二郎《窓の馬》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 107. 鱸利彦《コロロくモルトフォンテーヌの思い出》の模写 / 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋394
 108. 佐伯祐三《コルドヌリ (靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173
 109. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176
 110. 猪熊弦一郎《青い星座》/ 1983年 / 油彩・カンヴァス / 日洋484

9. 大きかったり、小さかったり

111. 植松包美《子の日飾棚写し》/ 1920年 / 木製漆塗 / 漆器16
112. 筆谷等観《吉野山春日野凶屏風》/ 紙本金地著色 / 日書79
113. 日本 有田《色絵竹梅虎文六角瓶》/ 江戸時代 1670-1700年 / 磁器 / 陶器209
114. 狩野典信《墨松墨梅凶屏風》/ 江戸時代 18世紀後半 / 紙本金地墨画 / 日書52
115. 《唐子蓋置》/ 銅 / 雑76
116. イラン《青釉黒彩草花魚文壺》/ 20世紀頃 / 陶器 / 陶器204
117. イラン サーリー《白地多彩鳥文鉢》/ 10-11世紀 / 陶器 / 陶器116
118. イラン ガルス《白搔落象文鉢》/ セルジューク朝 11-12世紀 / 陶器 / 陶器117
119. 中国《三彩馬》/ 唐時代 / 陶器 / 陶器198
120. 豊田勝秋《春日》/ 1930年 / 銅 / 雑46
121. 狩野周信《琴高仙人図》/ 江戸時代 17世紀末-18世紀初頭 / 絹本墨画 / 日書51
122. 富田溪仙《梅鶴》/ 絹本著色 / 日書84
123. 富田溪仙《宮島》/ 絹本著色 / 日書85
124. 富田溪仙《手向山春雪図》/ 絹本著色 / 日書86
125. 富田溪仙《聖人観瀑図》/ 絹本著色 / 日書83
126. 平福百穂《獅子》/ 絹本墨画 / 日書81

*BMA はブリヂストン美術館所蔵、寄託作品は石橋美術館寄託作品、その他は石橋美術館所蔵であることを示す。

関連事業：

関連イベント → p.47

ギャラリートーク → p.47

広報記録：

新聞・雑誌：

森田明理「『はじめての美術館』開催 石橋美術館、4月まで」『西日本新聞』2014年1月28日筑後版

白石知子「収蔵品活用“初心者”に照準 石橋 親子で楽しむ◆都城市『美とは何?』問う」『読売新聞』2014

年2月22日

安斎耕一「イイかも！ 石橋美術館『はじめての美術館』子どもと一緒に楽しむ企画展」『朝日新聞』2014年3月20日

テレビ・ラジオ：

「Top of the Morning」Love FM 2014年3月4日放送

「ルックアップふくおか 金曜日 週末チェックウ！」TVQ 2014年3月28日放映



会場風景



会場風景



会場風景

アートで対決〈コレクション展示〉

会期：2014年4月26日(土)－9月28日(日)

会場：本館、別館

主催：石橋財団石橋美術館 / 朝日新聞社 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：「青木繁と坂本繁二郎」、「古賀春江と松田諦晶」といった画家と画家の対決、「日本対西洋」、「静と動」、「一と多」、「明と暗」といった作品同士の対決など、15のシーン＝テーマを設け、対比を楽しみながら美術のおもしろさや作品の意外な面に気づいてもらおうという企画。石橋コレクションの中から201点（石橋美術館作品157点、ブリヂストン美術館作品44点）を選び、2期に分けて展示した。

1期：4月26日－7月21日、2期：7月26日－9月28日

出品内容：油彩129点、水彩・素描19点、書画10点、彫刻2点、工芸25点、版画14点、資料2点 計201点

入場者総数：23,304人(1日平均175人)

ポスター画像

出品目録：

西洋×日本

1. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / BMA / 外洋159
2. ジョージ・スミス《婦人像》/ 1866年 / 油彩・板 / BMA / 外洋147 / 1期のみ
3. マックス・リーバーマン《イタリアの少女》/ 1878年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋44
4. ジョルジュ・ピゴール《日本の女》/ 油彩・カンヴァス / IMA / 外洋111
5. 山下新太郎《ベラスケス (?)〈王妃マリアーナ・デ・アウストリア〉の模写》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋392 / 2期のみ
6. 伊原宇三郎《ティツィアーノ〈フローラ〉の模写》/ 1958-59年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋393
7. トマス・ゲインズバラ《婦人像》/ 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋176
8. 原田直次郎《童女図》/ 1885年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋6
9. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋7
10. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋195
11. 坂本繁二郎《老婆》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋573
12. 片多徳郎《芙蓉》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋147
13. 岸田劉生《画家の妻》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋229

パリ×巴里1 (1期のみ)

14. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋43
15. モーリス・ド・ヴラマンク《風景》/ 水彩・紙 / BMA / 外洋70
16. 平賀亀祐《アペリチフの時間》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋150
17. 平賀亀祐《古い巴里の街角》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋151
18. 佐伯祐三《コルドヌリ (靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋173
19. 佐伯祐三《テラスの広告》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋174

-
20. 佐伯祐三《広告貼り》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋176
 21. 佐伯祐三《休息（鉄道工夫）》 / 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋188
 22. 岡鹿之助《セーヌ河畔》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋583
 23. 荻須高德《角の居酒屋》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋281
 24. 荻須高德《巴里風景》 / 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / IMA / 日洋282
 25. 荻須高德《巴里風景》 / 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / IMA / 日洋283
 26. 荻須高德《巴里風景》 / 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / IMA / 日洋284
 27. 荻須高德《巴里風景》 / 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / IMA / 日洋285

パリ×巴里2（2期のみ）

28. 藤田嗣治《少女像》 / 1927年 / 鉛筆・紙 / IMA / 日洋126
29. 藤田嗣治《二人の裸婦》 / 1927年 / エッチング・絹 / IMA / 日版2
30. 平賀亀祐《アペリチフの時間》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋150 / 1期から
31. 佐伯祐三《コルドヌリ（靴屋）》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋173 / 1期から
32. 佐伯祐三《テラスの広告》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋174 / 1期から
33. 佐伯祐三《広告貼り》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋176 / 1期から
34. 佐伯祐三《休息（鉄道工夫）》 / 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋188 / 1期から
35. 岡鹿之助《セーヌ河畔》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋583 / 1期から
36. 坂本繁二郎《読書の女》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋112
37. 青山熊治《男の像》 / 1921年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋135
38. 遠山五郎《婦人読書図》 / 1922年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋146
39. 伊原宇三郎《椅子によれる》 / 1929年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋277
40. 林俊衛《サント・ヴィクトワール》 / 1925-29年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋170

南の風景×北の風景

41. 満谷国四郎《瀬戸内海風景》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋234
42. 石井柏亭《ソレント》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋108
43. 石井柏亭《傘松（ナポリ風景）》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋109
44. 梅原龍三郎《ナポリよりソレントを望む》 / 1921年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋271
45. 梅原龍三郎《桜島》 / 1935年 / 油彩・紙 / IMA / 日洋274
46. 伊原宇三郎《アルル風景》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋276
47. 青山義雄《南仏アルプス遠望》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋160
48. 三岸節子《フランス風景（カーニユ=シユル=メール）》 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋287
49. 金山平三《雪丈余》 / 1934年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋220
50. 金山平三《田沢の春》 / 1941年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋119
51. 金山平三《雪の大石田》 / 1945-56年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋221
52. 金山平三《石母田の堤》 / 1952-55年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋121
53. 藤田嗣治《カルポーの公園》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋133 / 2期のみ
54. 梅原龍三郎《軽井沢秋景》 / 1972年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋224
55. 岡鹿之助《雪の発電所》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋297 / 1期のみ

黒×赤

56. ギリシア《エトルリア後期黒絵式頸部アンフォラ〈戦士図〉》 / 紀元前4世紀初頭 / BMA / 陶器61
57. 楽吉左衛門（9代）了入《黒楽茶碗》 / 江戸時代 19世紀初頭 / 陶器 / IMA / 陶器273
58. 坂本繁二郎《牛》 / 1920年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋301

-
59. 須田国太郎《櫛原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋157
 60. マリノ・マリニ《黒い騎手》/ 1960年 / カラーリトグラフ / BMA / 外版160-46 / 2期のみ
 61. 田渕安一《孤独の山 Montagne Solitaire》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋525
 62. ヘンリー・ムア《赤い映像の上の黒》/ 1963年 / リトグラフ / BMA / 外版159-4 / 2期のみ
 63. マリノ・マリニ《赤と黒の騎手》/ 1955年 / カラーリトグラフ / BMA / 外版160-30 / 1期のみ
 64. 「モノポリの画家」《アブリア赤絵式ペリケ〈婦人図〉》/ 紀元前350年頃 / BMA / 陶器95
 65. 千宗左（6代）覚々斎《赤楽雁文茶碗 銘「武蔵野」》/ 江戸時代 18世紀初頭 / 陶器 / IMA / 陶器274
 66. 楽吉左衛門（12代）弘入《赤楽三つ葉蓋置》/ 陶器 / IMA / 雑77
 67. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / IMA / 日洋226
 68. 斎藤義重《作品》/ 1961年 / 油彩・合板 / BMA / 日洋524
 69. 佐藤敬《作品》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋490
 70. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋187
 71. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / IMA / 日洋184
 72. 野見山暁治《かけがえのない空》/ 2011年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋588
 73. エミリー・カーム・ウンワリイ《無題》/ 1996年 / 合成ポリマー絵具・アーティストポリエステル / BMA / 外洋223

青木繁×坂本繁二郎

74. 青木繁《車中風景》/ 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋496 / 1期のみ
75. 青木繁《汗の妙義山スケッチ行》/ 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 寄託作品 / 2期のみ
76. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 色鉛筆・紙 / IMA / 日洋86 / 1期のみ
77. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋87
78. 青木繁《閻威弥尼》/ 1903年 / 油彩・板 / IMA / 日洋89
79. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / IMA / 日洋94
80. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋95
81. 青木繁《木立（森の暮色）》/ 1904年 / 油彩・板 / IMA / 日洋97
82. 青木繁《自画像》/ 1904年 / 鉛筆・紙 / IMA / 寄託作品 / 2期のみ
83. 青木繁《光明皇后》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋102
84. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋197
85. 坂本繁二郎《町裏》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 寄託作品
86. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋204
87. 坂本繁二郎《あらしの海》/ 1917年 / 油彩・板 / IMA / 日洋110
88. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋300
89. 坂本繁二郎《自画像鏡像》/ 1929年 / 油彩・紙 / IMA / 日洋113
90. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋114
91. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 寄託作品
92. 坂本繁二郎《能面と鼓の胴》/ 1962年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋568

静×動（1期のみ）

93. 山崎朝雲《猪》/ ブロンズ / IMA / 日彫13
94. アンリ・マティス《ソファの踊り子》/ 1927年 / リトグラフ / BMA / 外版60
95. パブロ・ピカソ《休息する彫刻家、横たわるモデルと彫刻（『ヴォラールのための連作』より）》/ 1933年 / エッチング / BMA / 外版96
96. 坂本繁二郎《放牧二馬》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 寄託作品

-
97. 松本英一郎《退屈な風景 茶畑》/ 1974年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋553
 98. アルフレッド・シスレー《レディーズ・コーヴ、ウェールズ》/ 1897年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋133
 99. ウォルター・クレイン《シンバルを持つ踊り子 (マルチ版『レスタンプ・オリジナル』第9号所収)》/ 1895年刊 / リトグラフ / BMA / 外版21
 100. 青木繁《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋90
 101. 坂本繁二郎《肉弾三勇士》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋115
 102. 坂本繁二郎《水より上る馬》/ 1935年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋449
 103. 長谷川栄作《黎明の舞》/ ブロンズ / IMA / 日彫12
 104. 井上三綱《ドン・キホーテ》/ 1954年 / 石膏、墨・紙 / IMA / 日洋333

古賀春江×松田諦晶 (2期のみ)

105. 古賀春江《柳川風景》/ 1914年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋523
106. 古賀春江《自画像》/ 1915-16年頃 / 水彩・紙 / IMA / 日洋388
107. 古賀春江《無題》/ 1921年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋345
108. 古賀春江《二階より》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋593
109. 古賀春江《スケッチブック》/ 1922年 / IMA / 資料
110. 古賀春江《海女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋169
111. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋162
112. 松田諦晶《刈跡》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋506
113. 松田諦晶《コンポジション》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋572
114. 松田諦晶《スケッチブック》/ 1922年 / IMA / 資料
115. 松田諦晶《野菜果物》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋313
116. 松田諦晶《自画像》/ 1929年 / 油彩・板 / IMA / 日洋312
117. 松田諦晶《田植どき》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 寄託作品

一×多 (1期のみ)

118. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋170
119. 青木繁《顔》/ 1903-04年 / 色鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋567
120. 坂本繁二郎《窓の馬》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 寄託作品
121. 坂本繁二郎《月》/ 1964年頃 / 色鉛筆、水彩・紙 / IMA / 日洋540
122. 長谷川潔《一樹 (ニレの木)》/ 1941年 / ドライポイント / IMA / 日版5
123. 白髪一雄《白い扇》/ 1965年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋543
124. フェリックス・ヴァロトン《街頭デモ (マルチ版『レスタンプ・オリジナル』第1号所収)》/ 1893年刊 / 木版 / BMA / 外版51
125. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 寄託作品
126. 安井曾太郎《水浴裸婦》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋142
127. 古賀春江《海水浴の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋168
128. 井上三綱《裸婦群像》/ 1955年 / 石膏、水彩・紙 / IMA / 日洋334-1

明×暗 (2期のみ)

129. 藤島武二《日の出》/ パステル・紙 / IMA / 日洋239
130. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋49
131. 藤島武二《蒙古の日の出》/ 1937年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋56

-
132. 藤島武二《港の朝陽》/ 1943年 / 油彩・板 / BMA / 日洋59
 133. 横山大観《旭日青波》/ 絹本著色 / IMA / 日書72
 134. 前田青邨《日の出鶴》/ 1965-75年頃 / 紙本著色 / IMA / 日書33
 135. 平野遼《朝》/ 1991年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋532
 136. 日本《夜桜荒磯鉢》/ 昭和時代 / 陶器 / IMA / 陶器224
 137. 青木繁《秋の夜》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / IMA / 日洋88
 138. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋105
 139. 近藤浩一路《暁月》/ 1930年頃 / 紙本墨画 / IMA / 日書30
 140. 安井曾太郎《秋の夜（『別冊文藝春秋』第23号 1951年9月号表紙絵）》/ 1951年 / 油彩・紙 / BMA / 寄託作品
 141. 安井曾太郎《夜景（『文藝春秋』第30巻第10号 1952年7月号表紙絵）》/ 1952年 / 油彩・紙 / BMA / 寄託作品
 142. 安井曾太郎《月（『文藝春秋』第30巻13号 1952年9月号表紙絵）》/ 1952年 / 油彩・紙 / BMA / 寄託作品
 143. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋161

タテ×ヨコ

144. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋1
 145. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋11
 146. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋63
 147. 満谷国四郎《脱衣》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋233
 148. 中沢弘光《思い出（下図）》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋72
 149. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋104
 150. 梅原龍三郎《椿》/ 1944年 / 油彩（岩絵具併用）・紙 / BMA / 日洋272
 151. 児島善三郎《立つ》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋495
 152. ザオ・ウーキー《10.03.76》/ 1976年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋195
 153. 百武兼行《臥裸婦》/ 1881年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋2
 154. ラウル・デュフィ《ポワレの服を着たモデルたち、1923年の競馬場》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋184
 155. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋498
 156. 和田三造《海》/ 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋254
 157. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋159
 158. 古沢岩美《地の塩》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋218

雨上り×雨模様（1期のみ）

159. 竹内栖鳳《溪山雨後》/ 1927年頃 / 紙本墨画 / IMA / 日書20
 160. 横山大観《紉の森 秋雨》/ 1919年 / 絹本著色 / IMA / 日書22
 161. 筆谷等観《山湖雨後》/ 1927-30年頃 / 紙本墨画 / IMA / 日書78
 162. 高田力蔵《雨後のサン=マメス》/ 1967年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋209
 163. オノレ・ドーミエ《鉄砲で雨が追払えたら（『狩獵』より）》/ 1843年 / リトグラフ / BMA / 外版157-1
 164. フランツ・スカルビーナ《雨の辻馬車（『パン』第2年次第1号所収）》/ 1896年刊 / リトグラフ / BMA / 外版196-24
 165. オットー・フィッシャー《雷雨模様（『パン』第2年次第2号所収）》/ 1896年刊 / エッチング / BMA / 外版196-28
-

-
166. 坂本繁二郎《日本風景版画 筑紫之部 筑後川》/ 1918年 / 木版 / IMA / 日版49-4
 167. 安井曾太郎《銀座の雨 (『文藝春秋』第31巻第17号 1953年12月号表紙絵)》/ 1953年 / 油彩・紙 / BMA / 寄託作品
 168. 安井曾太郎《雨の天主堂 (『文藝春秋』第32巻第14号 1954年9月号表紙絵)》/ 1954年 / 油彩・紙 / BMA / 寄託作品
 169. 高田力蔵《ターナー〈雨・蒸気・速力〉の模写》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋409

フジ×富士 (2期のみ)

170. 尾形乾山《不二図》/ 江戸時代 18世紀前半 / 紙本着色 / IMA / 日書50
171. 竹内栖鳳《富嶽図》/ 絹本着色 / IMA / 日書64
172. 竹内栖鳳《秋景富嶽図》/ 1933年 / 紙本着色 / IMA / 日書18
173. 横山大観《神州第一峰》/ 1930年 / 絹本着色 / IMA / 日書23
174. 藤島武二《青富士》/ 1941年 / 油彩・板 / BMA / 日洋58
175. 岡田三郎助《富士山》/ 1918年 / 油彩・板 / IMA / 日洋522
176. 和田英作《早春 (富士)》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋66
177. 吉田博《『富士拾景』朝日》/ 1926年 / 木版 / IMA / 日版69
178. 和田三造《伊豆の富士》/ 1927-30年頃 / 油彩・紙 / IMA / 日洋256

絵画×やきもの

179. カミーユ・コロー《イタリアの女》/ 1826-28年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋6
180. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋28
181. 山下新太郎《和蘭デルフト花瓶と薔薇》/ 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋430
182. 山下新太郎《和蘭水盤と薔薇》/ 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋431
183. 山下新太郎《薔薇》/ 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋432
184. 山下新太郎《供物》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋84
185. 坂本繁二郎《香炉》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 寄託作品
186. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋268
187. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋203
188. 高田力蔵《アングル〈泉〉の模写》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋407
189. イランまたはシリア《青緑釉黒彩壺》/ 13-14世紀 / 陶器 / IMA / 陶器142
190. イラン《ラスター彩人物文鉢》/ 13世紀 / 陶器 / IMA / 陶器119
191. オランダ デルフト《染付山水人物文小壺》/ 17世紀後半 / 磁器 / IMA / 陶器243
192. イラン《動物幾何文嘴形注口把手付壺》/ シアルクⅣ期 紀元前1千年紀 / 土器 / IMA / 陶器115
193. イラン (イラン北部)《嘴形注口把手付壺》/ シアルクⅥ期 紀元前1千年紀 / 土器 / IMA / 陶器180
194. イラン《青緑釉文字文鉢》/ セルジューク朝 12-13世紀 / 陶器 / IMA / 陶器174
195. 日本 有田《色絵紫陽花唐花文鉢》/ 江戸時代 1670-1720年 / 磁器 / IMA / 陶器212
196. 日本 京《色絵赤玉花鳥文鉢》/ 江戸時代 19世紀 / 磁器 / IMA / 陶器214
197. 中国 景德鎮窯《五彩果実文壺》/ 清時代 17世紀 / 磁器 / IMA / 陶器247
198. 酒井田柿右衛門 (14代)《濁手草花文八角蓋物器》/ 昭和時代 / 磁器 / IMA / 陶器222

シンメトリー×アシンメトリー

199. イラン テベ・シアルク《幾何文台付鉢》/ シアルクⅢ期 紀元前4千年紀 / 土器 / IMA / 陶器200
200. イラクまたはイラン《青緑釉耳付壺》/ サーサーン朝 5-7世紀 / 陶器 / IMA / 陶器148
201. 中国《白磁龍耳瓶》/ 唐時代 7-8世紀 / 磁器 / IMA / 陶器228
202. イラン《青緑釉藍黒彩花文瓶》/ セルジューク朝 13世紀 / 陶器 / IMA / 陶器205

- 203. 豊田勝秋《鑄銅花さし》/ 1931年 / 鑄銅 / IMA / 雑47
- 204. シリア・パレスチナ《貼付紐文広口瓶》/ ローマ帝国 4世紀前半 / ガラス / IMA / 雑52
- 205. シリア・パレスチナ《貼付紐文広口瓶》/ ローマ帝国 4世紀前半 / ガラス / IMA / 雑53
- 206. 中国 龍泉窯《青磁鉄斑文瓶（飛青磁花瓶）》/ 元時代 14世紀 / 磁器 / IMA / 陶器233
- 207. 日本 有田《色絵菊流水文皿》/ 江戸時代 1660-1670年 / 磁器 / IMA / 陶器207

*IMA は石橋美術館所蔵、BMA はブリヂストン美術館所蔵、うち寄託作品についてはその旨を記した。
 出品番号と出品点数が異なるのは、1期2期で重複する作品があるため。

関連事業：

- 夏休みこどもプログラム2014 → p.49
- ギャラリートーク → p.47

広報記録：

新聞・雑誌：

- 「絵画比べて楽しもう 『アートで対決』展、あすから石橋美術館で」『朝日新聞』2014年4月25日筑後版
- 「魅惑の15番勝負 比べれば、みえる。』『朝日新聞』2014年5月21日
- 「アートで『新たな』対決 石橋美術館 あすから第2期」『朝日新聞』2014年7月25日筑後版
- 「後期『アートで対決』夏休みプログラムも 石橋美術館」『久留米日日新聞』2014年7月25日



会場風景



会場風景



こどもチラシ

ちよっと気になる絵の履歴〈コレクション展示〉

会期：2014年10月11日(土)～2015年1月12日(月・祝)

会場：本館、別館

主催：石橋財団石橋美術館 / 西日本新聞社 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：作品が美術館に収まる前、どのような人の元を渡ってきたのか、そのとどきに作品がおかれた状況を想像し、楽しんでもらおうと企画した展覧会。展示は、日本近代洋画、書画、工芸など石橋美術館の作品全体で構成。平安時代の書蹟《伊勢集断簡 石山切》の修復を2012年に終えたこともあり、同じく平安期の書蹟《古今和歌集卷一断簡 高野切》と、この二作品をメインに取り上げ、付随資料と併せて詳しく紹介した。

出品内容：油彩・水彩等64点、書画19点、工芸等16点 計99点

入場者総数：11,332人(12月27日まで) (1日平均162人)



ポスター画像

出品目録：

1室

1. 青木繁《自画像》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋87
2. 青木繁《闍威弥尼》 / 1903年 / 油彩・板 / 日洋89
3. 青木繁《女の顔》 / 1904年 / 油彩・板 / 日洋98
4. 青木繁《上京途中スケッチ》 / 1902年 / 鉛筆・紙 / 日洋586
5. 青木繁《海の幸》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
6. 青木繁《海》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
7. 青木繁《輪転》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋90
8. 青木繁《わだつみのいろこの宮》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
9. 青木繁《大穴牟知命》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197

2室

10. 坂本繁二郎《自像》 / 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / 日洋300
11. 坂本繁二郎《柿》 / 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
12. 坂本繁二郎《林檎 蜜柑 柿》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋216
13. 古賀春江《素朴な月夜》 / 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
14. 古賀春江《自画像》 / 1916年 / 水彩・紙(葉書) / 日洋322
15. 古賀春江《街の風景》 / 1923年頃 / 水彩・紙 / 日洋325
16. 古賀春江《静物》 / 1925年頃 / 水彩・紙 / 日洋302
17. 古賀春江《無題》 / 1921年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋345
18. 岸田劉生《麗子像》 / 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226
19. 坂本繁二郎《放牧三馬》 / 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114

3室

20. 青木繁《月下滞船図》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋105

-
21. 青木繁《春》 / 1908年 / 水彩・襖布 / 日洋106
 22. 青木繁《秋》 / 1908年 / 水彩・襖布 / 日洋107
 23. 青木繁《丘に立つ三人》 / 1904年 / 水彩・紙 / 日洋93
 24. 青木繁《光明皇后》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋102
 25. 藤島武二《ヴェルサイユ風景》 / 1906-07年 / 油彩・カンヴァス / 日洋21
 26. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
 27. 藤島武二《屋島よりの遠望》 / 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋50
 28. 藤島武二《天平の面影》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
 29. 伊原宇三郎《椅子によれる》 / 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋277
 30. スペイン《ラスター彩草花文皿》 / イスパニア王国? 16世紀? / 陶器 / 陶器152
 31. 野口小蘗《谿山疊翠図》 / 1899年 / 絹本著色 / 日書17

4室

32. 岡田三郎助《鬢梳く女》 / 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋62
33. ジョルジュ・ピゴール《日本の女》 / 油彩・カンヴァス / 外洋111
34. 安井曾太郎《りんご》 / 1942年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋265
35. 古賀春江《美しき博覧会》 / 1926年 / 水彩・紙 / 日洋321
36. 松田諦晶《刈跡》 / 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋506
37. 藤島武二《唐様三部作》 / 1924年 / 左右：水彩、油彩・紙 中央：水彩、油彩、パステル、木炭、チョーク・紙 / 日洋45
38. 坂本繁二郎《肉弾三勇士》 / 1935年 / 油彩・カンヴァス / 日洋115
39. 坂本繁二郎《牛》 / 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
40. 因陀羅《禅機図断簡 丹霞焼仏図》 / 元時代 14世紀 / 紙本墨画 / 日書100
41. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 17世紀 / 紙本著色 / 日書5
42. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 17世紀 / 紙本著色 / 日書6
43. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 17世紀 / 紙本著色 / 日書7
44. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 17世紀 / 紙本著色 / 日書8
45. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 17世紀 / 紙本金地著色 / 日書9
46. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 17世紀 / 紙本著色 / 日書10
47. 黒田清輝《針仕事》 / 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7

5室

48. 藤島武二《自画像》 / 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋12
49. 藤島武二《イタリアの海》 / 1908-09年 / 油彩・板 / 日洋37
50. 藤島武二《ポンペイ壁画模写》 / 1908年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋44
51. 藤島武二《ポンペイ壁画模写》 / 1908年 / 油彩・板 / 日洋43
52. 藤島武二《ポンペイ》 / 1908-09年 / 油彩・板 / 日洋28
53. 藤島武二《チョチャラ》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋25
54. 藤島武二《雲（ローマ）》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋33
55. 藤島武二《糸杉》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋41
56. 藤島武二《ネミ湖》 / 1908年 / 油彩・板 / 日洋24
57. 藤島武二《ヴィラ・デステの池》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋40
58. 藤島武二《噴水のある池》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋39
59. 藤島武二《池》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋42
60. 藤島武二《噴水》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋20

-
61. 藤島武二《池畔の女》/ 1908-09年 / 油彩・紙 / 日洋36
 62. 藤島武二《蒙古の日の出》/ 1937年 / 油彩・カンヴァス / 日洋56
 63. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋49
 64. 藤島武二《浪（大洗）》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋48

6室

65. 坂本繁二郎《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋112
66. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋268
67. 須田国太郎《禱原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋157
68. イラン（イラン北部）《嘴形注口把手付壺》/ シアルクVI期 紀元前1千年紀 / 土器 / 陶器180
69. 高島野十郎《ベニスの昼》/ 1930-33年頃 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋467
70. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋187
71. 《破れ網に桜花散らし蒔絵弁当箱》/ 近代? / 木製漆塗 / 漆器27
72. 真田幸貫《茶杓 銘「星月夜」》/ 江戸時代 19世紀前半 / 竹 / 雑71
73. 上村松篁《春日》/ 1996年 / 紙本金地著色 / 日書94

7室

74. 佐伯祐三《休息（鉄道工夫）》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋188
75. 平賀亀祐《古い巴里の街角》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋151
76. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋9
77. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
78. イラン スルターナバード《白盛上花鳥文鉢》/ イル・ハーン朝 13-14世紀 / 陶器 / 陶器128
79. 中国 龍泉窯《青磁耳付瓶》/ 元時代 14世紀 / 磁器 / 陶器250
80. 日本 萩《萩茶碗》/ 江戸時代 17世紀 / 陶器 / 陶器275
81. 《棒の先建水》/ 砂張 / 雑75

8室

82. 円山応挙《竹に狗子波に鴨図襖》/ 江戸時代 18世紀後半 / 紙本墨画淡彩 / 日書43
83. 《武蔵野図屏風》/ 江戸時代 17世紀中葉 / 紙本金地著色 / 日書49
84. 雪舟《四季山水図（春幅）》/ 室町時代 15世紀 / 絹本墨画淡彩 / 日書1
85. 雪舟《四季山水図（夏幅）》/ 室町時代 15世紀 / 絹本墨画淡彩 / 日書2
86. 雪舟《四季山水図（秋幅）》/ 室町時代 15世紀 / 絹本墨画淡彩 / 日書3
87. 雪舟《四季山水図（冬幅）》/ 室町時代 15世紀 / 絹本墨画淡彩 / 日書4
88. 中国 龍泉窯《青磁鉄斑文瓶（飛青磁花瓶）》/ 元時代 14世紀 / 磁器 / 陶器233

9室

89. 《古今和歌集卷一断簡 高野切》/ 平安時代 11世紀 / 紙本墨書 / 日書44
90. 《伊勢集断簡 石山切（にさへや）》/ 平安時代 12世紀 / 紙本墨書 / 日書45
91. 《伊勢集断簡 石山切（ももしきの）》/ 平安時代 12世紀 / 紙本墨書 / 日書46
92. 《伊勢集断簡 石山切（みそめすも）》/ 平安時代 12世紀 / 紙本墨書 / 日書47

10室

93. 中国《唐物文琳茶入 銘「宝袋」》/ 元時代 13世紀後半-14世紀 / 陶器 / 陶器268
94. 朝鮮《高麗茶碗》/ 朝鮮時代 15-16世紀 / 陶器 / 陶器254
95. 千宗佐（5代）随流斎《茶杓 銘「碌々」》/ 江戸時代 17世紀後半 / 竹 / 雑73

96. 片桐石州《茶杓 銘「松」》 / 江戸時代 17世紀 / 竹 / 雑72
97. 日本 薩摩・堅野窯《薩摩肩衝茶入 銘「松波」》 / 江戸時代 17世紀初頭 / 陶器 / 陶器270
98. 日本 高取・内ヶ磯窯《高取肩衝茶入》 / 江戸時代 17世紀初頭 / 陶器 / 陶器263
99. 日本 高取・東皿山窯《高取四方耳付建水》 / 江戸時代後期 / 陶器 / 陶器267

*作品はすべて石橋美術館蔵。

関連事業：

美術講座 → p.46

ギャラリートーク → p.47

広報記録：

新聞・雑誌：

「石橋美術館で11日から『ちょっと気になる絵の履歴』以前の所有者などにスポット」『久留米日日新聞』2014年10月5日

「時代の背景をたどる『絵の履歴』展開幕」『西日本新聞』2014年10月12日

「作品運営裏側のぞく」『西日本新聞』2014年10月16日

「石橋美術館『絵の履歴』展に合わせ あすトークイベント 作品に秘められた物語を紹介」『西日本新聞』2014年10月24日 筑後版

「『高野切』の奥深さ解説」『西日本新聞』2014年10月26日 筑後版

「絵は語る①切られてしまった！」『西日本新聞』2014年11月18日 筑後版

「絵は語る②友は才能に魅せられ」『西日本新聞』2014年11月19日 筑後版

「絵は語る③江戸のエンドロール」『西日本新聞』2014年11月21日 筑後版

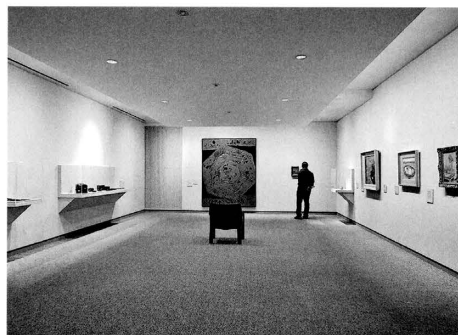
「絵は語る④器に命を掛けた時代」『西日本新聞』2014年11月22日 筑後版

「絵は語る⑤書から文字が消えた」『西日本新聞』2014年11月23日 筑後版

テレビ・ラジオ：

「ルックアップふくおか 金曜日 週末チェックウ！」TVQ 2014年11月7日放映

「日曜美術館」（アートシーン）NHK Eテレ、2014年11月16日放映



会場風景



会場風景

〈土曜講座〉

土曜日 14:00-16:00 ホール

通算回数	月 日	講座題目	講師
《彫刻を知る、学ぶ》			
企画＝賀川恭子			
2282	2014年 2月 8日	本質に迫るかたち—ブランクーシ、ザツキンにみる抽象彫刻への道	山田真規子 氏 (姫路市立美術館学芸員)
2283	2月15日	1889年のオーギュスト・ロダン	島本英明 氏 (ポーラ美術館学芸員)
2284	2月22日	ロダン以後?—プーデルとマイヨール	高橋幸次 氏 (日本大学芸術学部教授)
2285	3月 1日	19世紀の画家と彫刻—ドガを中心に	喜多崎 親 氏 (成城大学文芸学部教授)
《花を愛でる、花を語る》			
企画＝細矢 芳			
2286	2014年 3月15日	花咲く17世紀オランダ—絵画・博物学・園芸	小林頼子 氏 (目白大学教授)
2287	3月22日	印象派が描いた花々	島田紀夫 (プリヂェストン美術館館長)
2288	3月29日	ルドンの植物誌 Flore d'Odilon Redon 「再現と想起というふたつの岸の合流点にやってきた花々」	安井裕雄 氏 (三菱一号館美術館主任学芸員)
2289	4月 5日	浮世絵が語る江戸の花—花見・園芸・花鳥画	日野原健司 氏 (太田記念美術館主幹学芸員)
2290	4月12日	モネ「睡蓮」連作と20世紀美術	南 雄介 氏 (国立新美術館副館長)
《地中海学会春期連続講演会「地中海世界を生きるⅡ」》			
企画＝亀長洋子 氏 (学習院大学教授、地中海学会)			
2291	2014年 4月26日	旅をする文学者—ジェラルド・ド・ネルヴァルと地中海	畑 浩一郎 氏 (聖心女子大学専任講師)
2292	5月 3日	商人になること、商人であること—中世イタリアの事例から	亀長洋子 氏 (学習院大学教授)
2293	5月10日	ルネサンスの画家—聖ルカからアペレスへ?	水野千依 氏 (京都造形芸術大学教授)
2294	5月17日	労働者、失業者であること—エジプトにおける変遷	岩崎えり奈 氏 (上智大学教授)
2295	5月24日	古代ギリシアの女性神官たち	櫻井万里子 氏 (東京大学名誉教授)

《異国趣味とオリエンタリズム》

企画＝貝塚 健

- 2296 2014年 6月14日 「支那服の女」の誘惑—画家、そして知識人男性は《金蓉》に何を見たのか
池田 忍 氏 (千葉大学教授)
- 2297 6月21日 「日本人」はアジアに何を見たのか? ——— 天野一夫 氏 (豊田市美術館チーフキュレーター)
- 2298 6月28日 藤島武二が描いた中国服の女性像 ——— 児島 薫 氏 (実践女子大学教授)
- 2299 7月 5日 アジアを描いた日本の絵画—日本的なオリエンタリズムとは何か?
西原大輔 氏 (広島大学教授)
- 2300 7月12日 「植民地絵画」の完成：偽「満州国」オリエンタリズム考
稲賀繁美 氏 (国際日本文化研究センター教授)

《地中海学会秋期連続講演会「芸術家と地中海都市Ⅳ」》

企画＝秋山 聰 氏 (東京大学大学院人文社会系研究科准教授、地中海学会)

- 2301 2014年10月11日 13世紀ローマとアルノルフォ・ディ・カンビオー—教皇庁の墓碑彫刻を中心に
児嶋由枝 氏 (上智大学准教授)
- 2302 10月18日 水都ヴェネツィアを彩った建築家たち ——— 陣内秀信 氏 (法政大学教授)
- 2303 10月25日 ルネサンス宮廷都市と芸術家たち ——— 京谷啓徳 氏 (九州大学准教授)
- 2304 11月 1日 フランドルの画家たちとイタリア諸都市—ブリュージュを中心
廣川暁生 氏 (Bunkamura ザ・ミュージアム学芸員)
- 2305 11月 8日 “ゴシックの都” ナポリをつくった芸術家たち
谷古宇 尚 氏 (北海道大学教授)

《ウィレム・デ・クーニング》

企画＝新畑泰秀

- 2306 2014年11月22日 デ・クーニングと戦後アメリカ美術 ——— 大島徹也 氏 (愛知県美術館主任学芸員)
- 2307 11月29日 デ・クーニングと抽象表現主義の主題 ——— 平野千枝子 氏 (山梨大学准教授)
- 2308 12月 6日 ジョン・アンド・キミコ・パワーズ・コレクションと国内美術館のデ・クーニング
新畑泰秀 (ブリヂストン美術館学芸課長)

〈ギャラリートーク〉

展示室でのギャラリートークを毎週水曜日と金曜日、下記の時間帯に当館学芸員が実施した。

水曜日、金曜日 15:00-16:00

〈ファミリープログラム〉

小学生を含む家族を対象にしたプログラムを、下記の時間帯に実施した。

日曜日10:30-12:30

- 2014年 1月26日 「彫刻をみる まえから、よこから、うしろから？」
6組19人（子ども9人、大人10人）
- 2月 2日 「彫刻をみる まえから、よこから、うしろから？」
6組16人（子ども7人、大人9人）
- 2月 9日 「彫刻をみる まえから、よこから、うしろから？」
4組9人（子ども5人、大人4人）
- 2月16日 「彫刻をみる まえから、よこから、うしろから？」
5組15人（子ども8人、大人7人）
- 3月 9日 「絵のなかを旅しよう」
6組15人（子ども6人、大人9人）
- 3月16日 「絵のなかを旅しよう」
5組12人（子ども7人、大人5人）
- 3月23日 「絵のなかを旅しよう」
2組5人（子ども2人、大人3人）
- 3月30日 「絵のなかを旅しよう」
5組15人（子ども8人、大人7人）
- 5月11日 「絵になる服、どんな着ごち？」
5組12人（子ども5人、大人7人）
- 5月18日 「絵になる服、どんな着ごち？」
4組10人（子ども4人、大人6人）
- 5月25日 「絵になる服、どんな着ごち？」
6組16人（子ども7人、大人9人）
- 6月 1日 「絵になる服、どんな着ごち？」
1組2人（子ども1人、大人1人）
- 6月22日 「まる、マル、丸」
3組6人（子ども3人、大人3人）
- 6月29日 「まる、マル、丸」
7組15人（子ども8人、大人7人）
- 7月 6日 「まる、マル、丸」
5組13人（子ども6人、大人7人）
- 7月13日 「まる、マル、丸」
5組12人（子ども5人、大人7人）
- 8月24日 「描かれたひととき」
3組8人（子ども4人、大人4人）
- 8月31日 「描かれたひととき」
6組14人（子ども7人、大人7人）
- 9月 7日 「描かれたひととき」
6組17人（子ども8人、大人9人）
- 9月14日 「描かれたひととき」
-

-
- 7組16人 (子ども8人、大人8人)
10月19日 「筆あとをさがせ！」
3組6人 (子ども3人、大人3人)
10月26日 「筆あとをさがせ！」
2組6人 (子ども3人、大人3人)
11月 2日 「筆あとをさがせ！」
4組8人 (子ども4人、大人4人)
11月 9日 「筆あとをさがせ！」
6組16人 (子ども7人、大人9人)
11月30日 「かお、かお？ かお！」
1組2人 (子ども1人、大人1人)
12月 7日 「かお、かお？ かお！」
6組16人 (子ども8人、大人8人)
12月14日 「かお、かお？ かお！」
2組4人 (子ども2人、大人2人)
12月21日 「かお、かお？ かお！」
3組10人 (子ども4人、大人6人)



<夏休みプログラム：ジュニアキュレーター・サマーキャンプ>

- 2014年8月18日(月) 13:00-17:00 (対象：小学校4-6年生) 参加者：10人
8月19日(火) 10:00-16:00 (対象：中学生) 参加者：10人
8月20日(水) 10:00-16:00 (対象：高校生) 参加者：4人



〈職場体験学習〉

2014年 7月19日(土) 東洋英和女学院中学部3年生2人

9月 9日(火)、9月10日(水)、9月11日(木)、9月12日(金) 中央区立晴海中学校2年生2人

12月16日(火)、12月17日(水)、12月18日(木) 星美学園中学校3年生5人

〈インターンシップ〉

2014年4月6日から2014年12月31日まで、下記の通り教育普及部門のインターンシップを行った。

インターン：

井上祐里（筑波大学大学院 人間総合科学研究科 修士課程1年）

碓井麻央（慶應義塾大学大学院 文学研究科 修士課程2年）

太田紋乃（慶應義塾大学大学院 文学研究科 修士課程1年）

児矢野あゆみ（國學院大學大学院 特別研究生）

実習活動日：40日間

主な実習内容：美術館における教育普及活動の実務

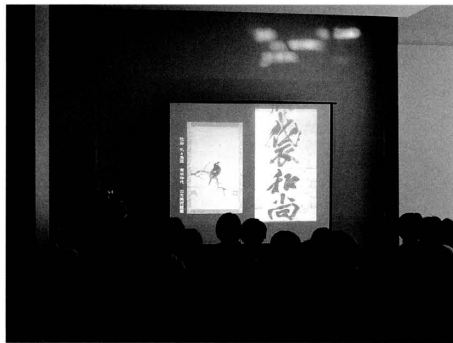
担当：貝塚 健、細矢 芳

〈美術講座〉

月 日	講座題目	講師
《「ちょっと気になる 絵の履歴」関連イベント 気になるイベント1.2.3》 別館ロビー 14:00-15:30		
2014年 10月25日(土)	1 <歴史編>「ふたつの作品に起こった あんなこと・こんなこと」	平間理香
11月15日(土)	2 <書道編>「書のスゴさは、どこに？」	笠嶋忠幸 氏 (出光美術館学芸課長代理)
11月29日(土)	3 <デザイン編>「すごく気になる紙と文字の裏話」	祖父江 慎 氏 (ブックデザイナー)、株式会社 竹尾



デザイン編の様子



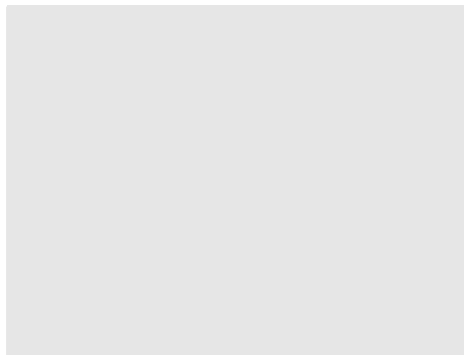
書道編の様子

〈展覧会関連イベント〉

《「はじめての美術館」関連イベント》

展示室・講座室 10:00-11:30

2014年 2月26日(水) ママとベビーの美術館デビュー 7組14名 (こども7名、大人7名)
3月15日(土) 家族で美術館デビュー 7組24名 (こども12名、大人12名)
(担当=伊藤)



ママとベビーの美術館デビューの様子

〈ギャラリートーク〉

学芸員とサポートボランティアがギャラリートークを行った。

「はじめての美術館」土曜日はボランティア、日曜日は学芸員。

「アートで対決」土曜日はボランティア、日曜日は学芸員と一部ボランティア。

「ちょっと気になる 絵の履歴」土曜日はボランティア、日曜日は学芸員と一部ボランティア。

〈学習の場としての美術館利用〉

2014年 7月31日(木) 久留米信愛女学院中学校3年「職場体験」 2名
8月 5日(火) 福岡県立輝翔館中等教育学校2年「職場体験」 3名
9月12日(木) 久留米市立三潨中学校2年生「職場体験」 2名
(対応=泉田)

久留米大学 久留米・筑後体験演習

前期：2014年 5月17日(土)、6月14日(土)、7月12日(土) 3名

後期：2014年10月25日(土)、11月15日(土)、12月 6日(土) 2名

(対応=森山)

〈館外活動〉

2014年 3月18日(火)

野尻あかねと学ぶ 平成25年度 ふるさとの歴史と文化遊学講座
「絵の道はひとつではない～青木繁と坂本繁二郎」
於：アクロス福岡 約70名 (担当=森山)

3月29日(土)

久留米 mama サミット
「こどもと楽しむ美術館」
於：メリコア (コワーキングママスペース) 13名 (担当=伊藤)

7月27日(日)

青木繁《海の幸》フォーラム 基調講演
「青木繁を通してみる文学と美術の交流」
於：南総文化ホール 約50名 (担当=森山)

9月2日(火)

平成26年度 えーるピアシニアカレッジ 基礎科目
「美術の楽しみ方」
於：えーるピア久留米 約200名 (担当=森山)

10月16日(木)

平成26年度 久留米学 (文化と社会)
「石橋正二郎と美術館」
於：久留米大学 約200名 (担当=森山)

11月29日(土)

平成26年度 ふるさとの歴史入門講座・後期
「時代の先端を描き続けた古賀春江」
於：えーるピア久留米 約70名 (担当=伊藤)

12月13日(土)

アクロス・文化学び塾
「ちょっと気になる《高野切》のこれまで」
於：アクロス福岡 約60名 (担当=平間)

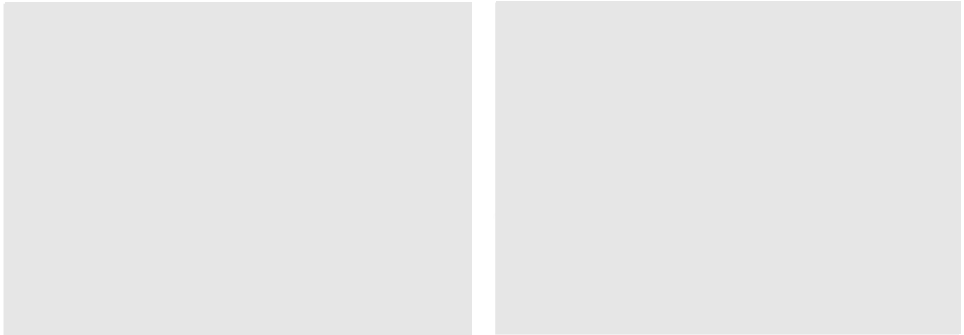
〈夏休みこどもプログラム〉

7月26日(土)～9月28日(日)、コレクション展示「アートで対決」にあわせ、「よく見てみよう！」と題したワークシートを配布。また、「いろがみでつくろう！おもてとうらのほくとわたし」と題したワークショップを開催。さまざまな色と模様の講師オリジナルの紙を用いて、頭・腕などのパーツを作り、ハトメでつなげて自分そっくりの紙人形を制作した。参加者は講師に相談しながら個性あふれる作品を作った。

講師：marini * monteany（マリーニ・モンティニー）（絵本作家）

於：講座室

2014年 8月9日(土)14:00～16:00 18名、8月10日(日)10:30～12:30 17名、14:00～16:00 20名



ワークショップの様子

〈サポートボランティア〉

2014年度の登録者は36名。年間6回の研修を実施。ギャラリートーク、坂本旧アトリエ解説、学校を主とする団体受入やイベント等で約4,800名の来館者に対応した。

（ボランティアの活動期間は4月から翌3月までの1年間）

サポートボランティア

荒巻夏子、江崎修、江頭由美子、大津和寛、貴島英雄、小島裕子、小西なほみ、近藤孝子、坂井弘美、里中健、高田幸、高橋有嘉子、高橋佑太、壇沙織、月貫テル子、恒吉佐知子、寺崎祐子、豊福淳子、豊福真知子、仲上祥世、中野直美、西原和美、秀島千鶴子、福永和子、藤木康宏、細川典彦、松枝成芳、松隈千重子、虫明しのぶ、牟田麻里耶、村上恵子、森房乃、諸富孝子、矢ヶ部節子、吉田美知代、渡邊睦美

以上36名（50音順 敬称略）

〈博物館実習生受入〉

学芸員資格取得のための博物館実習を下記のように実施した。

期間：2014年8月27日(水)、28日(木)、9月3日(水)、4日(木)、5日(金)。今年度より計5日間。

実習生：3名（3校）

実習内容：

	1	2	3	4	5	6
	9:30-10:45	10:45-12:00	13:00-14:15	14:15-15:30	15:30-16:45	16:45-17:30
8月27日 (水)	ガイダンス	美術館運営	施設見学 ツアー	トーク準備 説明・作品決め	ワークシート 作成	質疑・応答 ノートまとめ
8月28日 (木)	展覧会	文献・情報 検索	文献調査	トークプラン 作成	トークプラン 発表	質疑・応答 ノートまとめ
9月 3日 (水)	作品調査	教育普及	トーク準備・ 文献調査	トーク準備・ 文献調査	トーク準備・ 文献調査	質疑・応答 ノートまとめ
9月 4日 (木)	トーク準備・ 文献調査	トーク準備・ 文献調査	プレ発表・ 対話型説明	トーク準備・ 文献調査	トーク準備・ 文献調査	質疑・応答 ノートまとめ
9月 5日 (金)	発表準備	発表準備	発表会	講評会	トークの 整理・提出	質疑・応答 ノートまとめ

*実習の成果発表として、展示作品についてのギャラリートークを課題とし、最終日に会場で発表会を実施した。

入場者数

ブリヂストン美術館

月	開館日数	有 料				無 料		総 計	一日平均
		一般	大高生	団体	合計	合計	(うち中小生)		
1	12	2,235	152	35	2,422	1,286	179	3,708	309
2	24	3,575	272	172	4,019	2,161	602	6,180	258
3	26	6,861	562	13	7,436	2,598	318	10,034	386
4	17	4,592	287	106	4,985	2,211	237	7,196	423
5	28	6,566	487	143	7,196	3,142	287	10,338	369
6	25	5,910	539	251	6,700	2,978	257	9,678	387
7	21	4,533	679	345	5,557	3,289	164	8,846	421
8	30	8,967	856	202	10,025	4,024	1,139	14,049	468
9	21	6,930	638	122	7,690	3,566	236	11,256	536
10	22	5,543	441	208	6,192	2,517	234	8,709	396
11	28	7,654	654	246	8,554	3,424	415	11,978	428
12	21	5,601	684	60	6,345	2,748	138	9,093	433
合計	275	68,967	6,251	1,903	77,121	33,944	4,206	111,065	404

石橋美術館

月	開館日数	有 料				無 料			総 計	一日平均
		一般	大高生	団体	合計	中小生	招待他	合計		
1	19	700	11	323	1,034	481	125	606	1,640	86
2	24	1,078	46	209	1,333	546	194	740	2,073	86
3	26	1,511	81	371	1,963	498	343	841	2,804	107
4	16	1,203	37	307	1,547	208	518	726	2,273	142
5	28	2,903	120	1,143	4,166	640	424	1,064	5,230	186
6	25	1,597	118	667	2,382	521	264	785	3,167	126
7	24	2,113	83	907	3,103	216	325	541	3,644	151
8	27	2,660	156	561	3,377	799	314	1,113	4,490	166
9	25	3,232	150	1,378	4,760	244	1,074	1,318	6,078	243
10	19	1,495	66	919	2,480	317	207	524	3,004	158
11	28	2,621	123	1,215	3,959	1,611	626	2,237	6,196	221
12	23	1,036	40	265	1,341	516	275	791	2,132	92
合計	284	22,149	1,031	8,265	31,445	6,597	4,689	11,286	42,731	

坂本繁二郎旧アトリエ (石橋文化センター内)

イベント名	開催日	日数	入場者数
つばきまつり	3/15～16	2	531
SAKURAまつり	3/29～30	2	220
バラフェア	5/3～6	4	1,473
あじさい・はなしょうぶまつり	5/31～6/1	2	288
秋のバラフェア	10/25～26	2	736
合 計		12	3,248

新収蔵作品 New Acquisitions

絵画 Paintings

ギュスターヴ・カイユボット

Gustave Caillebotte

1848-1894

イエールの平原

1878年

パステル・紙

45.7×60.0cm

左下に署名・年記

外洋250

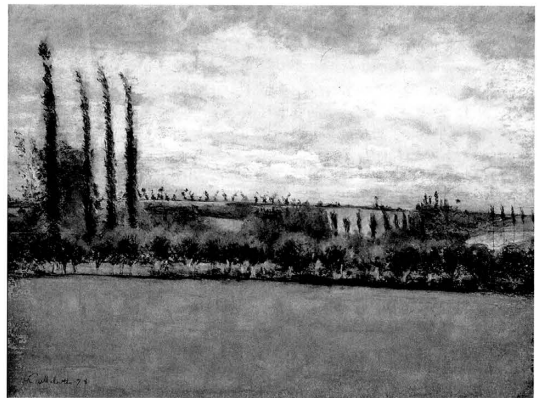
Prairie, Yerres

1878

Pastel on paper

45.7×60.0cm

Signed and dated lower left: G. Caillebotte 78



来歴 Prov. : ca. 1894, Paul Hugot, Paris; Maurice Hugot; 1971, Wildenstein & Co. to Deborah and Joseph Goldyne; 2014, Ishibashi Foundation.

展覧会 Exh. : 1879, Paris, 4^e Exposition impressionniste, No.31; 1951, Paris, *Rétrospective Gustave Caillebotte, Galerie Beaux-Arts*, No.29; 2005, Lausanne, Switzerland, *Caillebotte: Au Coeur de l'impressionisme, Fondation l'Hermitage*, No.35; 2006-2007, Fine Arts Museum of San Francisco; Minneapolis Institute of Arts, *Judging by Appearance: Master Drawings from the Collection of Joseph and Deborah Goldyne*, No.73; 2013年、石橋財団ブリヂストン美術館「カイユボット展—都市の印象派」No.41.

文献 Bibl. : (1951), *Gustave Caillebotte (1848-1894)*, Wildenstein, Paris, No.84 (Exposition Impressionniste, 1879, No.31); 1978, Marie Berhaut, *Caillebotte: Sa vie et son œuvre: Catalogue raisonné des peintures et pastels*, Wildenstein Institute, Paris, No.101, p.116 (4^e Exposition Impressionniste, 1879, No.31); 1994, Marie Berhaut, *Gustave Caillebotte: Catalogue Raisonné des Peintures et Pastels*, Wildenstein Institute, Paris, No.127, p.123. ([?] 4^e impressionniste, Paris, 1879, No.31); 1996, Ruth Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation Vokume II: Exhibited Works*, Fine Arts Museums of San Francisco, p.107, ill: p.125, IV-31; 2005, Sylvie Wuhrmann, "Le plus intransigeant: Caillebotte et l'esposition impressionniste de 1879", *Caillebotte: Au Coeur de l'impressionisme, Fondation l'Hermitage*, pp.89-90; 2006-2007, *Judging by Appearance: Master Drawings from the Collection of Joseph and Deborah Goldyne*, Fine Arts Museum of San Francisco; Minneapolis Institute of Arts, No.73, pp.164-165, 233; 2013年『カイユボット展—都市の印象派』石橋財団ブリヂストン美術館、No.41、p.137.

ギュスターヴ・カイユボット (1848-1894) は、印象派を代表する画家。1876年の第2回印象派展以降主たる印象派展に参加し、一方で仲間の作品を購入することによって経済的に彼らを支え、印象派展の開催の継続にも尽力した。ここで描かれているのは、パリ郊外のイエールにあったカイユボットの夏の邸宅近くの風景。左から右になだらかな傾斜をもって、地平線はちょうど真ん中あたりを横切っている。前景には平原。薄茶を地に、淡い緑がかぶせられ、ハイライトには白が使われた繊細な表現である。その後方には灌木が一行に並び木陰をつくっている。左側には細長いポプラの木が4本。微妙に高さを変えながら、右から左に吹く風になびいている。マリー・ペローの1994年版作品総目録の解説によれば、イエールの町が後景に広がり、前景と後景の間にはイエール川が流れているという。画面の半分を占める空は薄い雲で覆われている。その表現は、前景の平原と同じく繊細に表現されている。対照的な上下の表現が、長閑なパリの郊外の風景に永遠の広がりを与えている。この画家としては珍しいパステルで描かれている。1879年に行われた、第4回印象派展に出品された。カイユボットがイエールで描いた作品の多くは、11ヘクタールにおよぶ広大な自邸の庭とその横を流れるイエール川を描いたものである。後年のプティ・ジュヌヴィリエ時代に比べると平原を描いた作品は少ない。画家が後にイエールを離れてジュヌヴィリエに居を構えて後に集中して描いた風景表現、すなわち、ブリヂストン美術館の『カイユボット展—都市の印象派』(2013年)に何作か出品されたジュヌヴィリエ風景に先立つ作品として興味深い。本作は、最初カイユボットの友人ポール・ユゴのコレクションであった。ポール・ユゴ (1841-1896) は、カイユボットが住んでいたパリ8区とはセヌ川をはさんで、対岸のパリ第7区、官立美術学校 (エコール・デ・ボザール) の近くプレ=オ=クレール通りに居を構えていた。カイユボットのみならず、家族とも付き合いがあったらしい。カイユボットの作品を蒐集していたことでも知られる。その後、個人の所蔵となり、おおよそ半世紀が経過している。展覧会にもその間あまり出品されたことはなかったが、ブリヂストン美術館の個展に出品された。

マリア=ヘレナ・ヴィエラ・ダ・シルヴァ

Maria-Helena Vieira da Silva

1909-1992

入口

1961年

グワッシュ・テンペラ、紙

70.5×71.1cm

右下に署名・年記

外洋251

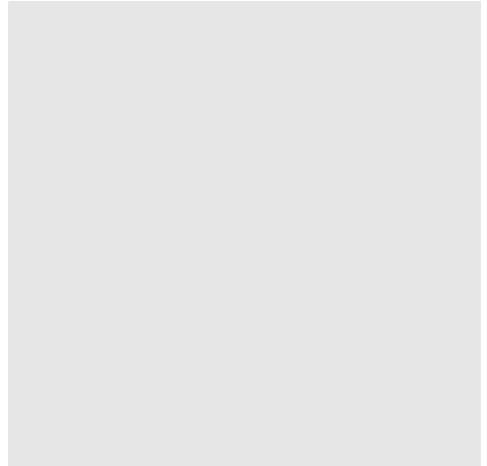
The Entrance

1961

Gouache and tempera on paper

70.5×71.1cm

Signed and dated lower right: Vieira da Silva 61



来歴 Prov. : M. Knoedler & Co. Inc., New York; Theodore Schempp, New York; Kunsthandel Frans Jacob, Amsterdam; Private collection; 2005, Sale, Sotheby's London, June 23, lot 191; Private collection; 2014, Ishibashi Foundation.

展覧会 Exh. : 1963, New York, M. Knoedler & Co. Inc.; Washington, The Phillips Collection, *Recent Gouaches by Vieira da Silva*, no. 23.

文献 Bibl. : 1963, Colette Roberts, "Vieira da Silva et la Magie des Rêves", *France-Amérique*, October, illustrated; 1983, Guy Weelen, *Vieira da Silva, Œuvres sur Papier*, Paris, p. 44, illustrated; 1994, Guy Weelen - Jean François Jaeger, *Vieira da Silva Catalogue Raisonné*, Geneva, p. 361, no. 1786, illustrated.

マリア=ヘレナ・ヴィエラ・ダ・シルヴァ（1909-1992）はポルトガルリスボン生まれの女性画家。11歳のときに、リスボンの美術アカデミーで学びはじめ、フェルナン・レジェの絵画、アントワヌ・ブールデルの彫刻、スタンリー・ウィリアム・ヘイターの版画などを学び、さらには、テキスタイル・デザインの制作も行っている。1930年までにはパリで絵画の展覧会を開催したといい、同じ頃、ハンガリー出身の画家アルバド・セネシュと結婚している。1940年にはリスボンに帰り、第二次世界大戦中は47年までブラジルに滞在した。その後パリを再訪して当地で制作を続けた。1956年にはフランスの市民権を得て、1966年にはフランス政府よりグランプリ・ナシオナル・デ・ザールを受賞、79年にはレジオン・ド・ヌールを受賞している。1992年にパリで没している。リスボンには彼女の名前を冠した美術館がある。1950年までにヴィエラ・ダ・シルヴァは、セザンヌの作品を研究し、さらにはキュビズムや抽象絵画に学んで、曖昧な空間に、抑制した色彩の分断された形態で満たした独自の様式を完成させた。その歩みはモンドリアンと同様に、街景や本棚のように具体的な景観やモチーフを描写した表現にはじまり、次第にそれらを抽象化して描いていく手法に特徴がある。現在では、戦後の最も重要な抽象画家のひとりとして国際的な名声を博すに至っている。また、ヴィエラ・ダ・シルヴァの作品は、フランスのタシスムやアンフォルメル、アメリカの抽象表現主義と同時期ゆえにしばしばこの動向と関連づけられる。パリのボンビドゥ・センターにはこの画家の多くの作品が収蔵されている。本作は、ヴィエラ・ダ・シルヴァの円熟期の作品。紙に不透明水彩とテンペラにより、繊細な線描と細かな色面により微妙なバランスを考慮しながら構成がなされている。

ヴォルス

Wols (Alfred Otto Wolfgang Schülze)

1913-1951

退屈な氾濫

1946年

グワッシュ・紙

25.0×16.2cm

右下に署名

外洋252

Débordements lassants

1946

Gouache on paper

25.0×16.2cm

Signed lower right: Wols

来歴 Prov.: ポール・ハイム (フランス); 1977年、フジテレビギャラリー;
角館美術館; 2014年、石橋財団

展覧会 Exh.: 1959, Bruxelles, Galerie Europe, *Wols*, No.70; 1965-66, Frankfurt a M, Kunstverein Steinernes Haus, *Wols: Gemälde, Aquarelle, Zeichnungen, Fotos*, No.136; 1966, Eindhoven, Stedelijk Van Abbenmuseum, *Wols Schilderijn Gouaches, Aquarellen, Tekeningen*, No.120; 1977年、フジテレビギャラリー「ヴォルス展」No.18; 1980年、北九州市立美術館「ヴォルス展—油彩、水彩、素描、版画」no.15.

文献 Bibl.: 1965-66, *Wols: Gemälde, Aquarelle, Zeichnungen, Fotos*, Frankfurt a M, Kunstverein Steinernes Haus, No.136, n.p.; 1966, *Wols Schilderijn Gouaches, Aquarellen, Tekeningen*, Eindhoven, Stedelijk Van Abbenmuseum, No.120; 1977年『ヴォルス展』フジテレビギャラリー、No.18; 1980年『ヴォルス展—油彩、水彩、素描、版画』北九州市立美術館、no.15, p.19.



つる草の星

1947年

グワッシュ・紙

15.5×12.0cm

右下に署名

外洋253

Etoile de lianes

1947

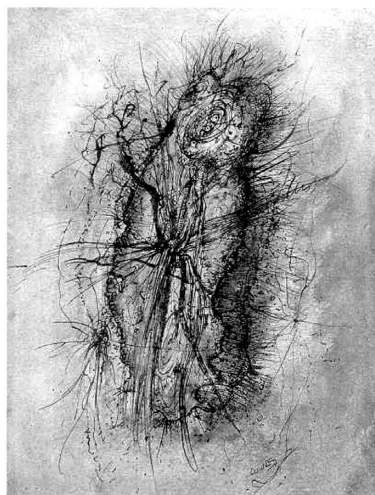
Gouache on paper

15.5×12.0cm

Signed lower right: Wols

来歴 Prov.: ポール・ハイム (フランス); 1977年、フジテレビギャラリー;
角館美術館; 2014年、石橋財団

展覧会 Exh.: 1961, Bochum, Stadtische Kunstgalerie, *Wols Gouachen-Gemälde*, No.26; 1964年、南画廊 (東京)「ヴォルス」No.12; 1967, Torino, Galleria La Bus-sola, *Wols*, No.11; 1970, Nancy, Musée des Beaux-Arts de Nancy, *Wols*, No.17; 1977年、フジテレビギャラリー「ヴォルス展」No.21; 1980年、北九州市立美術館「ヴォルス展—油彩、水彩、素描、版画」no.22.



文献 Bibl. : 1961, *Wols Gouachen-Gemälde*, Bochum, Städtische Kunstgalerie, No.26; 1964年『ヴォルス』南画廊(東京)、No.12; 1967, *Wols*, Torino, Galleria La Bussola, No.11; 1970, *Wols*, Nancy, Musée des Beaux-Arts de Nancy, No.17; 1977年『ヴォルス展』フジテレビギャラリー、No.21; 1980年『ヴォルス展—油彩、水彩、素描、版画』北九州市立美術館、no.22, p.26.

ヴォルス (Wols, 1913-1951) はドイツ出身の画家で、本名をアルフレート・オットー・ヴォルフガング・シュルツェ (Alfred Otto Wolfgang Schülze) という。1913年にベルリンで生まれ、幼い頃はドレスデンで育った。デッサウのパウハウスに通い、パウル・クレーに師事した。しかし同校はすでに廃校が決定していたため、モホリ・ナジの勧めで1932年にパリに出た。パリでは当初、シュルレアリスム風の絵を描きながら、写真家として生計をたてた。1937年、パリのギャルリー・レ・プレイヤードで写真展を開催し、この時はじめてヴォルスを名乗った。

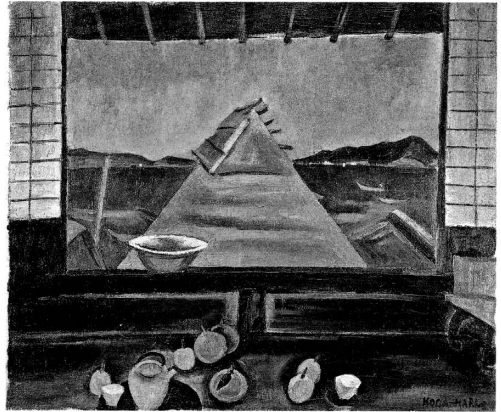
《退屈な氾濫》の制作年は1946年、《つる草の星》の制作年は1947年。すでに収蔵されている《葵色と黄土色》(1946年頃) とほぼ同時期の作品である。ヴォルスは、収容所より解放された後の1945年に、画商ルネ・ドルーアンの眼に留まり、同年12月にその画廊で個展を開催した。これら作品は、ヴォルスが画家としての活動を本格化させたちょうど同じ時期にあたる。

この時、ヴォルスは不安定な生活と精神状態のなかで、内面世界を抽象的形態に託して表現した。比較的小さな空間の中に、非常に微細かつ繊細な線描で有機物のような形態が表現されており、薄塗りの色彩がそれに生命を宿しているかのようである。この頃、画家は油彩画、版画などの手法もとっていたが、本作に見られるような素描と水彩からなる作品は、ヴォルスが収容所時代より発展させてきた技法であり、画家の様式的特徴が明確に示されている。同時代の幾何学的抽象とは対極をなすこのような表現は、多大な影響を同時代の画家たちに与えることになる。

古賀春江
KOGA Harue
1895-1933

二階より
1922年
油彩・カンヴァス
61.0×73.5cm
右下に署名：KOGA HARUE
日洋593

From the Upstairs Window
1922
Oil on canvas
61.0×73.5cm
Signed on lower right



来歴：個人蔵、福岡；ギャラリー倉（宝塚市）；2014年、石橋財団
Prov. : Private collection, Fukuoka; Gallery Kura, Takarazuka; 2014, Ishibashi Foundation.

展覧会歴：1922年、竹之台陳列館「第9回二科展」no.201；1923年、パリ グランパレ「第16回サロン・ドートンヌ日本部」；1934年、東京府美術館「第21回二科展特別陳列」no.557；1934年、久留米商工会議所「第23回来目会展特別陳列」no.23；1953年、神奈川県立近代美術館「小出楯重・古賀春江展」no.10；1963年、渋谷東横「異色作家展シリーズ29 古賀春江展」；1975年、福岡県文化会館「古賀春江回顧展」no.49；1986年、石橋美術館／ブリヂストン美術館「古賀春江－前衛画家の歩み」no.4；1991-92年、東京国立近代美術館「古賀春江－創作のプロセス」no.16；1996年、「麗しき前衛の時代－古賀春江と三岸好太郎」no.K-11；2001年、ブリヂストン美術館／石橋美術館「古賀春江 創作の原点」；2010年、石橋美術館／神奈川県立近代美術館「古賀春江の全貌」no.39

文献：1925年、鍋井克之「二科展に関する感想」『中央美術』11-10、p.100；1976年、古川智次編『近代の美術36 古賀春江』至文堂、pt.2；1991年、『古賀春江－創作のプロセス』（展覧会図録）東京国立近代美術館、p.29；2010年、『古賀春江の全貌』（展覧会図録）石橋美術館他、p.203

古賀春江（1895-1933）は、久留米市の浄土宗寺院に生まれた。幼名は亀雄。中学明善校を中退し上京、太平洋画会および日本水彩画会研究所で学んだ。1922年の第9回二科展に《埋葬》と《二階より》を出品、二科賞受賞を機に、前衛グループ「アクション」に参加し、前衛への道を歩み出す。セザンヌ、ピカソ、キュビズム、未来派など西洋の潮流をどん欲に学び、自らの作風を次々に変えていくが、やがてクレーに傾倒し、独特の空想画を制作するようになる。1929年の第16回二科展にシュルレアリスム風の作品を出品、二科会の超現実派として、東郷青児や阿部金剛らとともに注目される。彼のシュルレアリスムは、既製のイメージを組み合わせることによって非現実空間を作り上げたところに特徴がある。

本作は、1922年7月末から8月初めにかけて、同郷の画家・松田諦晶と共に滞在した筑前鐘崎海岸での制作。宿泊先の旅館の二階から葦葺き屋根と玄海の海や島々をのぞむ光景が描かれる。古賀は、この作品と《埋葬》（知恩院蔵）によって二科賞を受賞した。中央画壇へのいわばデビュー作の一点である。室内に散らばる静物の描写には萬鉄五郎の影響も見てとれる。実景にもとづく作品ではあるが、画面全体は、四角形、三角形、円形の組み合わせを意識したものとなっているところに作者の意欲を感じとることができる。

伊年印
Seal of Inen

源氏物語図 浮舟

江戸時代
紙本金地著色
58.3×108.5cm
左上に印章：伊年（朱文円印）
日書108



Scene from the Tale of the Genji

Edo period
Color and gold on paper
58.3×108.5cm
Sealed upper left

来歴：個人蔵；壺中居；2014年、石橋財団
Prov.：Private collection；Kochukyo；2014, Ishibashi Foundation

かつて六曲一双の屏風に仕立てられていた源氏物語図の部分で、現状は額装。場面は、『源氏物語』第五十一帖「浮舟」で、匂宮が雪の中、宇治へ赴き、浮舟を舟で連れ出し、小島に立つ橘の木を見て変わらぬ愛を誓う場面がえがかれている。画面左上に捺された「伊年」の朱文円印は、大倉文化財団所蔵《扇面流図屏風》や、クリーブランド美術館所蔵《雷神図屏風》と同じものと思われる。

もとの屏風は、團家が所蔵していたことで知られるが、いつの時点かで分割され、諸処の分蔵となった。宗達派による源氏物語図屏風は、ほかにも作例が知られるが、源氏物語五十四帖のうち全ての場面を備えていた点や、場面の選択、図様の定型といった点からも、貴重な屏風であったとされる。

新収図書

ブリヂストン美術館

	購入	寄贈	計
和書	11冊	122冊	133冊
洋書	12冊	42冊	54冊
計	23冊	164冊	187冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

石橋美術館

	購入	寄贈	計
和書	24冊	63冊	87冊
洋書	0冊	0冊	0冊
計	24冊	63冊	87冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

修復記録

	作品	修復報告
1	豊臣秀吉《書翰》 安土桃山時代、IMAA、日書48	紙本墨書 / 14.0×90.0cm 調査・写真記録、埃除去、解体、肌裏紙などの除去、本紙裏面の調査・写真記録、本紙の組成調査、本紙肌裏打ち、増裏打ち、折り伏せ、表装裂の裏打ち替え、本紙・表装裂の切り継ぎ、中裏打ち、総裏打ち、仕上げ、収納（太巻芯および箱の新調）、処置後の写真記録・報告書作成
2	荻須高德《プロヴァンのフォンテーヌ広場》 1940年、IMA、日洋280	油彩・カンヴァス / 49.9×60.9cm 調査・写真記録、亀裂・浮き上がり部分の接着、画面表面の埃を除去後木枠から支持体を外し裏面の埃除去、支持体の波打ちと凹凸の矯正、裏面より破損箇所への充填補修・不織布と接着剤による補強、表面から絵具層の再接着・裏面から接着強化、釘穴痕の繕い、張りシロ部分の補強、新木枠にポリエステル布と作品を張り込み・固定・楔装着、画面に付着した水溶性の汚損の除去、黄変したニス層の除去、画面周辺部の亀裂・剥落箇所への充填・整形・補彩、ニスの塗布、処置後の写真撮影、報告書作成
3	荻須高德《角の居酒屋》 1940年、IMA、日洋281	油彩・カンヴァス / 60.0×73.2cm 調査・写真記録、亀裂・浮き上がり部分の接着、画面表面の埃を除去後木枠から支持体を外し裏面の埃・汚損除去、側辺釘穴痕の補修、側辺張りシロ部分の補強、新木枠にポリエステル布と作品を張り込み・固定・楔装着、画面に付着した水溶性の汚損の除去、黄変したニス層の除去、画面剥落箇所への充填・整形・補彩、ニスの塗布、処置後の写真撮影、報告書作成

* 修復報告欄に載せる内容は、修復担当者による報告書に基づく。

作品貸出記録 ブリヂストン美術館

「光の賛歌 印象派展」

福岡市博物館 / 2014年1月15日－2014年3月2日

京都文化博物館 / 2014年3月11日－2014年5月11日

1) クロード・モネ《睡蓮の池》(外洋23)

「岸田吟香・劉生・麗子 知られざる精神の系譜」展

世田谷美術館 / 2014年2月8日－2014年4月6日

1) 岸田劉生《街道（銀座風景）》(日洋228)

岡山県立美術館 / 2014年4月18日－2014年5月25日

1) 岸田劉生《南瓜を持てる女》(日洋193)

Picasso. En el taller (Picasso. In the studio)

FUNDACIÓN MAPFRE / February 12 – May 11, 2014

1) パブロ・ピカソ《画家とモデル》(外洋144)

「水辺のアルカディアーピュヴィス・ド・シャヴァンヌの神話世界ー」展

島根県立美術館 / 2014年3月20日－2014年6月16日

1) 藤島武二《縮図帖》(日洋14)

「モディリアーニを探してーアヴァンギャルドから古典主義へ」展

ポーラ美術館 / 2014年4月12日－2014年9月15日

1) アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》(外洋115)

「ジャン・フォートリエ」展

東京ステーションギャラリー / 2014年5月24日－2014年7月13日

豊田市美術館 / 2014年7月20日－2014年9月15日

国立国際美術館 / 2014年9月27日－2014年12月7日

1) ジャン・フォートリエ《人質の頭部》(外洋188)

「西洋近代絵画と松方コレクション」展

鹿児島市立美術館 / 2014年7月18日－2014年8月31日

- 1) カミーユ・ピサロ 《ブーヅヴァルのセーヌ河》(外洋19)

「画家たちの上京物語」展

熊本県立美術館 / 2014年7月19日－2014年8月31日

- 1) パブロ・ピカソ 《カップとスプーン》(外洋83)

「佐倉学 浅井忠展」

佐倉市立美術館 / 2014年8月2日－2014年9月7日

- 1) 浅井忠 《グレーの橋》(日洋3)

「おいしいアート 食と美術の出会い」展

横須賀美術館 / 2014年9月3日－2014年11月3日

- 1) モーリス・ドニ 《バッカス祭》(外洋65)

「岡田三郎助 エレガンス・オブ・ニッポン」展

佐賀県立美術館 / 2014年9月19日－2014年11月16日

- 1) 岡田三郎助 《婦人像》(日洋60)
- 2) 岡田三郎助 《臥裸婦》(日洋230)

「安井曾太郎の世界—人物画を中心に—」展

ふくやま美術館 / 2014年9月20日—2014年11月16日

- 1) 安井曾太郎 《宮参りの日》(寄託作品)
- 2) 安井曾太郎 《湘南電車にて》(寄託作品)
- 3) 安井曾太郎 《ピアノ》(寄託作品)
- 4) 安井曾太郎 《鏡台》(寄託作品)
- 5) 安井曾太郎 《少女と犬》(寄託作品)

佐倉市立美術館 / 2014年11月22日—2014年12月25日

- 1) 安井曾太郎 《阿部能成君像》(日洋217)
- 2) 安井曾太郎 《F夫人像》(日洋589)
- 3) 安井曾太郎 《窓際》(寄託作品)
- 4) 安井曾太郎 《アイスクリーム》(寄託作品)

「デュフィ」展

愛知県美術館 / 2014年10月9日—2014年12月7日

- 1) ラウル・デュフィ 《オーケストラ》(外洋123)

「新印象派 光と色のドラマ」展

あべのハルカス美術館 / 2014年10月10日—2015年1月12日

- 1) ポール・シニャック 《コンカルノー港》(外洋45)

「生誕200年 ミレー展」

宮城県美術館 / 2014年11月1日—2014年12月14日

- 1) ジャン=フランソワ・ミレー 《乳しぼりの女》(外洋119)

「古代への憧憬」展

慶應義塾大学アート・センター / 2014年12月8日—2015年1月30日

- 1) ギリシア 《哲人の顔》(外彫15)
-

「世紀の日本画」展

東京都美術館 / 2014年1月25日－2014年4月1日

- 1) 小杉未醒《山幸彦》(日洋85)

「東京・ソウル・台北・長春 官展にみる近代美術」展

福岡アジア美術館 / 2014年2月13日－2014年3月18日

- 1) 岡田三郎助《髮梳く女》(日洋62)
- 2) 藤島武二《蒙古の日の出》(日洋56)

「ア・ターブル！ ごはんだよ！食をめぐる美の饗宴」展

三重県立美術館 / 2014年3月1日－2014年5月6日

- 1) 古賀春江《素朴な月夜》(日洋161)

「水辺のアルカディア ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの神話世界」展

島根県立美術館 / 2014年3月20日－2014年6月16日

- 1) 藤島武二《天平の面影》(日洋11)

「洋画家たちの青春 白馬会から光風会へ」展

東京ステーションギャラリー / 2014年3月21日－2014年5月6日

- 1) 黒田清輝《鉄砲百合》(日洋9)
- 2) 辻永《ハルビンの冬》(日洋116)

「美しき日本 瀬戸内の風景」展

香川県立東山魁夷せとうち美術館 / 2014年7月12日－2014年8月31日

- 1) 藤島武二《屋島よりの遠望》(日洋50)

「うるしの近代 京都、「工芸」前夜から」展

京都国立近代美術館 / 2014年7月19日－2014年8月24日

- 1) 江馬長閑《須磨明石蒔絵小硯函》(漆器10)
- 2) 戸島光孚《雲鶴蒔絵手文庫》(漆器17)

「佐倉学 浅井忠展」

佐倉市立美術館 / 2014年8月2日－2014年9月7日

- 1) 浅井忠 《ヴェネツィア》(日洋5)
- 2) 浅井忠 《樹下の女》(日洋291)

「岡田三郎助 エレガンス・オブ・ニッポン」展

佐賀県立美術館 / 2014年9月19日－2014年11月16日

- 1) 岡田三郎助 《雪景》(日洋61)
- 2) 岡田三郎助 《水浴の前》(日洋63)
- 3) 岡田三郎助 《薔薇の少女》(日洋231)

「安井曾太郎の世界 人物画を中心に」展

ふくやま美術館 / 2014年9月20日－2014年11月16日

- 1) 安井曾太郎 《水浴裸婦》(日洋142)
- 2) 安井曾太郎 《玉蟲先生像》(日洋144)

「光琳を慕う 中村芳中」展

岡山県立美術館 / 2014年9月26日－2014年11月3日

- 1) 中村芳中 《四季草花扇面貼交屏風》(日書105)

「生誕110年 海老原喜之助展」

鹿児島市立美術館 / 2014年10月2日－2014年11月9日

- 1) 海老原喜之助 《青年像》(日洋286)

〈展覧会カタログ〉

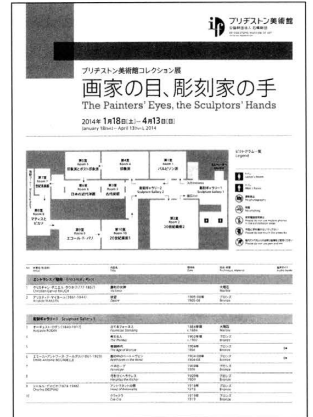
「画家の目、彫刻家の手」(コレクション展示)

The painters' eyes, the sculptors' hands

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館 (2014年1月)

30×21cm 三つ折りリーフレット



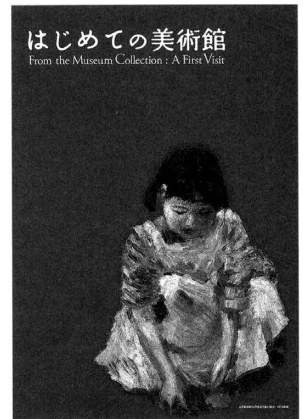
「はじめての美術館」(コレクション展示)

From the Museum Collection : a first visit

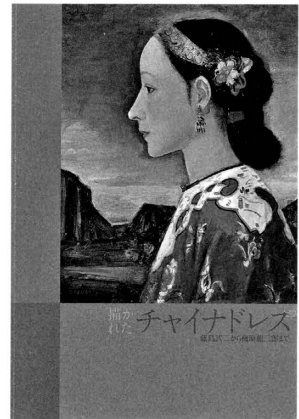
出品目録

編集・発行：石橋財団石橋美術館 (2014年1月)

30×21cm 二つ折りリーフレット



「描かれたチャイナドレス—藤島武二から梅原龍三郎まで」(テーマ展示)
Chinese-style dresses from Fujishima Takeji to Umehara Ryuzaburo



本文：

描かれたチャイナドレス—中国への憧憬と欲望 / 貝塚健 (pp.9-20)

The chinese dress in painting — china as a object of longing and desire /
Kaizuka Tsuyoshi (pp.105-117)

カタログ：

描かれたチャイナドレス (pp.21-93)

資料：

参考出品 (pp.94-96)

作家解説 (pp.97-101)

主要参考文献 (pp.102-104)

出品作品リスト (pp.118-119)

作品リスト (英文併記)

図版 (カラー29図、参考19図)

編集：貝塚健

執筆：貝塚健

翻訳：ルシー・S. マクレリー

表紙デザイン：若林伸重 (Akane Design)

制作：エディタス

印刷：凸版印刷株式会社

発行・著作：石橋財団ブリヂストン美術館 (2014年4月)

26×19cm 120 p

「描かれたチャイナドレス—藤島武二から梅原龍三郎まで」(テーマ展示)
Chinese-style dresses from Fujishima Takeji to Umehara Ryuzaburo

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館 (2014年4月)

30×21cm 三つ折りリーフレット



「アートで対決」(コレクション展示)

出品目録

編集・発行：石橋財団石橋美術館 (2014年4月)

30×21cm 三つ折りリーフレット

対決
4.26-9.28

No.	作家	作品名	制作年	材質	寸法	価格
西洋×日本 西洋と日本の美術作品を対決する企画展						
1	ゴッホ	オリーブ畑	1889	油彩	50.5×65.5	2,000,000
2	モネ	睡蓮	1916	油彩	50.5×65.5	1,500,000
3	ルノワール	ダンス	1906	油彩	50.5×65.5	1,000,000
4	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	800,000
5	シャガール	赤い椅子	1931	油彩	50.5×65.5	600,000
6	草間彌生	赤い椅子	1965	油彩	50.5×65.5	400,000
7	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	300,000
8	奈良美智	赤い椅子	1990	油彩	50.5×65.5	200,000
9	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	150,000
10	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	100,000
11	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	50,000
12	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	20,000
パリ×巴里 パリの美術家、4人の日本人作家とフランス人画家の対決						
13	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	800,000
14	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	600,000
15	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	400,000
16	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	200,000
17	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	100,000
18	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	50,000
19	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	20,000
20	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	10,000

「絵画の時間 24のエピソード」(コレクション展示)

Time and the painting—24 episodes

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館 (2014年8月)

30×21cm 三つ折りリーフレット

絵画の時間 24のエピソード
2014年8月2日(土)～9月23日(水)展

No.	作家	作品名	制作年	材質	寸法	価格
1. 絵画の時間 24のエピソード						
1	ゴッホ	オリーブ畑	1889	油彩	50.5×65.5	2,000,000
2	モネ	睡蓮	1916	油彩	50.5×65.5	1,500,000
3	ルノワール	ダンス	1906	油彩	50.5×65.5	1,000,000
4	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	800,000
5	シャガール	赤い椅子	1931	油彩	50.5×65.5	600,000
6	草間彌生	赤い椅子	1965	油彩	50.5×65.5	400,000
7	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	300,000
8	奈良美智	赤い椅子	1990	油彩	50.5×65.5	200,000
9	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	150,000
10	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	100,000
11	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	50,000
12	村上隆	赤い椅子	2001	油彩	50.5×65.5	20,000
13	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	800,000
14	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	600,000
15	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	400,000
16	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	200,000
17	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	100,000
18	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	50,000
19	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	20,000
20	ピカソ	赤い椅子	1901	油彩	50.5×65.5	10,000

「ウィレム・デ・クーニング展」(テーマ展示)

Willem de Kooning from the John and Kimiko Powers Collection

本文：

ウィレム・デ・クーニング—ジョン・アンド・キミコ・パワーズ・コレクションの女性像を中心に / 新畑泰秀 (pp.10-20)

Thoughts on Willem de Kooning with special attention to his paintings of women in the John and Kimiko Powers Collection / Yasuhide Shimbata (p.22-31)

デ・クーニングの言葉1「私にとって抽象芸術とは何か」(1951年)より (p.48) (英文併記)

デ・クーニングの言葉2「私にとって抽象芸術とは何か」(1951年)より (p.70) (英文併記)

デ・クーニングの言葉3「ルネサンスと秩序」(1951年)より (p.92) (英文併記)

キミコ・パワーズ夫人へのインタビュー—2014年8月22日 (p.114) (英文併記)

カタログ：

ウィレム・デ・クーニング (pp.32-113)

資料：

年譜 (pp.118-123)

主要参考文献 (pp.138-141)

作品リスト (英文併記)

図版 (カラー35図、白黒10図、参考14図)

編集：新畑泰秀

執筆：新畑泰秀

翻訳：スタンレー・N. アンダソン

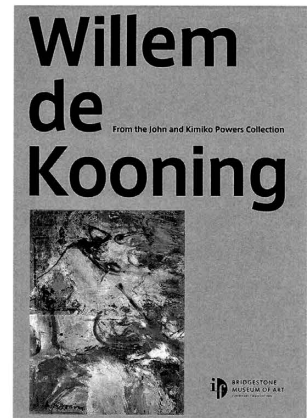
ルーシー・S. マクレリー

デザイン：清水徹 (ea)

制作・印刷：株式会社野毛印刷社

発行・著作：石橋財団ブリヂストン美術館

34.0×22.5cm 148 p



「ウィレム・デ・クーニング展」(テーマ展示)
 Willem de Kooning from the John and Kimiko Powers Collection

出品目録
 編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館 (2014年10月)
 30×21cm 三つ折りリーフレット



「ちょっと気になる絵の履歴」(コレクション展示)
 What about the provenance?

出品目録
 編集・発行：石橋財団石橋美術館 (2014年10月)
 26×18cm 二つ折りリーフレット



〈その他の刊行物〉

「夏休みこどもプログラム2014 よく見てみよう！」

デザイン：creative work natural

編集・発行：石橋財団石橋美術館（2014年7月）

15×21cm 8p



「絵画の時間 24のエピソード」(小中学生対象のセルフガイド)

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館（2014年8月）

21×60cm ジャバラ折り変形リーフレット



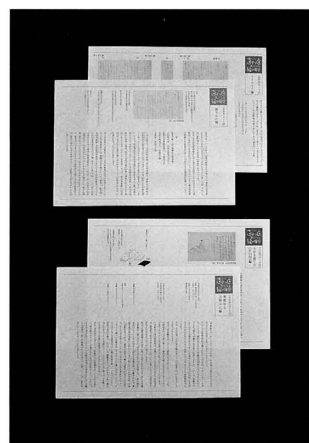
「ちょっと気になる絵の履歴ガイド」

作品解説シート

- I. 《高野切》ガイド② ミステリー編
- II. 《高野切》ガイド③ 贈りもの編
- III. 《石山切》ガイド② 大学を建てた《石山切》編
- IV. 《石山切》ガイド③ 華麗なる王朝文化編

編集・発行：石橋財団石橋美術館（2014年10月）

18×26cm 両面リーフレット（全4枚）



「館報」62号（2013年度）

Annual report of Bridgestone Museum of Art & Ishibashi Museum of Art

内容：

設立趣旨、機構・運営

展覧会（コレクション展示、テーマ展示、特別展）

教育普及（講座、ギャラリートーク、スライドトーク、ファミリープログラム、インターンシップ、職場体験学習、展覧会関連イベント、サポートボランティア、夏休みこどもプログラムなど）

入場者数（2013年度）

新収蔵作品数（作品22点）

新収図書

修復記録

作品貸出記録

刊行物一覧

研究報告 安井曾太郎《F夫人像》について / 貝塚建（pp.84-89）

ピエール・スーラージュへの6つの質問 / 新畑泰秀（pp.90-94）

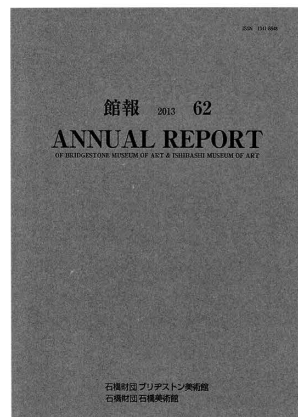
美術館案内

石橋財団職員

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館、石橋財団石橋美術館（2014年3月）

印刷：モリモト印刷株式会社

26×19cm 96 p ISSN 1341-8548



ジャン=フランソワ・ミレー 《乳しぼりの女》

賀川恭子

1814年にフランス北西部のノルマンディー地方にあるグリュシー村で生まれたジャン=フランソワ・ミレー（1814-1875）は、シェルブールで絵の勉強をはじめたのち、シェルブール市の奨学金を得て1837年にパリに出て、エコール・デ・ボザールで学んだ。初期は肖像画や風俗画を描いていたものの、その後、農民の生活を画題として取りあげるようになった。1849年にパリの南東約60キロのところにあるバルビゾン村に移住。1875年に没するまで同地で農民画の制作をつづけた。

農民画家として知られるミレーは、日本でも人気の高い画家のひとりであろう。2014年はミレー生誕200年にあたり、日本国内では2つのミレー展が巡回した。ひとつは、高知県立美術館、名古屋ボストン美術館、三菱一号館美術館で開催された「ボストン美術館 ミレー展」で、ボストン美術館の所蔵品のなかから20作家による油彩画64点を紹介した（ミレーの油彩画はそのうち25点）。もうひとつは、山梨県立美術館、府中市美術館、宮城県美術館で開催された「生誕200年 ミレー展

愛しきものたちへのまなざし」で、国内外で所蔵するミレーの油彩画、版画、素描、パステル画など約80点を紹介した。宮城会場では、当館所蔵のミレー《乳しぼりの女》(fig.1)も展示された。

フランスでは回顧展は開催されなかったものの、生誕200年を記念して、フランス国立美術史研究所の学術顧問ジャンタル・ジョルジェルが、近年の研究成果をふまえた大著『ミレー』を刊行した¹⁾。ミレーのカタログ・レゾネはいまだ刊行されてお

らず、ロバート・ハーバートの監修により1975年にグラン・パレ、1976年にヘイワード・ギャラリーで開催されたミレーの回顧展の図録が基礎文献となっている。ジョルジェルの書籍はそれを補完する存在になるであろう。

同様に、当館所蔵のミレー《乳しぼりの女》に関する考察も、これまであまりなされてこなかったように思われる。そのため本稿の前半では作品の基礎情報を確認し、後半ではミレーとノルマンディーとの関係を検証する。

1. 作品の基本情報

《乳しぼりの女》について当館で把握している来歴は、以下の通りである：

1875年, J.-F. ミレー売立, lot 24; マーティン・ブリマー・コレクション (ボストン美術館); 1940年, 山中商会, 大阪; 和田久左衛門, 大阪; フジカワ画廊; 1971年, 石橋財団

1875, sale Vente J.-F. Millet, lot 24; Coll. Martin Brimmer (Museum of Fine Arts, Boston); 1940, Yamanaka & Co., Osaka; WADA Kyuzaemon, Osaka; Fujikawa Galleries; 1971, Ishibashi Foundation.

ミレーが1875年1月20日に亡くなったのち、同年5月10日および5月11日にパリのオテル・ドゥルオで売り立てが開催された。《乳しぼりの女》は、



fig.1
ジャン=フランソワ・ミレー 《乳しぼりの女》
1854-60年、油彩・カンヴァス、59.0×72.4 cm、
石橋財団ブリヂストン美術館

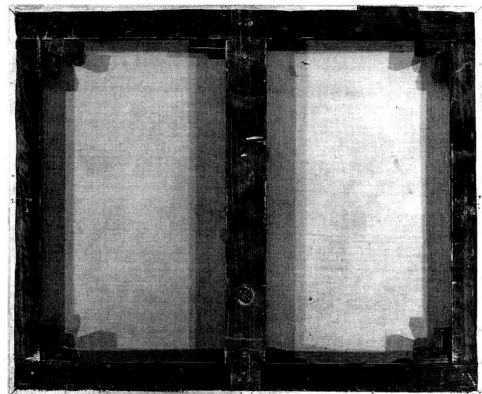


fig.2
ミレー 《乳しぼりの女》裏面写真

ミレー没後に遺族が売却した油彩画56点のうちの1点であり、作品の裏面をみると、中央の木枠には「VENTE J. F. MILLET」の朱色蠟印が押されている (fig.2)。油彩画および油彩習作の売り立ての結果は、アレクサンドル・ピエダニエルの著作『J.-F. ミレー、バルビゾン地の想い出』に記載されている³⁾。本稿資料にまとめたとおり、競売作品は制作年順に掲載されているが、そのうち36番「Étude pour les Falaises de Gréville」は競売にかけられなかったため、油彩55点が売却された。《乳しほりの女》(24. Femme trayant une vache. / Pâturage de Normandie. / Haut. 59 c.; Larg. 72 c. / 1860.)の落札額は、6,800フランだった。競売の合計金額は276,135フランで、作品の平均金額は5,021フランとなる³⁾。《乳しほりの女》の競売結果は平均よりもわずかに高く、ミレーの作品のなかでは、当時それなりに高く評価されていたことが推測される。

ミレーは、美術総監フィリップ・ド・シュヌヴィエールによって1874年に提案された、パリのサント=ジュヌヴィエール聖堂の壁画制作者にも名を連ねており、晩年には画家として確固たる地位を確立していたと言えよう(残念ながらミレーは制作にかかる前に死去してしまった)。1874年に第一回グループ展を開催した印象派の画家たちの競売結果に目を向けると、1875年には合計72点が11,496フランで落札されており、作品の平均金額は約160フランだった⁴⁾。ミレーと若い画家たちとの差は明白である。

一方、1874年のサロンでの国家買上では、2,000フラン以下が買上、2,500フラン以上が注文として処理されており、絵画の価格上位としては、ピエール=アドリアン=パスカル・ルルー《殉教者聖ラウレンティウス》が8,000フラン、フェルディナン・アンペール《聖母子と洗礼者ヨハネ》が7,000フラン、アンリ=レオポール・レヴィ《サルベドン》が6,000フラン、ジャン=ジャック・エンネル《善きサマリア人》とシャルル・ピュッソン《ラヴァルダン城の旧壕、モントワール付近》が各4,000フランだった⁵⁾。国家買上と競売結果を単純に比較するわけにはいかないが、ミレーの1875年の競売結果をみれば、彼の評価は決して低くはなかったと思われる。

ところで、ピエダニエルも述べているが、1875年1月20日に亡くなったときにミレーのアトリエに残されていた作品の大半は、未完成だった⁶⁾。完成した油彩画にサインを入れる習慣がミレーにあった点からも、作品の描き込みが不十分である

点からも、《乳しほりの女》は未完成のままアトリエに残されたと考えられるべきであろう。その代わりに《乳しほりの女》の画面右下には「J. F. Millet」という赤色のアトリエ・スタンプが押されている (fig.3)。

ロバート・ハーバートは、ミレー作品の真贋に関する1973年の考察のなかで、アトリエ・スタンプを検証、分類わけしている (fig.4)。《乳しほりの女》のアトリエ・スタンプは、ハーバートの分類での「1875 E」にあたる⁷⁾。このスタンプに使われた文字の特徴に関するハーバートの説明を要約すると、以下の通りとなる: 「1875 E」は1875年の売り立てで油彩画のおもて面に赤色で押されたスタンプであり、各文字の特徴としては「J」のしっぽ部分が欠け、「E」の真ん中の横棒が下の縦棒と一文字つづきとなり、「M」の一画目の縦棒が左曲がり、二画三画の縦棒がZ字をかたちづくり、そこから離れた四画目の縦棒がほとんど垂直になり、「T」の横棒が傾き、縦棒から伸びたしっぽが太くなっている。同様の特徴は、《乳しほりの女》のアトリエ・スタンプにも認められる。

1875年の売り立てでこの作品を購入したのは、ボストン生まれボストン育ちの美術収集家マー

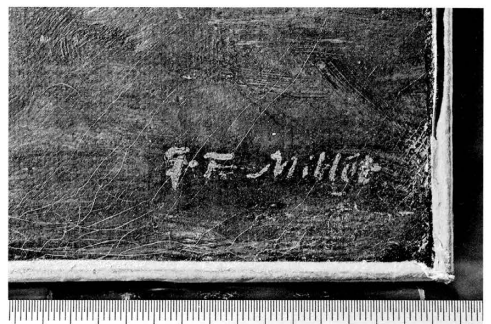


fig.3
ミレー《乳しほりの女》部分図



fig.4
ハーバートによるアトリエ・スタンプの分類
引用典: Robert L. Herbert, 'Les Faux Millet', *Revue de l'Art*, no. 21(1973), p. 64.

ティン・プリマー（1829-1896）だった⁸⁾。

1842年から1845年までボストン市長をつとめた父をもつプリマーは、1859年から1861年までマサチューセッツ州議会議員、1865年には合衆国上院議員をつとめた。プリマーは、ハーバード大学を1849年に卒業したのち、パリのソルボンヌ大学で学んだ。そのときに、同郷の友人で画家のウィリアム・モリス・ハントから勧められて、1853年のサロンで発表されたミレーの《刈り入れ人たちの食事（ルツとポアズ）》を購入し、1854年にはこの作品をボストン・アシニウムで公開した。その後もプリマーはミレー作品の購入をつづけ、1855年には《編物のお稽古》（1854年頃制作）を、1857年と1860年には《洗濯女》（1855年頃制作）をボストン・アシニウムで展示した⁹⁾。プリマーのおかげで、ボストンではミレーの最新作を目にすることができたのだ。当時、ボストン・アシニウムは美術館としての機能を果たしており、その後、その所蔵作品をもとにボストン美術館が創設されることになる。プリマーは、1870年から1895年までボストン美術館の初代館長をつとめた（美術館の開館は1876年）。1896年にプリマーが没したのち、彼の収集した絵画や工芸品は夫人に遺贈され、さらに1905年に夫人が亡くなると、1906年にそのコレクションの一部はボストン美術館に寄贈された¹⁰⁾。そのうちミレーの作品は、《刈り入れ人たちの食事（ルツとポアズ）》《洗濯女》《編物のお稽古》《「刈り入れ人たちの食事（ルツとポアズ）」の習作（木炭）》《そばの収穫（パステル）》《近く嵐（パステル）》の6点が含まれていた。ボストン美術館のコレクション形成にとってプリマーの存在は大きかった。

ここで《乳しぼりの女》に話題を戻そう。1875年の競売でミレー作品を購入したプリマーは、1876年に《縫物のお稽古》や《乳しぼりの女》および素描約20点をボストン美術館に寄贈した。《乳しぼりの女》は「Woman Milking a Cow」という題名で、「accession number 76.2」にて登録された。しかしボストン美術館は、他の作品購入のための資金を得るために1940年6月13日に《乳しぼりの女》を手放し、山中商会のニューヨーク支店に売却した。ボストン美術館の記録によれば、山中商会は匿名の日本人顧客の代理としてこの作品を購入したようである¹¹⁾。

ミレーは特定の画題を繰り返し描いたことで知られるが、「乳しぼりの女」は1866年にパステル画としてふたたび取り上げられた（fig.5）（Moreau-Nélaton, tome 3, fig. 228）。現在所在不明のこのパ

ステル画は、「牛」という題名で1923（大正12）年の「第5回仏蘭西現代美術展覧会」で紹介され、展覧会評で高く評価された：「ミレーの『牛』と題するパステル畫は、眞に美事な製作である。これは此度の展観に於て、最も重要な位置を占めるもので、理屈なしに頭の下る製作である。それは爽やかな新緑の丘を遠景として、近景に牛と乳を搾る農婦を配してある。崇高と、静寂と、詩がそこに在る。観てゐるに従つて、私達は涙ぐましい感情の昂まつて来るのを覚える」¹²⁾。このパステル画は、展覧会前日の招待日に実業家・原邦造によって売却された。展覧会を主催したのは、フランス人画商エルマン・デルスニスと黒田鵬心が設立した日仏芸術社。同社による1931（昭和6）年の「十週年記念・フランス美術展覧会」にもこのパステル画は出品された。ボストン美術館で所蔵されていた《乳しぼりの女》を日本人が所望したのは、日本ですでに紹介されたパステル画のヴァリエーションだったからなのかもしれない。

日本にもたらされた《乳しぼりの女》は、いつの時点からは不明だが、大阪の実業家・和田久左衛門（1890-1968）の所蔵となった¹³⁾。和田の所蔵する作品数は多くなかったものの、モネやゴッガン、セザンヌの重要な作品が含まれていた。和田の西洋美術収集は、昭和初期から始まり、1940年から41年にはほぼ完成していたとされる。そのため、《乳しぼりの女》が日本に入つてすぐに和田のコレクションに加わった可能性は高い¹⁴⁾。

《乳しぼりの女》の来歴を詳細に確認した結果は、以下の通りである。これまで当館で把握していた来歴を少し修正する必要があるだろう。

1875年, J.-F. ミレー売立, lot 24 ; 1875年, マー



fig.5
ジャン=フランソワ・ミレー 《牛》
1866年 パステル・紙 所在不明
引用典拠：Etienne Moreau-Nélaton, *Millet rencontré par lui-même*, Paris, 1921, tome 3, fig. 228.

ティン・ブリマー；1876年、ボストン美術館；1940年、山中商会、ニューヨーク；山中商会、大阪；和田久左衛門、大阪；フジカワ画廊；1971年、石橋財団

1875, sale Vente J.-F. Millet, lot 24; 1875, Martin Brimmer; 1876, Museum of Fine Arts, Boston; 1940, Yamanaka & Co., New York; Yamanaka & Co., Osaka; WADA Kyuzaemon, Osaka; Fujikawa Galleries; 1971, Ishibashi Foundation.

2. ミレーとノルマンディー

《乳しぼりの女》の画面中央で牛の乳をしぼる女性は、特徴的なかぶり物（コアフ）を身につけていることから、ノルマンディー地方の女性であることがわかる。

アルフレッド・サンシエの伝記によると、ミレーは1837年にパリに出てからも、毎年のようにノルマンディーに戻り、グリュシーで数週間を過ごしていた。「辛く苦しいときには、ミレーはノルマンディーに帰ることにしていた。家族と故郷の空気、平和と人情をしみじみと感じさせてくれる土地でミレーの心はなごむのであった」¹⁵⁾。とはいうものの、1845年から一年ほどル・アーヴルで過ごしたのを最後に、しばらく故郷に戻ることができなかった。

ミレーがふたたびノルマンディーに滞在するのは1854年のことだった。1853年4月に母が亡くなったため、1854年5月にミレーは一人で故郷グリュシーに帰り、きょうだいとともに財産整理に立ち会った。彼は同年6月に家族を連れてふたたびノルマンディーに向かうことになる。二度目のノルマンディー滞在の理由について、サンシエは、《鶏に餌をやる女》が2,000フランという高額で個人コレクターに売れたため金銭面に余裕ができたことをあげている。

1854年6月18日付のサンシエ宛の手紙で、ミレーはこのように述べている：「私は明日の月曜に故郷のノルマンディーに向かう。つまり、明日パリに着くことになる。子どもたちが乗合馬車で疲れすぎないように、そこで一泊し、火曜にまた出発したい。（中略）一ヶ月で帰るつもりだ」¹⁶⁾。ミレーは、家族とともに1854年6月19日にバルビゾンを出発し、同日夜にパリで一泊したのち、ノルマンディーに向かったのだ。サンシエによるミレー伝では、故郷グリュシーの風景を慈しむようにみつめ、この土地を描きとめるミレーの姿が書かれて

いる。また、幼い彼に絵の手ほどきをした神父ジャン・ルブリスーとの感動的な再会についても、長々と説明されている。

先に引用した手紙には「一ヶ月で帰るつもりだ」と書かれていたが、ミレーのグリュシー滞在は4ヶ月に及び、滞在中に14点の絵画と20枚ほどの素描ができあがり、2冊のクロッキー帳がいっぱいになったとサンシエは言う。「ミレーのグリュシー滞在は、彼の将来にとって実に有意義であった。彼は、あふれるほど豊かな画題を集めることができた。故郷の、初めて感激した土地の思い出を、さらに正確に蘇らせ、彼はその大きな特徴と独創性を、印象的な方法で固定していった」¹⁷⁾。

エティエンヌ・モロー＝ネラトンは、この滞在期間は3ヶ月ほどであり、グリュシーの他にも、エキュルヴィルやシェルブールにも滞在したとみなし、故郷に残っていた姉エミリーが《乳しぼりの女》や他の作品のモデルをつとめたと述べている¹⁸⁾。

アレクサンドル・マーフィーは、1854年のル・アーヴル滞在中にミレーがウジェーヌ・ブーダンと出会った可能性を示唆し、当館所蔵の《乳しぼりの女》、および、ウースター美術館所蔵の色鮮やかなパステル画《乳しぼりをするノルマンディー地方の女》(fig.6)が、メトロポリタン美術館所蔵の1854年頃の素描《木の下での羊の毛刈り》の裏面に描かれたスケッチ (fig.7) とルーヴル美術館所蔵の素描 (RF 5663 recto) を元に制作されたことを指摘する¹⁹⁾。

ミレーは、ノルマンディー滞在中に素描やスケッチを行い、それらをもとに油彩画を仕上げたのであろう。とはいえ、スケッチに描かれている

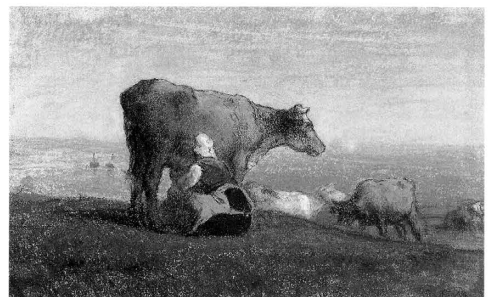


fig.6
ジャン＝フランソワ・ミレー 《乳しぼりをするノルマンディー地方の女》
パステル、黒コンテ・薄青色の紙 19.2×30.6 cm
ウースター美術館
引用典拠：Alexandra R. Murphy, et.al., *Jean-François Millet: Drawn into the Light*, exhib. cat., Sterling and Francine Clark Art Institute, 1999, p. 66.

牛の向きがいずれも異なることから、これらはウースター美術館所蔵のパステル画のためのものと考えらるべきであろう。《乳しぼりの女》と直接結びつくスケッチは、残念ながら、みつかっていない。

ニール・マクウィリアムが適切に指摘しているとおり、サンシエの伝記は、農民の生活に深く根づいた「農民画家ミレー」という神話を生み出すのに大きな役割を果たした²⁰⁾。近年のロバート・ハーバートの研究によって、読書家のミレーが16世紀から19世紀までの作家たちの文章を書き写していたこと、サンシエが1865年にサロン評を書くにあたりミレーのアドバイスを受けたことも明らかとなった²¹⁾。ミレーは、故郷を離れて以降、パリの画壇を活動の場とした画家であり、バルビゾンに移住したのちもサロン（官展）への出品を重要視していた。

当時のノルマンディーの状況を確認しておこう。フランスで鉄道が開通したのは1832年。サン＝ティエンヌからリヨンまでの58キロの路線だった。パリ周辺としては、1837年にパリとサン＝ジェルマン＝アン＝レーのあいだの路線が開通した。その後、1843年にはルーアン、1847年にはル・アーヴル、1848年にはディエップ、1858年にはシェルブールがパリと線路でつながった。ノルマンディーの旅行ガイドが刊行されたのも、鉄道網によりパリから行きやすい場所になったためである。都市と繋がり観光地化される一方で、地方は、それぞれのアイデンティティを重視するようになった。19世紀フランスは、地方意識が高まった



fig.7
ジャン＝フランソワ・ミレー《木の下での羊の毛刈り》
1854年頃 コンテ、擦筆、ペン、茶色のインク、
白色のグワッシュ・透かし紙 29.5×22.5 cm
メトロポリタン美術館
The Metropolitan Museum of Art, Gift of Miss G. Louise Robinson, 1940, 40.12.3
www.metmuseum.org

時代でもあった²²⁾。ノルマンディーでは、地方学術団体がもっとも早い時期に隆盛を迎えた。地方学術共同体の活動を主に担ったのは、貴族、大土地所有者、自由業者など、教養ある地方名士たちで、彼らは歴史的建造物の保存や農業振興のために研究をおこなった。彼らの研究成果は、旅行記やガイドブックを通じて広く流布した。名士たちを中心とした郷土研究によってノルマンディー固有の要素が見出され、地域アイデンティティが生み出された。考古学者アルシス・ド・コーモンは、1824年にノルマンディー好古学協会を設立したのち、1834年に全フランス記念碑保存調査協会を、1839年には地方学士院を設立し、地方の在野の学術団体を連携組織化することを試みた。19世紀前半、地方の学術団体の連携の中心にあったのは、ノルマンディーだった。

ノルマンディー出身のミレーが出身地ノルマンディーの農婦を絵画の題材とすることは、地方意識の高まりと無関係ではないだろう。とはいえ、ミレーは農民の姿を忠実に写し取ったわけではない。モーラ・コフリンの研究により、牛乳壺を運ぶノルマンディー地方の女性を描くにあたり、ミレーが当時の旅行ガイドの挿図や絵葉書の写真を参考にしていたことが明らかとなった²³⁾。このミレーの制作態度は、ギュスターヴ・クールベがエピナール版画（民衆版画）を参照したことを想起させる。このような状況をふまえると、ミレーの描くノルマンディーの女性たちは、パリ市民になじみのある姿で表現されていたと言える。

ミレーによる一連の「乳しぼりの女」では、女性のかぶるコアフは出身地を示すことに役立っている。乳しぼりの女は、姉エミリーがモデルをつとめた可能性もあるものの、顔を見せることなく、匿名の存在としてあらわされている。背景にあらわされた風景も作品によって異なっており、描かれた場所の特定を拒んでいるかのようである。このような曖昧さのおかげで、見る者は、それぞれの故郷に思いをはせることができる。そして、その点こそがミレー作品の評価に繋がったのではないだろうか。

1847年初めにサンシエが初めてミレーに出会ったときのエピソードに注目したい。自分の作品を気に入ったというサンシエにミレーは心を開き、「ノルマン方言のアクセントで」²⁴⁾芸術論を話したという。サンシエは言う。「後年、私は彼のこの魅力がなんであるかを理解した。ミレーは私の子供時代の思い出を再現してくれたのである。私は彼と同様、楽しいこと、辛いこと、すべてを含

めて、田舎を愛していた。ミレーと出会って、私の幼かった頃の記憶とおぼろ気な思い出が、眼前にまざまざと甦って来たのであった。私はミレーの絵に、村を、牧場を、そして森を見た。パリに来て、麦を、収穫を、そして種まきを忘れていたのである。やっと今、私は、かつて愛したもののすべてのイメージをキャンバス上に、無言のうちに再生してくれる人間と出会ったのである」²⁵⁾。このサンシエの言葉は、ミレー作品が評価された理由を端的にあらわしているように思われる。

以上、本稿では《乳しぼりの女》の来歴を確認すると同時に、作品に描かれたノルマンディーについて考察した。その結果、これまであまり注目されてこなかった作品ではあるが、ミレー作品の理解にとって重要な作品であることがわかった。ミレー生誕200年という節目が、ミレー作品についてのより深い理解を進める契機になればと思う。

註

- 1) Chantal Geogel, *Millet*, Paris, 2014.
- 2) Alexandre Piedagnel, *J.-F. Millet; Souvenirs de Barbizon*, Paris, 1876. 1875年の売り立ての結果は、原文のまま、以下の文献に転載されている：井出洋一郎編「参考資料解題」『開館一周年記念特別展 ミレーとバルビゾン派』(図録)山梨県立美術館、1979年、124-127頁。売り立て作品の詳細情報については、以下の競売カタログを参照のこと。*Catalogue de la vente de Jean-François Millet*, Paris, 1875.
- 3) ピエダニエルは合計金額を276,235フランと記しているが、各作品に付された金額を合計すると276,135フランであったため、本論では後者の数字を採用した。個別の数字に誤りがあるのか、単純な計算間違いなのかは不明である。
- 4) Merete Bodelsen, "Early Impressionist Sales 1874-94 in the Light of Some Unpublished 'Procès-Verbaux'," *The Burlington Magazine*, Vol. 110, No. 783 (June 1968), pp. 330-349.
- 5) 喜多崎親「1874年のサロンにおける国家買上ならびに注文作品に就いて」『1874年—パリ [第1回印象派展]とその時代』(展覧会図録)国立西洋美術館、1994年、209-220頁。
- 6) 目録には以下の通り記されている：Tableau, études peintes, aquarelles, pastels, dessins et croquis, trouvés dans l'atelier de Millet, au moment de sa mort (20 janvier 1875). La plupart de ces travaux sont inachivés.
- 7) Robert L. Herbert, 'Les Faux Millet', *Revue de l'Art*, no. 21 (1973), pp. 56-65.
- 8) マーティン・ブリマーについては、以下の文献を参照：Samuel Eliot, "Memoir of Martin Brimmer," *Proceedings of the Massachusetts Historical Society, Second Series*, Vol. 10 (1895-1896), pp.586-595; William Everett, "Martin Brimmer," *Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences*, Vol. 31 (1895-1896), pp. 360-363; Wayne Andrews, "Martin Brimmer: The First Gentleman of Boston," *Archives of American Art Journal*, Vol. 4, No. 4 (October 1964), pp.1-4; Susan Fleming, "The Boston Patrons of Jean-François Millet," in Alexandra R. Murphy, *Jean-François Millet*, Boston Museum of Art, 1984, pp. ix-xviii；スーザン・フレミング「ジャン=フランソワ・ミレーのボストンの後援者たち」『ミレー展 ボストン美術館蔵』(図録)日本橋・高島屋、北海道立近代美術館、山口県立美術館、松坂屋本店、京都市美術館、山梨県立美術館、1984年、14-22頁。
- 9) Robert F. Perkins, Jr. and William J. Gavin III ed., *The Boston Athenaeum art exhibition index, 1827-1874*, Boston, 1980, p.189.
- 10) "The Brimmer Bequests," *Museum of Fine Arts Bulletin*, Vo 4, No. 22 (October 1906), p.33, 40. ブリマー・コレクションの全体像はいまだわかっておらず、近年でも新たな資料が発見されつつある；Margaret F. MacDonald, "A Rediscovered Whistler: 'Violet and Blue: Among the Rollers,'" *The Burlington Magazine*, Vol. 149, No. 1249 (April 2007), pp. 261-262.
- 11) ボストン美術館の記録に関しては、同館の Julia Welch 氏より情報を提供いただいた。売却先は以下の通り：「Yamanaka & Co., 680 Fifth Avenue, New York, c/o K. Tanaka, Esq.」。
- 12) 荒城季夫「春の仏蘭西展について」『みづゑ』255号、234頁。
- 13) この作品の取引に関する資料や記録は、残念ながら、山中商会には残されていないものの、山中定次郎と和田久左衛門は数寄者の茶会で名を連ねている。問い合わせに対応くださり、上記の情報を提供くださった株式会社山中商会の山中譲氏、山中雅子氏にお礼申し上げます。近代数寄者の活動については、以下の文献も参照：齋藤康彦「近代数寄者の大寄せ茶会と社会文化事業」『山梨大学教育人間科学部紀要』第10巻(2008年度)、229-312頁、齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク 茶の湯を愛した実業家た

- ち』思文閣出版、2012年。住友吉左衛門の『御茶会記』に記された140名の茶客のなかに、山中定次郎と和田久左衛門の名前が含まれている。また二人は、1922（大正11）年に財団法人として再発足した光悦会の地区評議員に名を連ねている。
- 14) 福満葉子「和田久左衛門」『西洋美術に魅せられた15人のコレクターたち 1890-1940』（展覧会図録）石橋財団ブリヂストン美術館、1997年、62-64頁。
 - 15) Alfred Sensier, *La vie et l'œuvre de J.-F. Millet*, Paris, 1881, p.81. 邦訳は以下を参照：井出洋一郎監訳『ミレーの生涯』講談社、1998年、76頁。
 - 16) Sensier, p.153.『ミレーの生涯』、133頁。
 - 17) Sensier, p.156.『ミレーの生涯』、135頁。
 - 18) Etienne Moreau-Nélaton, *Millet rencontré par lui-même*, Paris, 1921, tome 2, pp. 12-15.『乳しぼりの女』は「La traite des vaches, à Gréville (1854). Peinture appartenant au Musée de Boston. (Don de Martin Brimmer.)」として掲載されている（Moreau-Nélaton, tome 2, fig. 100）。
 - 19) Alexandra R. Murphy, et al., *Jean-François Millet: Drawn into the Light*, exh. cat., Sterling and Francine Clark Art Institute, 1999, p. 66.
 - 20) Christopher Parsons and Neil McWilliam, ““Le Paysan de Paris”: Alfred Sensier and the Myth of Rural France,” *Oxford Art Journal*, Vol. 6, No. 2, 1983, pp. 38-58; Neil McWilliam, “Mythologising Millet,” in Andreas Burmester, Christoph Heilmann, Michael F. Zimmermann, eds., *Barbizon: Malerei der Natur - Natur der Malerei*, München, 1999, pp.437-447. また、サンシエによるミレー観が他の画家に与えた影響については、以下の論文を参照：安井裕雄「ゴッホのサンスイエ体験」『ゴッホ、ミレーとバルビゾン画家たち』（展覧会図録）名古屋美術館、岩手県立美術館、財団法人ひろしま美術館、2004年、174-182頁。
 - 21) Robert L. Herbert, “Naive Impressions from Nature: Millet’s Readings, from Montaigne to Charlotte Brontë,” *The Art Bulletin*, Vol. 89, No. 3 (September 2007), pp. 540-561.
 - 22) 以下の研究を参考にした：François Guillet, «Naissance de la Normandie (1750-1850)», *Terrain* [En ligne], 33, septembre 1999, mis en ligne le 28 avril 2005, consulté le 13 octobre 2014. URL: <http://terrain.revues.org/2712>; DOI:10.4000/terrain.2712 (最終アクセス2015年1月30日) ; Guillet François, «Entre stratégie sociale et quête érudite : les notables normands et la fabrication de la Normandie au XIXe siècle », *Le Mouvement Social*, 2003/2 no 203, p. 89 -111. DOI : 10.3917/lms.203.0089. URL: <http://www.cairn.info/revue-le-mouvement-social-2003-2-page-89.htm> (最終アクセス2014年10月22日) ; François Guillet, «L’invention de la Normandie», *séminaire «Normandie» année 2010/2011, Université Populaire de Caen*, URL: http://upc.michelonfray.fr/wp-content/uploads/2011/08/InventionNormandieGuillet_2010_2011.pdf (最終アクセス2015年1月30日) ; 原聖『〈民族起源〉の精神史 プルターニュとフランス近代』岩波書店、2003年；酒井健「『ロマネスク』概念の誕生—ノルマンディー—好古家協会と好奇心の美学」『言語と文化』法政大学言語・文化センター、第7巻（2010年）1-41頁；清水祐美子「フランス・フランドル地方における民謡収集とアイデンティティの形成—地域と国家の間で」『Quadrante』東京外国語大学海外事情研究所、第15巻（2013年）、223-241頁。19世紀後半のフランスでのノルマンディーのイメージについては以下の論文で詳しく考察されている。Bradley Fratello, “Footsteps in Normandy: Jean-François Millet and provincial nostalgia in late-nineteenth-century France,” in Frances Fowle and Richard Thomson, eds., *Soil and Stone: Impressionism, Urbanism, Environment*, Edinburgh, 2003, pp.49-64.
 - 23) Maura Coughlin, “Millet’s Milkmaids,” *Nineteenth-Century Art Worldwide*, Vol. 2, No. 3 (Winter 2003), URL: http://www.19thc-artworldwide.org/winter_03/247-millet-milkmaids (最終アクセス2015年1月30日) この画題に関する先行研究は以下の論文。Robert L. Herbert, “La laitière normande à Gréville de J. F. Millet,” *Revue du Louvre et des musées de France*, No. 1 (February 1980), pp. 14-20.
 - 24) Sensier, p.100.『ミレーの生涯』、88頁。
 - 25) Sensier, p.102-103.『ミレーの生涯』、89頁。

資料：1875年の競売出品作品

本資料の作成には以下の著作を参考にした。

Catalogue de la vente de Jean-François Millet, Paris, 1875.

Alexandre Piedagnel, *J.-F. Millet; Souvenirs de Barbizon*, Paris, 1876.

lot.no.	カタログ掲載データ	落札額(フラン)	同定作品データ
1	La Famille du Pêcheur. / Haut. 45 c.; Larg. 31 c. / 1847-1848.	2,700	
2	Baigneuses. / Haut. 28 c.; Larg. 19 c. / 1848.	810	Deux baigneurs, 1848, oil on panel, 28.0 x 19.0 cm, Paris, Musée d'Orsay, Inv. RF 141
3	Carriers. / Esquisse. / Haut. 72 c.; Larg. 57 c. / 1847-1849.	1,500	The Quarriers, 1846-47, oil on canvas, 73.6 x 59.6 cm, Toledo Museum of Art, Gift of Arthur J. Secor, 1922.45
4	Petite Bergère assise. / Une bergère couverte d'une mante et appuyée sur un bâton garde ses moutons qui paissent sur la lisière d'un forêt. / Haut. 46 c.; Larg. 38 c. / 1852.	10,000	
5	Mère avec ses enfants. / Haut. 29 c.; Larg. 21 c. / 1852.	7,050	La précaution maternelle, 1855-57, oil on canvas, 29.0 x 20.5 cm, Paris, Musée du Louvre département des Peintures, Inv. RF 1441
6	Bergère (L'hiver). / Une bergère est appuyée contre un tertre le long d'un petit bois dépouillé de feuilles. / Haut. 20 c.; Larg. 32 c. / 1853-54.	3,300	The Shepherdess, c.1850-52, oil on canvas, 20.3 x 32.0 cm, Victoria and Albert Museum, London, Bequeathed by Constantine Alexander Ionides, CAI.48
7	Cardeuse de laine. / Esquisse. / Haut. 90 c.; Larg. 86 c. / 1853-54.	2,000	
8	Une rue de Gréville. / Étude. / Haut. 38 c.; Larg. 46 c. / 1854.	1,650	Rue à Gréville, after 1854, oil on canvas, 39.3 x 46.9 cm, Private Collection
9	Le Bord de la mer, à Gréville. / Des paysans ramassent du verch dans les rochers qui bordent la falaise. / Étude d'après nature. / Haut. 31 c.; Larg. 41 c. / 1854.	2,100	
10	Falaises de Gréville. / Étude d'après nature. / Haut. 38 c.; Larg. 46 c. / 1854.	1,500	
11	Falaises et Rochers (Gréville). / Étude d'après nature. / Haut. 46 c.; Larg. 55 c. / 1854.	3,900	
12	Puits de la maison de Millet, à Gréville. / Étude d'après nature. / Haut. 41 c.; Larg. 32 c. / 1854.	2,300	The Well at Gruchy, 1854, oil on canvas, 40.0 x 32.4 cm, Victoria and Albert Museum, London, Bequeathed by Constantine Alexander Ionides, CAI.49
13	Une Maison du hameau de Gruchy Gréville, avec vue sur la mer. / Haut. 55 c.; Larg. 46 c. / 1854.	6,400	
14	La Maison de Millet à Gréville. / Étude d'après nature. / Haut. 60 c.; Larg. 73 c. / 1854.	4,000	Millet's Family Home at Gruchy, 1854, oil on canvas, 59.7 x 74.0 cm, Museum of Fine Arts, Boston, Gift of the Reverend and Mrs. Frederick A. Frothingham, 93.1461
15	Laitière accoudée contre un arbre. / Esquisse. / Haut. 55 c.; Larg. 46 c. / 1854-1855.	7,600	The Milkmaid, begun in 1854, oil on canvas, 55.2 x 45.7 cm, Tweed Museum of Art, University of Minnesota Duluth, Gift of Mrs. George P. Tweed
16	Village de Gréville. / Étude d'après nature. / Haut. 53 c.; Larg. 72 c. / 1854-1855.	3,100	Farm at Gruchy, 1854, oil on canvas, 54.0 x 72.7 cm, Smith College Museum of Art, Northampton, Purchased with the Tryon Fund, SC 1931:10
17	Femme étendant du linge. / Sous un prunier, un jeune garçon tient dans ses bras un petit enfant, tandis que la mère est occupée à étendre du linge. / Haut. 26 c.; Larg. 35 c. / 1854-1856.	4,200	Woman hanging out Washing, c.1845-56, oil on panel, 26.0 x 35.0 cm, Private Collection
18	Récolte de pommes. / Ébauche. / Haut. 37 c.; Larg. 30 c. / 1856.	1,700	
19	L'Enfant malade. / A la porte d'une chaumière, une femme assise sur un banc regarde avec sollicitude l'enfant qu'elle tient dans ses bras, tandis que le père, debout sur le seuil de la porte, lui une tasse. / Esquisse. / Haut. 89 c.; Larg. 65 c. / 1854.	2,600	Baby, 1858, oil on canvas, 81.2 x 65.4 cm, Private Collection
20	La Récolte des pommes de terre. / Au preier plan, un groupe de paysans remplissent les sacs des pommes de terre que l'on voit arracher sur un plan plus éloigné. / Haut. 38 c.; Larg. 46 c. / 1858-1860.	4,000	
21	Lapins dans les Gorges d'Apremont. (Soleil levant.) / Haut. 33 c.; Larg. 39 c. / 1859-1860.	600	
22	Cardeuses. / Haut. 46 c.; Larg. 33 c. / 1860.	4,600	
23	Femme portant deux seaux. / Haut. 41 c.; Larg. 33 c. / 1860.	5,150	

24	Femme trayant une vache. / Pâturage de Normandie. / Haut. 59 c.; Larg. 72 c. / 1860.	6,800	Woman Milking a Cow, 1854-60, oil on canvas, 59.0 x 72.4 cm, Bridgestone Museum of Art, Tokyo
25	Femme revenant du bois. / Esquisse. / Haut. 80 c.; Larg. 55 c. / 1864.	1,000	
26	Les Tondeurs de moutons. / Une femme est en train de tondre un mouton que le paysan maintient sur une cuve renversée. / Haut. 41 c.; Larg. 26 c. / 1862-64.	7,100	The Sheepshearers, 1857-61, oil on canvas, 41.2 x 28.5 cm, The Art Institute of Chicago, Potter Palmer Collection, 1922.417
27	Rochers et Pommiers, près Barbizon. / Haut. 50 c.; Larg. 61 c. / 1863-64.	4,000	
28	Fendeur de bois. / Effet d'hivier. Un bûcheron lève son maillet pour enfoncer les coins dans un morceau de bois. A peu de distance l'entrée de la forêt. / Haut. 81 c.; Larg. 65 c. / 1864-1865.	10,100	The Woodchopper, 1858-66, oil on canvas, 81 x 65 cm, The Art Institute of Chicago, Potter Palmer Collection, 1922.416
29	Paysage. / Étude pour le tableau du Printemps. / Haut. 46 c.; Larg. 38 c. / 1865.	1,210	Study for the Four Seasons: Spring (Daphnis and Chloe), c.1860-65, oil on canvas, 46.0 x 38.0 cm, Victoria and Albert Museum, London, Bequeathed by Constantine Alexander Ionides, CAI.172
30	Les Bêcheurs. / Esquisse. / Haut. 77 c.; Larg. 100 c. / 1865.	1,080	The Diggers, c.1855-56, oil on canvas, 81.3 x 100.3 cm, Tweed Museum of Art, University of Minnesota Duluth, Gift of Mrs. George P. Tweed
31	La Fin de la Journée. / Effet du soir. Un paysan remet sa veste. Au fond on voit perdus dans la poussière qu'ils soulèvent, les chevaux d'un laboureur qui regagnent le hameau. / Haut. 59 c.; Larg. 73 c. / 1865-67.	7,300	La fin de la journée; effect du soir, oil on canvas, 59.7 x 73.0 cm, Private Collection
32	Nuit étoilée. / Un chemin le long d'un bois; au fond une charrette. Le ciel est semé de planètes et d'étoiles. / Haut. 65 c.; Larg. 81 c. / 1867.	3,150	Starry Night, c.1850-65, oil on canvas, 65.4 x 81.3 cm, Yale University Art Gallery, Leonard C. Hanna, Jr., Class of 1913, Fund, 1961.22
33	Les Tueurs de Cochons. / Des paysans tirent avec peine l'animal hors de son toit; une femme lui tend un seuil plein de pâtée. Deux petit enfants regardent de loin la scène avec curiosité et effroi. / Haut. 68 c.; Larg. 92 c. / 1867-69.	24,000	The Pig Killers, 1867-1870, oil on canvas, 73.0 x 92.7 cm, National Gallery of Canada, no. 18963
34	Nature morte. / Haut. 31 c.; Larg. 38 c. / 1868.	1,500	Nature morte aux navets, 1868, oil on panel, 30.5 x 37.5 cm, Musée National des Beaux-Arts d'Alger
35	Jeune Bergère assise sur une roche. / La bergère, la tête d'un large chapeau, et tenant son fuseau à la main, est assise dans une attitude mélancolique sur un rocher; la figure se détache en vigueur sur un horizon et un ciel pleins de lumière. / Haut. 162 c.; Larg. 114 c. / 1869.	13,000	Young Shepherdess, c.1870-73, oil on canvas, 162.0 x 130.0 cm, Museum of Fine Arts, Boston, Gift of Samuel Dennis Warren, 77.249
36	Étude pour les Falaises de Gréville. / Haut. 54 c.; Larg. 68 c. / 1870-71.	0	(non présentée à la vente)
37	Bergère gardant son troupeau dans les rochers. / Le soleil, à moitié caché par un nuage, éclaire le ciel d'un puissant effet de lumière sur lequel se détache la figure de la bergère. / Haut. 73 c.; Larg. 92 c. / 1871.	4,700	The Keeper of the Herd, 1871-74, oil on canvas, 71.7 x 91.5 cm, The Art Institute of Chicago, Mr. and Mrs. W. W. Kimball Collection, 1922.4462
38	Pêcheurs remorquant leur barque. (Calme plat.) / Effet de brume sur une belle matinée. / Haut. 32 c.; Larg. 40 c. / 1871.	3,500	Pêcheurs remorquant leur barque, 1871, oil on canvas, 32.0 x 40.0 cm, Private Collection
39	Barque de Pêcheurs en mer. (Effet de soleil.) / Haut. 32 c.; Larg. 40 c. / 1871.	6,300	
40	La Famille du Paysan. / Le père, la mère et l'enfant sont sur le devant de la maison avec leurs instruments de travail. Au fond, les animaux qui peuplent la demeure du paysan. / Haut. 111 c.; Larg. 81 c. / 1871-72.	5,110	The Peasant Family, 1871-72, oil on canvas, 110.4 x 81.0 cm, National Museums and Galleries of Wales, Cardiff, The Davies Sisters Collection, NMW A 2473
41	Falaises de Gréville. / Vue prise du Maupas pas. On voit se dérouler toute la ligne de la falaise jusqu'à la pointe d'Omonville. La mer est basse et l'on voit qu'elle ne découvre pas davantage la plage où elle se brise contre les récifs. / Haut. 95 c.; Larg. 118 c. / 1871-72.	4,600	Les Falaises de Gréville, 1871-1872, oil on canvas, 123.7 x 146.5 cm, The Albright-Knox Art Gallery, Elisabeth H. Gates Fund, 1919, 1919:7
42	Vacher rappelant ses Vaches. / Le vacher est debout sur une élévation appelant au son d'une trompe le troupeau qui arrive de toutes parts et se presse dans un pli de terrain. Effet de soleil couchant. / Haut. 92 c.; Larg. 66 c. / 1872.	4,000	Calling the Cows Home, c.1872, oil on wood, 94.6 x 64.8 cm, The Metropolitan Museum of Art, Gift of Mrs. Arthur Whitney, 1950, 50.151
43	Chasse-Marée en mer. / Esquisse. / Haut. 75 c.; Larg. 95 c. / 1872.	1,520	

44	Tête de femme. / Étude peinte presque d'un seul ton. Bergère appuyée sur son bâton. / Haut. 41 c.; Larg. 37 c. / 1872.	800	
45	Coup de Vent. / Approche d'un ouragan: la tempête brise et balaie tout devant elle. Un grand chêne déraciné par la violence du vent menace dans sa chute un berger et son troupeau qui fuient épouvantés. Le ciel, couvert de nuages sombres, ne laisse apercevoir à l'horizon qu'une faible partie éclairée par le soleil couchant sur lequel se dessine la silhouette du hameau. / Haut. 90 c.; Larg. 118 c. / 1872-73.	10,900	The Gust of Wind, 1871-73, oil on canvas, 90.5 x 117.5 cm, National Museums and Galleries of Wales, Cardiff, The Davies Sisters Collection, NMW A 2475
46	Jeune Mère berçant son enfant dans ses bras. / Figures grandeur naturelle. / Haut. 110 c.; Larg. 92 c. / 1872-73.	5,800	
47	Bergère et son Troupeau. / Esquisse. Au fond la tour du moulin de Chailly. / Haut. 90 c.; Larg. 118 c. / 1873.	2,480	Shepherdess and her Flock with the Mill Tower of Chailly, 1873, oil on canvas, 94.0 x 119.0 cm, Private Collection
48	La Tour du Moulin à Vent. / Esquisse. Ruines d'un vieux moulin dans la plaine de Chailly. / Haut. 90 c.; Larg. 118 c. / 1873.	1,175	Ruines d'un vieux moulin dans la plaine de Chailly, oil on canvas, 90.0 x 117.0 cm, Rijksmuseum Mesdag, The Hague, Inv. 263
49	Le Soir. / Un paysan, sa femme montée sur son âne et un petit troupeau de moutons sont en marche pour regagner le village, après une journée de travail. On voit briller l'étoile du soir. Des nuages légèrement empourprés couvrent l'horizon. / Haut. 80 c.; Larg. 100 c. / 1873.	6,050	
50	Église de Gréville. / L'église s'élève non loin de la falaise et en vue de la mer, qu'on aperçoit à l'horizon. Des nuées d'oiseaux voltigent autour dans un ciel de printemps rempli de nuages floconneux et de vaqueurs. / Haut. 59 c.; Larg. 72 c. / 1872-1874.	12,200	L'Eglise de Gréville, 1871-74, oil on canvas, 60.0 x 73.4 cm, Paris, Musée d'Orsay, Inv. RF 140
51	Laitière normande à Gréville. / Une paysanne porte sur la tête une cruche de cuivre pleine de lait bouchée avec un poignée d'herbes. Effet de soir. / Haut. 73 c.; Larg. 57 c. / 1874.	5,000	Laitière normande à Gréville, 1874, oil on canvas, 73.0 x 57.0 cm, Paris, Musée d'Orsay, Inv. RF 1978 18
52	Âne dans une lande. / Sur la pente d'un terrain âpre et rocheux, un âne qui braie. Au-dessus, un grand ciel de printemps où s'enroulent en spirales, poussés par le vent, des nuages éclatants de lumière. / Haut. 92 c.; Larg. 100 c. / 1874.	6,950	The Hill Top, 1871-74, oil on canvas, 81.0 x 100.0 cm, The Hon. Vere Harmsworth, London
53	Chasse aux Flambeaux. / De jeunes paysans armés de torches de paille enflammée vont la nuit surprendre dans les haies les oiseaux et les abattent à coups de palette. / Haut. 71 c.; Larg. 92 c. / 1874.	5,000	Bird's-Nesters, 1874, oil on canvas, 73.7 x 92.7 cm, Philadelphia Museum of Art, The William L. Elkins Collection, 1924, E 1924-3-14
54	Bergère rentrant avec son troupeau. (Soleil couchant.) / Le soleil est couché, l'étoile du soir s'incline déjà sur l'horizon. Une jeune fille rentre suivie de ses moutons, qui se pressent dans un chemin creux; le chien, sur un tertre, surveille le troupeau. / Haut. 45 c.; Larg. 51 c. / 1874.	11,000	Return of the Shepherdess, 1874, oil on panel, 45.8 x 53.2 cm, Private Collection
55	Leçon de couture. / Esquisse. Une paysanne tenant un enfant dans ses bras, donne à une petite fille d'une dizaine d'années ses premières leçons de couture. Une fenêtre ouverte laisse voir le jardin plein de lumière et de verdure. / Haut. 82 c.; Larg. 65 c. / 1874.	1,850	Sewing Lesson, 1874, oil on canvas, 81.7 x 65.4 cm, Museum of Fine Arts, Boston, Gift of Martin Brimmer, 76.1
56	La Mer vue des Pâturages de Gréville. / Entrée d'un pâtage ou clos sur les falaises de Gréville. Au fond un immense horizon de mer calme sur lequel viennent trancher les silhouettes de quelques animaux paissant sur la pente de la falaise. / Haut. 73 c.; Larg. 92 c. / 1874.	14,200	

中村彝の2つの《自画像》—第7回太平洋画会展出品作と第4回文展出品作

田所夏子

はじめに

37歳で夭折した中村彝（1887-1924）は、対象の生命感や深遠な内省の世界を描き出す画風で数々の傑作を残した大正期を代表する画家のひとりである。また生涯を通じて自画像を描き続けたことでも知られ、なかでも当館所蔵の《自画像》（fig.1—以下、《自画像（BMA）》）は、17世紀オランダの画家レンブラント・ファン・レイン（1606-1669）の影響を濃厚に示す初期の代表作といえる。同時期の作例の中でも特に完成度が高く、《海辺の村（白壁の家）》（fig.2）とともに《肖像》というタイトルで1910（明治43）年の第4回文展に出品された重要な作品である。にも関わらず本作品が制作された年については、主要な画集

や展覧会図録で大きく分けて1909（明治42）年とする説と、1910（明治43）年とする説とがあり、いまだに明確になっていない。この混乱の要因のひとつと考えられるのは、1917（大正6）年3月26日に書かれた彝の中村春二宛書簡にある次の記述である。

然し只弱つて居るのは経費の点です。今まではどうにか出来るだけやつて来ましたが、実は今少しで囊中が怪しくなるので、今後の処置に窮して居るのです。画室には絵が沢山ありますが、自画像（明治四十六〔ママ〕年太平洋画会展出品、翌年文展出品）と小さな女の胸像とを除いては皆駄作許りで、人にお譲り出来る様なものは一枚もないのです。¹⁾（下線筆者、以下同）

この年の初め彝は大咯血をし、絶対安静を余儀なくされていた。それまで物心共に支援してくれていた中村屋主人である相馬愛蔵・黒光夫妻の長女俊子との恋愛問題をこじらせたまま思うように体を動かすこともできない彝は、生活費の工面に困り果てていた。この書簡は彝の重要なパトロンであった実業家今村繁三に援助を頼むため、今村の親友で成蹊学園創立者の中村春二から苦しい状況を今村に話してもらいたいとお願いするためのもので、上記引用箇所はその今村への見返りの品すらままならないことを説明している。なお、文中「自画像（明治四十六年太平洋画会展出品、翌年文展出品）」とあるが、1912（明治45）年7月30日には明治天皇崩御のため改元し元号は大正となっている上、1913（大正2）年に彝が太平洋画会展に自画像を出品した記録はない。2年連続で自画像を出品している点から考えて、1909（明治42）年の第7回太平洋画会展と1910（明治43）年の第4回文展を意味している可能性が高い。

この書簡の内容から第4回文展に出品された《自画像（BMA）》は、しばしば前年に開催された第7回太平洋画会展にも出品されたものと解釈され、1909（明治42）年作とする説が採用されていたようである。しかしながら第7回太平洋画会展の全出品作品が掲載された目録が現存しないため、作品を同定するのは極めて困難な状況である。そもそも2年続けて2つの展覧会に同じ作品を出品すること自体不自然で考えにくい。また、この時期彝が2つの大きな自画像を仕上げたという証言も



fig.1
中村彝《自画像》油彩、
石橋財団ブリヂストン美術館

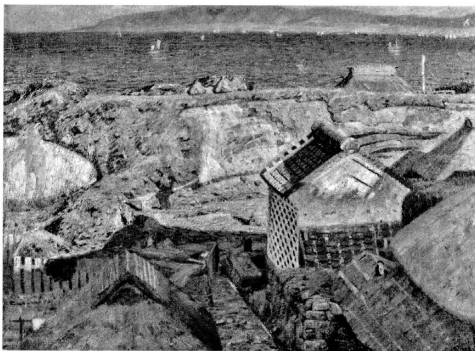


fig.2
中村彝《海辺の村（白壁の家）》1910年、油彩、
東京国立博物館

あって、第7回太平洋画会展に出品されたものと第4回文展に出品されたものとは別の作品で、《自画像（BMA）》は後者のみに出品された1910（明治43）年作とする見方が近年主流である。

そこで本稿は、第4回文展出品自画像と第7回太平洋画会展出品自画像それぞれの展覧会評や作品を実見した友人たちの証言をもとに、改めて《自画像（BMA）》の基本データとなる制作年と出品歴について検証を試みることを目的としたい。

1. 2つの自画像

一太平洋画会出品作と文展出品作

中村彝は1910（明治43）年、上野の竹之台陳列館で開催された第4回文部省美術展覧会（文展）に《肖像》と《海辺の村（白壁の家）》を出品し、後者は三等賞を受賞した。2作品とも当時の目録に図版が掲載されており、《肖像》と題された作品が《自画像（BMA）》と同一であることは間違いない。画面に対してやや斜めに構え鑑賞者に視線を向ける構図や、左上から差し込む光が表情に深い陰影を生むドラマティックな明暗表現は、レンブラントの自画像からの強い影響を示している。

また彝は1909（明治42）年6月の第7回太平洋画会展にも自画像を出品し、この年から設けられた奨励賞の最初の受賞者となり、同時に同会正会員の候補者に推薦されている。ところがこの年の太平洋画会展は、一部の出品作品の図版が掲載されたカタログのみ現存し、全作品が記載された出品目録は見つかっていない。残されたカタログには彝の作品図版は掲載されておらず、そのため出品された自画像を特定することは難しい。しかし当時の展覧会評のなかには、彝の出品した自画像に関する言及がいくつか見られ、そこからおよその作品の雰囲気や想像することは可能である。以下にその言及箇所を引用する。

会員外の出品で奨励賞の月桂冠を得た作である。鹿子木氏などに能くあるクラシック風の画で、衣服と背景との深黒裡から血色の好い顔が出て居る。沈静な画趣の裡に人間らしい情緒のほめて居るのが、ひどく観者の興を牽いた。ただ憂ふべきは此の種の画が、亦た動もすれば形式を遂はんとする奇険に臨めることである。²⁾

それから間もない頃太平洋画会に出品された煙草を燻らす『自画像』によつて初めて君の作品を知つた。それは既に完全した技能を示すに充

分なもので太平洋賞を受けた。恐らく君の出世作であらう。柏亭氏がドギツイと云つてあまり好意ある評言を加へなかつた事を私は意外とし、不服に思つたほどである。³⁾

日暮里の下宿の穢い六畳の部屋には、当時鏡がたった一つ置かれ、その周囲の壁には多くの自画像で殆んど埋められていた位だった、彝サン程自画像をよくかいた人も珍しい、パイプをくはえた自画像が当時の太平洋画会の展覧会で最初の奨励賞を貰つたのも、その当時である。⁴⁾

以上のような評から、浅野徹氏は彝の没後最初に出版された画集『中村彝作品集』（no.22、中村彝作品刊行会、1926年11月）に掲載されている横向きの半身自画像（fig.3）がそれに該当すると考えられると指摘している⁵⁾。残念ながら、『中村彝作品集』に掲載されたモノクロ図版が不鮮明なため、先に挙げたいくつかの証言にある「煙草を燻らす」「パイプをくはえた」という特徴的な要素についてははっきりと判別することは難しい。しかし、逆にこれらの言及されている特徴は《自画像（BMA）》には見られない点を多々示しており、やはり太平洋画会展に出品されたのは《自画像（BMA）》ではない別の作品である可能性が高いと言えるだろう。このことは、以下に引用する戸張弧雁（1882-1927）による回想によってさらに補足される。

日暮里の下宿に居る間に、大きな自画像が（公けにされた）二枚出来た。其の一つは少しく斜の向きで（太平洋画会展覧会に出品したもの）

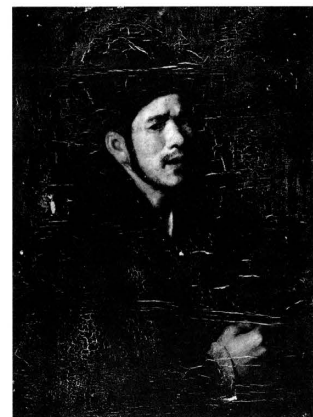


fig.3
中村彝《自画像》1909年、油彩、所在不明

色彩もまだ十分に落ち着きがなかつたが、もう一つは最後まで君の画室に懸けてあつたもので、それを描く時は詳しくレンブラントなどを研究して、自分からも其網版や三色版などの印刷物を参考に貸したり、光線の取方などに就いても随分詳しく質問を受けたりしたものであつた。⁹⁾

彝が日暮里（北豊島郡田端村日暮里1054番地）に移り住むのが1909（明治42）年2月10日のことである。その後同年6月25日に日暮里1067番地の神田方へ移り、翌年6月2日には日暮里1066番地晩翠館二階に移っている。この部屋には、1911（明治44）年12月に中村屋裏の柳敬助（1881-1923）が使っていた画室へ移るまで住んでいた。日暮里で暮らした1909～1911（明治42～44）年までの2年間で3回場所を移っているものの、いずれも近所である。

太平洋画会展が1909（明治42）年6月4日～29日に上野公園竹之台陳列館で開催されていることから、同展出品自画像は戸張の証言に倣えば日暮里の下宿に移った同年の2月10日から展覧会が開会する6月4日までのあいだに描かれたことになる。一方、文展出品自画像については次のような証言がある。

太平洋の研究所でウマイ人だと思つていたが、初めて彝君といふ人が頭に入つたのは、文展の何回かの締切の日、いかにも遅くなつてから慌て、二点作品を持つて来られた時だ。夫れは房州の画で、倉のある海岸の通りと岩の画だつたと思ふが、中々しつかりした出来であつた。入選間違ひないと思つたので、大急ぎで持込む事をお勧めした。確か一つは額縁もなかつた様に覚える。此れが彝君の世間に認められた第一歩でした。⁷⁾

君が文展に出品した自画像を描いた時、君をしてどうしても満足せしめぬ一小部分の為に、其一局部を三十二三遍削り直し、自分の得心の行く迄やり遂げるといふ熱心と真剣な態度は、我々の常に敬服する処であつた。⁸⁾

最初の証言が第4回文展出品時のことを語っているのは明らかである。つまり《海辺の村（白壁の家）》と《自画像（BMA）》は締切間近に、すなわち文展が開会する1910（明治43）年10月14日からそれほど遠くない頃に仕上げられたことにな

る。

この時間軸については、森口多里による画集『中村彝』（アトリエ社、1941年）に、図版こそないが太平洋画会展出品の《自画像》が「明治42年作」として、また第4回文展出品《肖像》が「明治43年作」として巻末の「主要作品目録」に記載されていることと符合する。また、当該画集においていずれの自画像も大きさは「二十五号」と記されており、《自画像（BMA）》の大きさが80.6×61.0 cmであることと一致している。

彝の生前刊行された雑誌『美術』第1巻第5号（大正6年3月）に掲載された《自画像（BMA）》の図版下には「明治四十二年冬」とあり、彝が1909（明治42）年の冬に一度完成させていた可能性がある点は留意したいが、誤植や間違いである可能性も十分考えられる。彝の友人たちの証言により翌年の文展出品の直前まで繰り返し手を入れ続けたとされることから、少なくとも本作品が完成したのは「1910（明治43）年」であることは明らかである。

つまり日暮里時代に制作された2つの自画像は、まず1909（明治42）年の2月から6月までの間に最初の作品が完成され、もうひとつの自画像は翌1910（明治43）年10月頃まで手を入れ続け完成された。そして2作品ともほぼ同じ大きさで描かれ、前者は1909（明治42）年の第7回太平洋画会展で奨励賞を受賞し、パイプをくわえ煙草を薫らすやや斜め向きの半身自画像で「鹿子木氏などに能くあるクラシック風の」作品であった。後者は1910（明治43）年の第4回文展に出品され、詳しくレンブラントなどを研究したもので、《自画像（BMA）》であった。

以上を踏まえると、しばしば《自画像（BMA）》が太平洋画会展と文展と両方に出品されたという誤解を招く要因となつた彝の中村春二宛書簡の解釈には慎重にならざるを得ない。すなわち、「画室には絵が沢山ありますが、自画像（明治四十六年[ママ]年太平洋画会展出品、翌年文展出品）と小さな女の胸像とを除いては皆駄作許りで、人にお譲り出来る様なものは一枚もないのです。」という記述にある自画像については、「明治四十六年[ママ]太平洋画会と、翌年文展の両方に出品された自画像」と読むのではなく、「明治四十六年[ママ]太平洋画会に出品した自画像と、翌年文展に出品した別の自画像」と読むことで、事実関係の整合性がとれるのである。付け加えるならば、雑誌『美術』第1巻第5号（大正6年3月）に掲載されたアトリエに腰掛ける彝の写真（「畫室に於け

る中村彝君)には、不鮮明ながら『中村彝作品集』掲載の横向きの半身自画像と思われる作品が壁に、そして《自画像(BMA)》がイーゼルに掛けられて写っており、中村春二宛書簡をさらに裏付けている(fig.4)。左端にも自画像と思われる円形の作品が掛かっているが、大きさから言って除外して良いだろう。この写真と書簡の内容から考えても、第7回太平洋画会展に出品されたのは『中村彝作品集』掲載の半身自画像である可能性が高いと思われる。

2. レンブラントの受容

彝は1909~1910(明治42~43)年頃にレンブラント風の自画像を集中して制作しており、《自画像(BMA)》はその中でも特に高い完成度を示している。そこで次に彝のレンブラント受容の過程を整理し、初期に見られる一連のレンブラント風自画像群における《自画像(BMA)》の位置づけを見直してみたい。

レンブラントとの最初の出会いは幼年学校時代、一枚の絵葉書からであったという。明治末頃、日本では美術雑誌などにおいてレンブラントがさかんに紹介されていた。たとえば『美術新報』では、1902(明治35)年の8月から11月にかけてレンブラントについて8回の連載が組まれている。さらに、生誕300年にあたる1906(明治39)年には石橋望雲による「れんぶらんと 三百周年祭記念」が全7回に渡って連載された。ちょうどこの年本格的に画家になることを志して白馬会研究所に入門していた彝がこれらの情報に敏感であったとしても不自然ではないだろう。

また友人で彫刻家の中原悌二郎(1888-1921)の回想によれば、彝は1909(明治42)年頃丸善で高額のレンブラントの赤表紙の画集を購入し、手

垢で真っ黒になる程繰り返し見つめながら研究していたという。おそらくこの画集との出会いは彝のレンブラント受容の過程において重大な役割を果たしただろう。彝が丸善で手に入れた画集は、A. ローゼンベルグによる赤表紙の画集『Rembrandt: des Meisters Gemälde in 643 Abbildungen』(1909年出版、第3版)であることが判明している⁹⁾。これは相馬家の主催する中村屋サロンに顔を出していた彫刻家の荻原守衛(1879-1910)がヨーロッパ留学の際にオランダから持ち帰った画集(第2版、1906年出版)の第3版であり、モノクロながら643点もの図版が掲載されていた。さらに、戸張弧雁から網版や三色版を借り、光線の取り方についても研究したが、暗い下宿屋の一室でそれらの複製物からレンブラントの光を学ぶのは想像以上に難しく、そのための種々雑多な道具が「安芝居の楽屋以上の見もの」のように用意されていたという¹⁰⁾。

暗く沈んだ色彩のため細部の判別が難しいが、《自画像(BMA)》に描かれた黒の丸帽子に黒い和服姿は、当時彝が「黒の木綿の紋付き羽織に白い紐、荻原守衛をまねた黒のソフトのお釜帽という姿で研究所に通¹¹⁾」っていたという証言と一致している。左斜め上部から差し込む光線が額と鼻、袴の袴の隙間からのぞく胸元にあたり、眉はひそめられ僅かに開いた口元からは歯がみえている。描かれた表情から本作品に「にがむし」というあだ名がついたとされるが、レンブラントの自画像にも故意に表情をゆがめたものがしばしば見受けられる。ローゼンベルグの赤表紙のレンブラント画集にも類似する特徴を備えた自画像が掲載されており、たとえばno. B175の《自画像》(fig.5、ただし現在は自画像ではないという見方や、レンブラントの弟子の作であるという指摘がなされている)やno. B430の《ベレー帽をかぶった立襟の自画像》(fig.6)などを制作の際参考にした可能性が考えられる¹²⁾。

しかし彝はレンブラント同様生涯を通じて自画像を描き続ける一方、その画風に関しては《自画像(BMA)》以降明るい色調と自由な筆致による印象派風へ、そして晩年にはセザンヌやエル・グレコを思わせる画風へと変化していく。第4回文展に同時に出品された《海辺の村(白壁の家)》はすでに印象派を思わせる筆致と色彩が顕著であるし、1911(明治44)年に制作された《麦藁帽子の自画像》(fig.7)は明らかに印象派研究のあとを見せている。また、彝は《自画像(BMA)》を仕上げるに当たって大変なこだわりと周囲が敬服



fig.4
アトリエの中村彝と2つの自画像
(雑誌『美術』第1巻第5号、1917年より転載)

するほどの努力をもって取り組むと同時に、以下のようにある人から「色盲」と言われたことに憤慨し、以後色彩研究に没頭したという証言もある。

君は其当時或人から色盲と言はれた事に非常に昂奮した。『何だ？俺を色盲視する様な奴の気が知れん。今に見て居れ』、それは当時の君の気概であつて、君は色彩に対する或確信を持つて居たのである。それ以来色彩の研究に没頭した。¹³⁾

すでに1909（明治42）年の第3回文展では印象派を取り入れた山脇信徳（1886-1952）の《停車



fig.5
レンブラント《自画像(?)》1641年頃
(?、油彩、ノートン・サイモン財団
(ローゼンベルクによる画集、第3版
より転載)

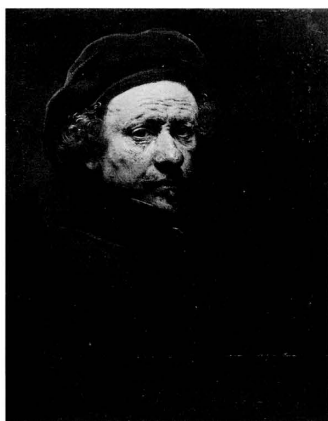


fig.6
レンブラント《ベレー帽をかぶった立襟の自画像》1659年(?)、油彩、サザランド公爵蔵、スコットランド国立美術館寄託(同上)

場の朝》(戦災で焼失)が褒状を受け、第4回文展でも山下新太郎(1881-1966)《読書》(1908年、石橋財団ブリヂストン美術館蔵)をはじめヨーロッパ留学から帰国した画家たちによる印象派やそれ以後の影響を受けた作品が次々と発表されていた。雑誌『白樺』が創刊しそれらの美術動向が紹介されたことも、葬のみならず大正期の美術界全体に大きな影響を与えていた。

こうした背景から、ある意味まったく対照的とも言えるレンブラント的明暗の対比がドラマティックな《自画像(BMA)》と同時に印象派的で色彩豊かな《海辺の村(白壁の家)》が出品され、その後葬のレンブラント研究はいったん区切りをつけることとなった。事実、このとき葬は3等賞を受賞した《海辺の村(白壁の家)》を今村繁三に売った代価の一部でミレーのドローイングの初版画集を丸善で購入している。《自画像(BMA)》を第4回文展に出品して以降、葬は次の段階へと歩みを進めていたといえるだろう。

また、《麦藁帽子の自画像》は作品に記された年記から1911(明治44)年5月15日に完成されたことが分かる。この作品は、印象派の画家ピエール=オーギュスト・ルノワール(1841-1919)やポスト印象派の画家フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)などの影響が指摘されているもので、1910(明治43)年10月の《自画像(BMA)》発表後約半年のうちに葬の画風が大きく変化していることがわかる。この頃を境にレンブラント風の自画像は描かれなくなり、レンブラントからの強烈な影響は葬のなかに深く消化されていった。そしてその余韻は、レンブラントの《ヤン・シックスの肖像》(1654年、アムステルダム、シック



fig.7
中村葬《麦藁帽子の自画像》1911年、油彩、中村屋サロン美術館

ス・コレクション)からの影響が指摘されている《洲崎義郎氏の肖像》(1919年、新潟県立近代美術館蔵)など、晩年の代表作へと結実している。葬にとってレンブラントはただ一時期の興味関心に終わらない重要性をもっていたといえるだろう。そして《自画像(BMA)》はそのレンブラントの影響がもっとも顕著に現れた作例であり、一連の集大成として位置づけることができるのである。

3. 晩年画室に残された自画像

《自画像(BMA)》は、石橋正二郎(1889-1976)が1955(昭和30)年に長谷川仁(1897-1976)から購入し、1961(昭和26)年に石橋財団に寄贈していることが当館の受入台帳の記録から明らかになっている。これに加え、近年、福島県南部の白河で代々醸造業を営む旧家出身の素封家伊藤隆三郎(1889-1970)が葬の借金を肩代わりした謝礼に《自画像(BMA)》を贈られた可能性が指摘された¹⁴⁾。

伊藤は懇意であった須賀川出身の洋画家広瀬嘉吉の紹介により白馬会研究所で葬と出会い、年齢が近いこともあって親密になったという。1914(大正3)年の末に葬が伊豆大島を訪れた際には伊藤が費用を援助し、その後も定期的に送金する代わりに葬の作品を譲り受けた。この時期葬は新宿中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻の好意で中村屋裏の画室に住んでおり、夫妻に生まれた子供の名付け親になるなど一家と親しく交流する一方で、健康状態が優れず転地療養のためたびたび伊豆を訪れていた。しかしその後、先にも述べたように相馬夫妻の長女俊子との恋愛事件を起こしたことで精神的にも金銭的にも苦しい状況に陥っていった。

1915(大正4)年9月6日付けの伊藤宛書簡には、この事件で負った相馬家への借金(120~130円)の肩代わりを依頼し、その代わりに第4回文展出品自画像(《自画像(BMA)》)の譲渡を提案する内容が書かれている。以下に一部抜粋する。

御存じの如く、自分には頼るべき親兄弟も、親戚、知人もない。君をおいてかゝる際に頼むべき人がないのです。どうか御願ひですからこれだけの金を一時融通して呉れませんか。今までの私の代表的のもので自画像(第四回文展出品)でも、大正博へ出した静物でもどれでも差上げます。常磐銀行(水戸)の株券でも宜しければ差上げます。又こん後出来る作品で、このラブに関係あるもの、佳作を必ず一つ進呈して

も宜しいのですが如何でせう。¹⁵⁾

そして、その翌年1916(大正5)年初め(1月31日付け)の葬から伊藤宛の書簡には「文展の肖像を送りました、余り感心しないが記念の為に。画室が出来たらいい絵を描いて御送りします」¹⁶⁾とあり、《自画像(BMA)》が借金の肩代わりのお礼に伊藤に送られたと読める。実際、この時点まで葬が文展に出品した《肖像》というタイトルが付された作品は、第4回文展出品の《自画像(BMA)》のほか、第9回文展出品の《肖像》(関東大震災で焼失)のみである。このうち彫刻家の保田龍門(1891-1965)を描いた1915(大正4)年の第9回文展出品の《肖像》は、俊子との恋愛事件で常軌を逸する振る舞いに及んだ葬が「狂人でない証拠に良い絵を描いて見たい」と言って制作したもので、二等賞を受賞し今村繁三の支援を受けるきっかけとなった重要な作品であった。しかしこのとき文部省買上げとなっているため伊藤に送られたとは考えにくい。とはいえ、この《肖像》が《自画像(BMA)》であると断定するにはまだ疑問が残る。先にあげた中村春二宛書簡や雑誌『美術』第1巻第5号(大正6年3月)によれば、1917(大正6)年3月当時画室には《自画像(BMA)》があったと解釈できるため、もしこのとき伊藤の手に渡っていたなら事実関係に齟齬が出てくるのである。また戸張弧雁の証言にあるように、「最後まで君の画室に懸けてあつた」とされることも符合しない。もっとも、葬は一度送った作品を後から別の作品との交換を提案することもあったので安易に《自画像(BMA)》である可能性は否定できないが、「余り感心しない」「画室が出来たらいい絵を描いて御送りします」など、作品に満足していない様子がうかがえる点も不可解である。伊藤の元に送られた作品を特定するにはさらなる調査が必要であろう。

いずれにせよ、1915(大正4)年9月6日付けの伊藤宛書簡の中で葬自身が《自画像(BMA)》を「私の代表的のもの」と認めていることは重要である。そして俊子とのことでそれまで家族のように付き合い支えられてきた相馬家との関係が絶たれ、窮地に立たされた葬の必死の懇願の気持ちを込めるに相応しい作品であったことに間違いはない。その2年後、俊子との関係に決着をつける間もなく病に倒れた葬は、再び窮地を逃れるため今村に援助を願い出た際も《自画像(BMA)》を引き合いに出している。しかし結局、この自画像は葬が1924(大正13)年12月24日に亡くなる最後ま

で画家のアトリエに架けられていた。これらの事実は《自画像 (BMA)》が画家自ら代表的な作品と述べるほどの自信作であったことを明らかにし、同時に葬にとってまるで困った時の頼みの綱かお守りのように生涯大切にされていたことを物語っている。

奇しくも1925 (大正14) 年2月10日発行の雑誌『アトリエ』第2巻第2号掲載の葬没後のアトリエ写真には、壁に掛けられた《自画像 (BMA)》とともに、額装されていない『中村彝作品集』掲載の半身自画像が床に立て掛けられている様子が記録されている (fig.8)。また1925 (大正14) 年に画廊九段で開かれた没後最初の遺作展出品目録には、いずれも(「自画像(明治四十二年作)」(no.2)と「肖像(明治四十三年作)」(no.6))所蔵者空欄で記載されている¹⁷⁾。おそらく両作品とも最後まで画家の手元に残されていたのだろう。《自画像 (BMA)》と同じ日暮里時代に制作された同じ大きさのまるで双子のような半身自画像は、残念ながら今日所在不明となっている。

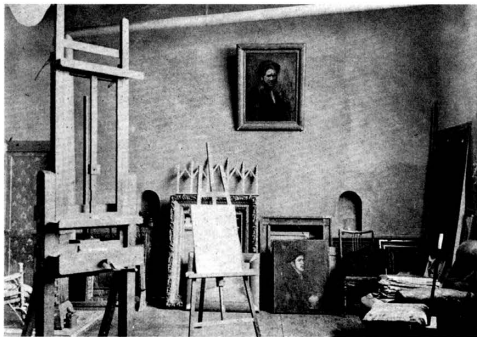


fig.8
中村彝没後のアトリエ (美術雑誌『アトリエ』第2巻第2号、1925年より転載)

註

- 1) 中村春二宛書簡、大正6年3月26日 (中村彝『藝術の無限感』中央公論美術出版、1963年 (以下、『無限感』と略す) 所収、p.251)
- 2) 日暮里人「第七回太平洋画会展覧会」『美術新報』第8巻第9号、明治42年7月
- 3) 遠山五郎「自分の知っている中村君」『中央美術』第111巻第2号、大正14年2月
- 4) 大久保作次郎「研究所時代の彝サン」『美術新論』第2巻第7号、昭和2年7月
- 5) 浅野徹『中村彝画集』日動出版部、昭和59年10月、p.5
- 6) 戸張弧雁「日暮里時代の中村君」『木星』第2巻第2号中村彝追悼号、大正14年 p.116
- 7) 満谷国四郎「中村君と遇った時々々の思ひ出」『木星』第2巻第2号中村彝追悼号、大正14年、p.17
- 8) 前田慶蔵「研究所時代の中村君」『木星』第2巻第2号中村彝追悼号、大正14年、pp.111
- 9) 舟木力英「中村彝の初期作品」『茨城県近代美術館研究紀要』第1号、1991年、pp.1-26
- 10) 森口多里「中村彝」『中村彝展』中村彝展実行委員会・日本経済新聞社、1973年、p.7 (森口多里『近代の洋画人』中央公論美術出版、1959年所収)
- 11) 前掲書10 (森口)
- 12) von Adolf Rosenberg, Rembrandt: des Meisters Gemälde in 643 Abbildungen, mit einer biographischen Einleitung, Deutsche, 1909, ps.241, 401
- 13) 前掲書8 (前田) p.112
- 14) 増渕鏡子「第1章 中村彝と白河南湖に集った芸術家たち」『文化の力—福島と近代美術』展図録、福島県立美術館、2009年、および増渕鏡子『歴史春ふくしま文庫 (70) ふくしま近代美術の舞台—パトロン・画家・自然—』歴史春秋出版、2012年
- 15) 伊藤隆三郎宛書簡、大正4年9月6日 (『無限感』pp.172-173)
- 16) 伊藤隆三郎宛書簡、大正5年1月31日 (『無限感』pp.187-188)
- 17) 『中村彝遺作展覧会目録』画廊九段、大正14年

坂本繁二郎滞欧期の資料紹介

伊藤絵里子

はじめに

ここに紹介するのは、坂本繁二郎(1882-1969)の滞欧期(1921-24)の様子を伝える写真と日記の一部である。

「石橋コレクション 日本近代洋画篇」の特集が『國華』で組まれた際、坂本《帽子を持てる女》(1923)の作品解説において、筆者は滞欧日記の記述から、描かれたモデルはパーエというフランス人女性であることを述べたが¹⁾、その後それを裏付ける写真が見つかった。本稿では、その写真を含む新出の6点を掲載し、さらに、そこで紹介しきれなかった1923(大正12)年11月5日の日記を載録することで、《帽子を持てる女》前後の坂本の動向を補足することを目的とする。

1. 写真

坂本繁二郎の遺品より、石橋美術館へ新たに提供いただいた複写資料のうちの6点である。いずれの裏面にも坂本の筆跡による書込が見られる。⑤のみが帰国後に、他は滞欧中に撮影されたものである。

写真① 坂本繁二郎とジャン・パーエと錦子女史(1923年)

写真② 伊藤錦子女史(1923年)

写真③ ポーズするニナ

写真④ 坂本繁二郎と正宗得三郎(1922年)



fig.1
坂本繁二郎《帽子を持てる女》
1923年、油彩・カンヴァス、
石橋財団石橋美術館蔵

写真⑤ 正宗得三郎と来目会の画家たち(1939年)

写真⑥ 坂本繁二郎と友人たち(1921年9月)

凡例

・[]は筆者による補記。

・サイズは、写真の内枠を採寸したもの。

写真① 坂本繁二郎とジャン・パーエと錦子女史裏面：

大正十三年 [十二年か] / クレツソン アトリエにて / 写す

伊藤錦子女史 / モデル / パーエ嬢

サイズ：8.0×10.5 cm

パリのエルネスト・クレツソン通り18番のアトリエで、坂本が《帽子を持てる女》のモデル、ジャン・パーエと、坂本の縁戚である伊藤錦子と共に写っている。

錦子女史と坂本の背後には、イーゼルに架けられた《帽子を持てる女》を、階段の手すりにはモチーフとなった帽子を確認できる。作品の中ではかっちりとしたフォルムとかしこまった表情で描かれたパーエだが、写真の中の彼女はふんわりとカールした髪型で、足を組み、リラックスした表情で微笑む。

1923(大正12)年8月18日の日記に「モデルパーエのつづき 伊藤女史からアトリエ内の写真撮影をされる」とある²⁾。写真①、②ともに同じ日に撮影されたと考えられるため、写真①裏面の書込「大正十三」はおそらく「十二」の誤記と推測される³⁾。18日に撮影されたのがこの写真であるならば、パーエがモデルを務め始めて6日目頃



写真①

のものといえる。写りが不鮮明ではあるが、制作途中の作品の輪郭はおおよそ見てとれる。筆者は「モデル パーエの帽子像始める」という記述のある8月20日を制作開始日と考えていたが⁶⁾、それより早く着手されていたこととなる。ここに訂正したい。

写真の撮影者と考えられる伊藤女史については、「伊藤女史、錦子女史を各処案内する」「I. K. 両女史に送られ、第5回目のプルターニュへ出発」などと5、6月の日記に記されている。その記述からすると、この写真に写っている錦子女史と同姓ではあるが、別の人物のようである。

写真② 伊藤錦子女史

裏面：

大正十二年 巴里アトリエにて / 伊藤錦子女史

サイズ：12.0×8.6 cm

伊藤錦子（1884-1964）は坂本の縁戚で、共立女子大学の前身である共立女子職業学校で教鞭をとり、裁縫教育の教科書『和洋裁縫講習録』等を刊行した人物である。撮影当時、錦子は39歳、文部省嘱託として欧米における裁縫教授について調査するため、アメリカ経由で渡仏した。パリのカヌノン学院で学び、洋裁教師の資格を取得。関東大震災を機に帰国、その後、東京に日本文華裁縫学院と文化洋装学院を創立した⁹⁾。

坂本は1923年5月4日、パリへ着いた錦子を出迎えた。パリ案内をしたり、アトリエへの来訪をうけたり、錦子女史の名は時折日記に登場する。



写真②

写真③ 「ポーズするニナ」

裏面：

MII Nina / 45 rue Ravin [Vavin?]

サイズ：8.3×5.5 cm

ニナは、フランス人の女性モデル（fig.2）。坂本は、1923年8月3日にグランド・ショミエールのクロッキーに行き、ニナを雇い⁶⁾、その特徴を「仏人で六角形の顔立ち」⁷⁾と記す。写真の撮影時期はおそらく1923年夏から秋にかけての頃と思われるが、場所などの詳細はわからない。

クッションを背に、右手に手鏡を持ち、ポーズするニナ。額にみえる冠のような髪飾り、ネック



写真③



fig.2
坂本繁二郎《婦人（滞欧スケッチ）》
1923年頃、鉛筆、水彩、紙、個人蔵

レスや腕輪を身につける。

8月13日の日記には、坂本のアトリエへ初めてパーエが訪れたことと、その日の午前中、ニナが正宗得三郎のモデルを務めたことが記される⁸⁾。正宗は、坂本の隣室に下宿していた。その頃制作された「鏡のヴィーナス」を主題とする正宗の《ナポリの女》(fig.3)や《鏡を見るヴィナス》(fig.4)では、手鏡を持ち、冠や首飾り等の装身具を身にまとった女性が長椅子のクッションにもたれる。これらのモデルがニナかどうかは不明だが、正宗がこの写真に写されたモチーフや設定に関心を寄せていたことは明白である。



fig.3
正宗得三郎《ナポリの女》油彩・カンヴァス、岡山県立美術館蔵



fig.4
正宗得三郎《鏡を見るヴィナス》1924年
(村山鎮雄『史料 画家正宗得三郎の生涯』1996年より転載)

写真④ 坂本繁二郎と正宗得三郎

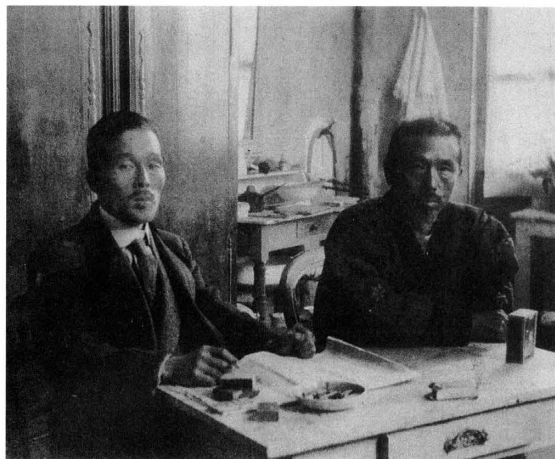
裏面：

大正十一年 / 巴里アトリエにて 坂本 /

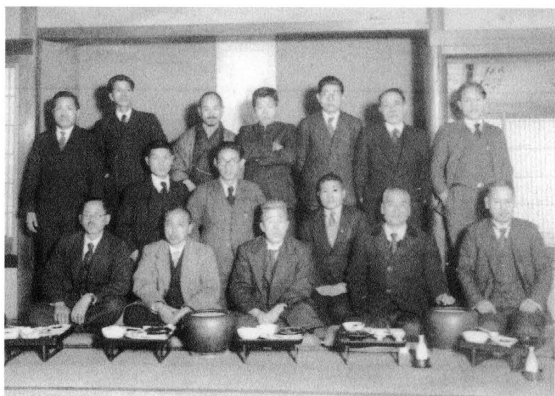
正宗 清野氏写真

サイズ：5.4×7.9 cm

和装の坂本と洋装の正宗。隣同士に住んだ兩人いずれかの部屋と思われる。坂本のパリ滞在は1921(大正10)年9月19日から1924(大正13)年7月2日まで、正宗の二度目の滞在は1921年10月21日から1924年4月28日までで、その期間はほぼ重なる。先の写真③からも、ふたりが制作のための資料やモデルを共有し、情報交換していた様子が窺えるように、隣室同士、同じ二科会の画家同士、往来は頻繁にあったようだ。その交友は生涯続き、次で紹介する写真からもわかるとおり、正宗は坂



写真④
右から坂本、正宗



写真⑤
1列目中央に正宗、その左に坂本

本のいる久留米へも訪れている。

写真⑤ 正宗得三郎と来目会の画家たち

裏面：

昭和十四年三月十八日

正宗君来福を迎へ 旭屋にて / 来目会座談会後

□ [筏?] 屋にて / 記念撮影

[1列目右より] 井口淡 / 加藤尚義 / 〃 / 正宗得三郎 / 坂本繁二郎 / 〃

[2列目] 〃 / 池上丁一

[3列目] 牛嶋磐雄 / 井上伝 / 江寄鹿之助 / 酒見俊 [敏] 雄 / 執行輝彦 / 伊藤 [東] 静尾 / 小松清次

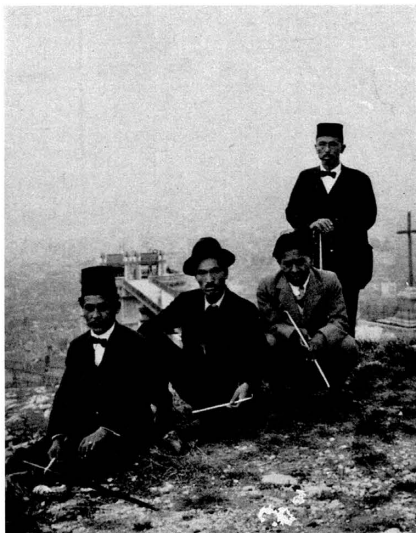
サイズ：10.5×15.0 cm

来目会は、1913（大正2）年松田諦晶らが創立した久留米の絵画グループ。翌年から1955（昭和30）年まで計39回展覧会を開催。ここに集った坂本を慕う後進の画家たちのなかには伊東静尾、小松清次、池上丁一など二科展入選経験者もいる。二科会創立期より活躍する正宗を迎えての座談会は、久留米で活動する若い画家達にとって貴重な機会となったはずである。

写真⑥ 坂本繁二郎と友人たち

裏面：

大正十年九月マルセイユ港 / ノートルダム丘にて
坂本 / 小松 / 当舎 / 石原



写真⑥
右から坂本、小松清、当舎、石原

[印字] POSTALE / Adresse

サイズ：8.1×6.1 cm

フランス文学者の小松清、東京パック社の同僚だった当舎勝次、洋画家の石原長光は、日本から坂本と同じクライスト丸に乗船した人々。パリに着く1週間前の1921（大正10）年9月17日朝、マルセイユ港に到着し、その日はノートル=ダム・ド・ラ・ガルド大聖堂を見物し、ホテル・ジュネーヴに宿泊した⁹⁾。坂本の右側に十字架が見える。写真裏面に印字された文字より、葉書を半分には切ったものと思われる。観光客向けに、撮影して葉書に仕立ててくれる店でもあったのだろうか。のこり半分の葉書は、この3人のうちの誰かが持ち帰ったかもしれない。

2. 滞欧日記

坂本がフランスで綴った日記は全7冊あり、その一部が『坂本繁二郎展』図録（2006年）において箇条書きで紹介されたが¹⁰⁾、内容は公開されていない。ここに紹介するのは、1923（大正12）年11月5日に記されたものである。

この日、坂本はサロン・ドートンヌで開催された日本部門の展示を見に行った。この特別展示は二科会の周年事業のひとつとして実現されたもので、坂本自身、在仏委員として石井柏亭や正宗、藤田嗣治らと共に関わっていた。

日記は、展覧会を見た感想に始まり、坂本が留学して感じた日仏間における思想や藝術観、自然との関わり方の違いなどが記されている。坂本は帰国後、新傾向の西洋美術とある一定の距離を保ち、独自の画風を究めた。その姿勢を理解するうえで重要だと思われる寄稿文「雑感」（『みづゑ』248号）¹¹⁾は、この日の日記を下敷きとしていることがわかる。日記では、「家庭」や「自然」などについての考えがより詳しく記されている。

凡例

- ・筆者が参照した日記は、尾籠恵子氏による転写である。日記原文は連続した文章で綴られているが、転写の際、読みやすくするため、語句や文の間に一文字分空けられている。ここでの表記はそれに倣った。
- ・判読不能文字は□で示した。
- ・[] は筆者による補記。
- ・旧漢字等は適宜新字等に改めたが、そのまま用いているものもある。
- ・「丕」は前後の文脈より「経」の意で使用されていると判断し、「経」と表記した。

- ・縦書きの原文をここでは横書きで紹介しているため、「く(の字点)」を便宜上該当文字で補った。
- ・(中略)部分には、おおよそ300字程度の記載がある。非公開。

五日 月

サロンドウトونسを見る その一部にセクション
ド ジャポネーがある 此処には期せずして小品
斗りが並んで居る 日本藝術の悲壯な展覧
日本の美術 日本人の生活 日本の社会は今
色々の方面から試練を受けて居る 西洋藝術と相
対された之等の 異境の空に居心地悪く晒され
た一群の作品 之れ音楽とすれば プカブカド
ンドンの中に琴尺八を吹いて居る形である 東西
こう云ふ神経の相違は何処から来て居るか 之に
ついて先づ考へられるのは 世界的特長とされる日
本の家族生活である 社会に出て疲れたる心境と
体を やれやれと家庭に於て休めると云ふのが日
本生活の実状である 日本の公的社會では義務の
遂行で 家庭は自個解放の楽しみ如き観がある
大体に於て 個人的な正真な喜悅が かくして家
庭的(大体に於て)に發揮されるになるだらふ
かくして日本人は 義務に於て外国人的であるが
実感生活は思の外に個人的になるのではないか
日本の藝術 日本の生活感情は 従来 非個人的
だと一応されて居るようだが 実は 感情 憧憬
点に於ては 寧ろ個人的な性格を以つ日本 家族
的特徴の群集の心境には 少し斗り矛盾があるや
うで 之に反し西洋では 個人主義と云われるが
家庭の空気は ずっと日本よりは社会性の延長さ
れたもので 日本程 家庭の独立性 環境性はな
いようである 西洋の家庭は 生活は個人性も社
会性的に力点統一され 思想も性格も 先づ以て
社会と云ふものを中心として動いて居る その意
味で 却って非個人的でもある 公向きと家庭と
の区別が 日本程 別にはなつて居ない 男女関
係の如きも かくして家系と云ふ如き問題も 日
本程には厳しからず 衆的に消長する事になつて
居るらしい 家庭の裝飾の仕方さへ 持物をあ
りっ丈け陳列せねば 持って居ても無意義だとす
る位の気持なのである 人の表情如きも それを
反映して居るように思われる 此性格は当然 藝
術の上にも現われて 社会群衆指向が強くない
個人的な生活感情 四畳半生活の細かさには用が
ないのだ そして 画家の神経も疎大の傾向に往
くのであらふ 群集の要求は常に大味である 西
洋音楽が大体に於て 群集の中で奏せらるゝのに
適して居る如く すべての藝術も展覧會場向きで

ある 日本の純粹性的愛念は 群集性とは少し別
な世界であつて 小味ではあるが澄み切り 徹底
する事を要求する 迷惑気な事にもなるのだ 藝
術の深さは やがて一つの 之れ民衆 又は人妻
と一致する筈だから 日本の藝術でも此意味では
民衆的であり得なければならぬが 趣味が個人的
になり易いのだ そして 公衆的にある可きもの
も小味すぎる事になるのではないか 巴里滞在の
日本美術家等の 此混沌の中に苦しめる有様は
瀑下の水にしぶきを立て、居る西洋美術の騒音の
間に 水面の静かな落付を探して居るかの如きみ
じめさがある 要するに 日本の藝術感情は 未
だ公衆的には神経になり切つて居らず 日本の展
覧會式會場藝術位は こゝに来るとまだまだ家庭
藝術にしか見へないのである 公衆的感情を要求
する結果は 変りものや腕達者等の如く 先づ目
立つ事を要す 匠気位は当然なければ生存も出来
ない形のようにだ 日本でならば 演劇興業 其他
商業の如き空気と同様に こゝでは美術の社会性
も似て居る 要するに 芝居や落語 興業商売の
如く 常に人気を対象とされ勝である 澄み切つ
た個人的鋭角は 日本程には見へない こゝに於
ける鋭どさは形であり 規則であり 方法である
一寸見へ悪いような無形の中の消息などにありて
は 兎角 忘れ勝となるのであらふ 割合に
顧みられないのだ

日本人の意識は 規則的 形状的よりも 元來
味識的であり 無形の中に強く進み入つて居る
形式よりも直覚である 之は画に限らず他も同様
だ キリスト教と佛教の相違は やがて又 東西
洋の生活感 藝術の相違でもある 国体生活の日
本人の性格が社会的であるのは皮肉でもある 之
は道德の性格にもまごまごと出て居るのである
今後 此個人と社会群衆的感情の取捨長短が 特
に日本の如き家族制度の土地にありて 如何に生
長するかである 現在の日本は 此両面が二つの
力点傾向をなして 内実に進行して居るのである
人間の要求あるところに 自づとそれ相当の真理
が動くならば 其決着があらはれるに違いない
人妻的と云ふ事

桃山期のような仕事も日本にはあるのだから 早
晩 何とかよき解決は付くに違いない 家族的要
求と公衆的要求が 公理は歸一しても 実感に於
て差別がある日本の社会に 藝術も此処当分 此
両方の水流に浮沈しつゝ進むであらふ 群衆本位
場当りの浪の上を行く人と 澄明なる個性の奥に
行く人と 家庭に於てよく味わへる作は 展覧會
的でよいもの斗りと限らず 自己に尤も親しく生

きる要求は適切で 此点 日本人のような家庭尊重藝術に真剣味のあるのも当然の帰結 好きさらしいの如きも日本人は厳しいのだ 自は静かに自らの良心に聞かんのみ 一面又 社会の規律をも眺めねばならぬのは勿論 理想は此何れもが 良心の喜びに矛盾なく合奏するところ迄 進む事である

西洋の藝術家に賞められると 三べんも四へんも更に又引出されて 愛けふ笑いをして見せねばならぬ画家も 此意味があるのは 徹底的な自己の眼からは いかにも相対的である しかし 西洋にも矢張り セザンも居ればゴーガンも出て居る その外 都会から去って居る作家は多い 仙人は必ずしも東洋の特産物とは限らない

日本藝術は自然 及び四周の自然とけ合って成立する藝術であるが 西洋の藝術は程 [提?] 供される仕事だ 西洋藝術は之を見るにも 周囲に割合いに平気で出来て居る 日本藝術は四周の模様が微妙に関係がある

西洋の藝術はそれだけ規則で成立して居るが 日本は気分である 西洋のは藝術か藝術的と云ふよりも仕事の如きものも此処にある 吾等の心は西洋にありて かくてさくばくとして仕舞ふのだ 要求が満足させられないのである ベルサイユ宮の如きものを見ても 計画を感じされる斗り いくら広大にされても 日本的美の感情は却って迷惑される位のもの 茶碗に一ぱいのしぶ茶でも呑んだ方が 遙かに適切な難有さ [有難さ] だ 徹底的藝術心□は西洋には滅多にない位だ 西洋でも 真に藝術に生きたやうな人は 寧ろ日本的に社会から身をかくした傾が見へる 日本人の獨りよがりも閉口なれど 此のような商売藝術にありては□□となったところに力点の違いがある 吾々は吾々の要求する神に参詣するあの歎喜と恐悦と恍惚を得度いものだ 人が何と評判しやうと之の事実を握 [掴] みさへすれば 己れの仏心は真悦を遂げられるだらふ 真との意味に之の方が人妻的とも一致する筈だ 群衆的 必ずしも人妻的ではない 個人的とか群衆的とかの形でなく 作家の質の如何が人妻的か否かは決定する 此個が生きて後 真の社会も生きるのではなからふかしかしながら 此エキスポジションに於て受ける教訓である 会場に並べて確実に 其色々の長短も見へる 之等の各長処を総合せねばならぬ 要するに 人は其正直な生活喜悦の中心が大切である 之れが其人の真の生活なのだ 煩悶 苦悩 深き程 之を乗り越えた後の価値がある 尤悔深き者 尤強き善人ともなり得べし 尤よき藝術は

人間惨苦の魂が 尤も高き台に達し得たものである 或る意味で尤もよき美は 尤も醜悪を裏付けあるとも云へやう (ミレーの画集の暗示)

いかに達眼の士であっても 此悩みの生活実感を土台とせねば よい作品は現われないだらふ 藝術の現われる原因は 総べて執着である 要求である 遊戯的であれば 本質的にそれだけ既に弱いのである じょう談半分では絶対に成立しないのが真の藝術である 藝術は喜びであるが 喜は即ち悲涙の反射を意味して居る 深い藝術は深い喜と共に その作家は深い悲しみを裏付けて居る筈だ 藝術は かくして難苦の生活がありながら 之に打克つたものに光輝を放つ それだから藝術家はむづかしい 事実 作家の表情にすら此事は観取されるものだ 戦国の世にありても 之に克てば豪らい藝術が却って□勝を示す 戦ふ者にのみ人生の味は深い 世に表を向けざれば 即ち敗北者とならん

弱者に対しては 強者は其力を貸すべき二重の責が来る 弱者に対して之を軽蔑したり 求めたりすべからず 之れ世の中を一層險悪にするものだ 生物に与へられたる運命の脱す可からざるものに対して 歎くは愚 甘受する外はない 甘受するからには笑って受けるのだ 画界の事も カタクリズムも 笑って迎へよ 只 我自身の力に就いてのみ歎くならば歎け 而して あまりに真面目なる可からず 只 藝術の世界に於てのみ真面目の力を注ぎて誤はないであらふ

藝術の相違は人種的にも無論あるに違いないが それよりも寧ろ より以上に時勢と自然との関係が深い 西洋人と日本人との相違の如きも 社会状態や時勢や自然の関係が第一で 人種的には寧ろ よりわづからしい 在巴里の各国人種の特長の消滅は 此事をよく暗示して居る

進めば進む程 四周は益々さく漠たるものとならふ 四周に自己を喜ばすもの多くある間が却て 或は生活はにぎやかであらふ 四周よりは いかにも多く広く仰がるゝとも 高山の頂は只 独雲 漠々の中に淋しく狐 [孤] 峭して居ねばならぬだらふ しかし 此高きを得度い心は止難き本能であり 喜である 結果の如何よりはそれ自身 心の必然である

只 吾は吾を進めなければならない 展覧会場に於けるどぎつい諸々の作品共 生存競争のあさましい叫び合い 有力な作品になる程 それが深刻 集人中に 生きるか死ぬかの大叫喚ではないか 悪徳 卑劣 腕力 智力 色々の限りを尽して 其優生生存を遂げやうとして居る 意志のパノラ

マ こう云ふものを見ると 兎も角も人間と云ふ動物は 靈性の要求は盛んとしないわけに行かぬ 此のような靈性の希求も 事実こゝで何が得られる、かに思到ると さびしい気がないでもない 何かと云へば クルペー ミレー コロー ドラクロア アンゲルである 今度のサロンドウトンヌにも 之等の参考品が並べられて 衆人視聽の的となつて居る 靈性よ 之等の せめては巨匠の靈性にあやからんとする 靈性の希求者よ たとへ其所に達し得たとしても それは遂に又 達したと云ふ丈の事に過ぎなからふ ミケルアンゼロの勝利者の悲哀を刻んだ心の淋しさは 人間の宿命か しかも 生きて居る間 求めて居ねばならぬのだ つまりは只 求める心の遂げたるし時間 それが即ちすべてなのである 途中丈の事であるが 止むに止まれぬ一生の連続 巴里で求めた和本古書蔵笥首首を開らいて見る 原始的な素朴な歌共が幾つ しかも 昔しの人もかわらぬ淋しき心はまざまざとして居る

〈中略〉

洋服を着た和人 K君と二人 見付けて置た屋敷の中の大きな古池に 釣を垂れて久々振りに秋の深林の香りにひたり エトランゼの心を自然の懐に休める 森々と 又森々とし 古池の水の面には枯葉舟が絶へず落ては浮ぶ斗り 時々は大魚の波紋を描く 水草の間には くいなのやうな鳥も幾つか魚を追廻して居る 正に得意の三昧境に入つて居ると 此の池主ありて 貴君等 こゝで釣ではなりませぬと云ふ 折角の境地も半にして去らざるを得ざりしは遺憾

それより更に しゃらんとん [シャラントン] に向ふ

エトランゼの魚釣り姿を見送る諸々の外国の眼 自然を呼吸するにも 之丈けの中をくゞらねばならぬのだ 人間共有なる可き生活感情も 色々とこうして相互割引をして行かねばならぬ 之丈けでもしかし 久しぶりに吸つたよい心持であった夜に入つて H君 サロンドウトンヌのカタログを片手に来たる 例の如く煙の吹き通しで アトリエの中を独りでいぶして仕舞ふ 夜は又雨肅々として 漸く冬の寒さ身にしむ 家郷の事も気にかゝりながら 自身の戦いを続けねばならぬ 人類的な意識と 家庭と云ふもの、意識とに矛盾を感じ 吾は家庭の小さい父となるには 少し心が空に向き過ぎて居る 幼児等にとっては あまり難有い [有難い] 父ではないであらふ 児等の淋しき姿は 何もしらずに櫛原の庭に遊んで父の帰りを待つて居るのだらふ 児の父としては 金で

もためる人間の方がよいかもしれぬ 児の為には こんな父の方が恵み多き父であるだらふ ミルトンを捨て、去つた娘二人 之と対照さるゝ某家の子供の親孝行

衆と自己とをちゃんぽんに必要とする人間は 此処当分 何ずれともつかず 二つの間を往来迷存するであらふ 利己慾張りが勝つか 無慾が勝つか 乱世に於ては無論 前者でなければ居た、まるまいが 治世になると 後者他力も中々有力となるであらふ 親しきわが友だちの間にさへ 何会々々と 色のちがった旗押立てねばならぬ 競争 戦争 運命の波瀾!

巴里に於て 日本美術の運命がどんな風に扱われる、かは あの横浜の外国向象牙細工が 巴里の古道具屋の一隅に高価をつけられて居る事で分かる 具眼者の眼はいつわる事は出来ないだらふが一般の人はこゝでも変りのないものらしく 寧ろ茶の味の如く 無色透明に進んで居る 日本美術の意識の如きは 中々近頃の里巴 [巴里] の如きところでは解され悪いであらふ 真面目になつたら 第一 神経が破れるであらふ 菓子屋の小僧は菓子を慾しがらなると同様に 巴里は 美術は只 市場品だ 多くの画家は職工だ そして世界に品物をさばかすところだ こゝに来る画学生は寧ろ職工見習の様である 美意識其物の神聖を求める場処には不適だ 参考品と教師とモデルとの自由が提供されて居る丈 それ故 或る程度以上の画家は 巴里からははなれるのだ 吾々も時々こゝを参考に見に来るのはよいが こんなところに定住は考へねばならぬ 美意識は墮落するだらふ モツブ趣味にけすらわれねばならぬであらふ モツブ趣味と人妻的と云ふことは違ふ 御手打かっさい趣味は 必ずしも真の民衆人妻意識ではない

遠慮か何かしらぬが 一体 日本人の出品がさびしい上にも更に あまり力作を出さなかつた頃のある事だ 大抵 御茶をにごしたやうなものに止まって居る 若し全部が も少し力作をすれば まだ強い表現はある筈だが

- 1) 「解説 坂本繁二郎《帽子を持てる女》」『國華』1425号、2014年7月、pp.56-59
- 2) 尾籠恵子編「坂本繁二郎滞欧期旅程一覽」『石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展』図録、石橋財団石橋美術館、石橋財団ブリヂストン美術館、2006年、p.220
- 3) 撮影の5日後に伊藤女史は帰国している。(前掲書、p.220)

-
- 4) 前掲1)、p.57
 - 5) 伊藤錦子の本名は「キン」、仕事や執筆の際には「錦子」が使用された。編著書に『和洋裁縫講習録』（全13巻、日本裁縫教育会、1916-18）、『最新洋服裁縫講義』（日本裁縫教育会、1928）等がある。錦子とその夫伊藤秀吉はキリスト教を信奉していた。秀吉は廃娼運動に精力的に取り組む、錦子もそれを支えたという。彼女の経歴については、田口光男『白河市史の一頁をかざった伊藤キン女史の生涯』（株式会社緑川産業企画部、平成9年5月30日）に詳しい。
 - 6) 尾籠編、前掲2006年、p.220
 - 7) 8月6日(月)（前掲書、p.220）
 - 8) 8月13日(月)（前掲書、p.220）
 - 9) 日記には「ノートルダム・ド・ラ・ガルド寺院見物 オテルゼネーブ宿泊」と記載されている。（前掲書、p.214）
 - 10) 尾籠編、前掲、pp.214-223
 - 11) 坂本繁二郎「雑感」『みづゑ』248号（大正14年10月）、pp.2-4

付記

資料提供にご協力くださった坂本家ご遺族と、日記の原文を解説し手書きで転写された尾籠恵子氏の労に、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

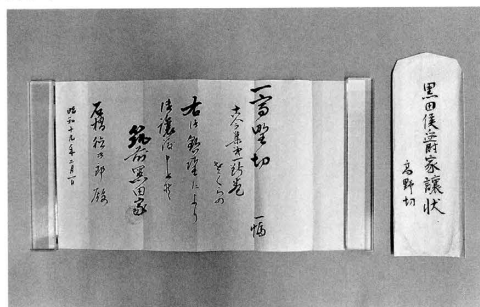
《古今和歌集卷一断簡 高野切》付随資料の紹介

平間理香

2014年10月11日から2015年1月12日にかけて「ちょっと気になる 絵の履歴」と題したコレクション展示を開催した。企画は、それぞれの作品がどのように誰の手を経て伝わってきたかを紹介することで、作品がその時々になされた状況を想像し、楽しんでもらおうという趣旨のものであった。その概要と展示作品については、本誌「展覧会」の項に記録するが、会場では各作品の由来を裏付け、あるいは推測の典拠とする資料も紹介しており、ここに一作品ではあるが、その資料を整理しておく。今回の展覧会でメインに取り上げた平安時代の書蹟《古今和歌集卷一断簡 高野切》（以下、《高野切》）について。

《高野切》を収める箱には、8種の紙資料がコンパクトに折り畳んで収められていた。発行主が分かるもの分からないもの、年記のあるもの無いものがあるが、内容から判断して古いと思われるものから順に挙げていく。

資料1)



一高野切 一幅
古今集第一號巻
さくらの

右御懇望により
御譲渡申上候

筑前黒田家 *藤巴紋の家紋あり

石橋徳次郎殿

昭和十九年二月一日

(封筒)

黒田侯爵家讓状
高野切

旧福岡藩主の黒田家から石橋徳次郎に宛てられた讓渡状。1944（昭和19）年2月1日付。この時の黒田家当主は、鳥類学者で貴族院議員の侯爵・黒田長禮（1889-1978）で、14代目に当たる。石橋徳次郎（1886-1958）は、日本ゴム株式会社（現・アサヒコーポレーション）社長で、石橋正二郎（1889-1976）の兄。この讓渡状により、黒田家から石橋徳次郎へと《高野切》が渡ったことが分かる。なお、封筒の筆跡は書状とは別のもので、後から添えられたものであろう。

資料2)



謹啓

立春猶烈寒相覚候
折柄益御勇剛の仕儀奉
恭賀候陳者此度侯爵家
御宝物之件に就ては不一方
御高配を辱ふし格別の
御尽力を賜り候段全く
容易ならざる御尊慮
に依り候御陰と感銘奉
伏謝候同家に於かせられ
ても侯爵様始め御要職
にも非常なる御満足御坐
候て御悦の趣團男爵様
より深く感激す御様子
を伝承仕り候次第委曲
岡氏御報答を以て御入手
奉拜察候何分時局柄書中
にて遠慮も有之難尽候へ共
誠に此度る儀只々厚き
思召難尽 不肖共等に於ても
感荷大悦不過之且猶
幾久敷御慶此之と

奉存候何れ拜謁之栄を
賜候て深々萬感万謝申
述ぶる不取敢此度筆紙
に尽くし不得候とも偏るに
感佩の心中を申しのぶべく
御礼如斯御坐候
段□
尚々永坂家様より夫々殊に
御心付を拜受仕難尽御礼
申し上候 再拜

二月五日

春海調古堂
小田栄作拜

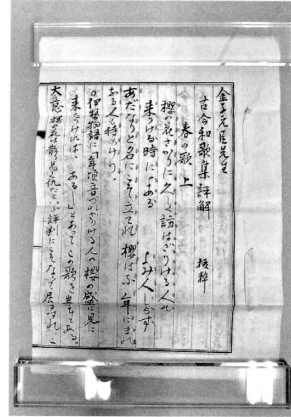
石橋御本家様
侍曹

(封筒)

表：久留米市篠山町
石橋徳次郎様
裏：緘
東京市赤坂区青山高樹町六番地
春海商店出張所
電話青山(36) 壱〇〇八番
小田栄作
昭和十九年二月五日

春海商会小田栄作から石橋徳次郎に宛てられた書状で、1944(昭和19)年2月5日付。先の資料1)の4日後に出されたもので、《高野切》を徳次郎が引き取ったことに対するお礼が綴られている。小田栄作は大阪の古美術商で、書中に「侯爵様(黒田長禮)」と「御要職」が満足していることを「團男爵様(團伊能・1892-1973)」から聞いたと書かれており、《高野切》の具体的なやり取りをおこなったのは小田と考えられる。團は、父の琢磨が福岡藩士の生まれで、12代藩主・長知が岩倉使節団に同行する際、随行員となるなど、黒田家とは深い関係にあった。なお、書中末尾にある「永坂家様」は、石橋正二郎のことか。同じ時期に、黒田家から正二郎のもとに雪舟《四季山水図》が譲渡されている。¹⁾

資料3)



金子元臣先生
古今和歌集評解 抜粹
春の歌 上

櫻の花さかりに久しく訪はざりける人の
来りける時によめる よみ人しらす
あだなりと名にこそ立てれ櫻ばな年にまれ
なる人も待ちけり。

○伊勢物語に「年頃音づれざりける人の櫻
の盛に見に来たりければ、あるし」とあつ
てこの歌を挙げてある。

大意 櫻の花は散り易く仇たといふ評判に
こそなつて居ますれ この様は、どうして
仇ところかかやうに一年の内にもたまさか
てなくては、お出にならない水臭い人をさ
へも散らすに待つて居ますわい。

評 前に仇なりといふ評判のたつた事か
あつて男の中絶をした女だろふ。けれども
それは冤名で今に外心もなく獨居して居た
ので自分の貞操を桜に託して誇つて居る。

返し 業平朝臣

今日来すはあすは雪ともふりなまし消
えすはありとも花と見ましや

大意 私か今日尋ねて来たれはこそこの桜
を花とは見ますれ 若し今日来ぬならば明
日はもう雪のやうに散つてしまひませうわ。
それもまことの雪でないから假令消えすに
あるとしてももとの花とは見えませうか否
雪より外は見えはしますまい。

評 花は固より評判の仇者で散つて雪とな
らぬうちに訪ねて来た私かえらい親切なの
さといふ餘意を含めてある

題しらず よみ人しらず
ちりぬれば慈ふれとしるしなき物を今日こそ
櫻折らは折りてめ
大意 散りはててからは如何に見たく思ってもその詮もないものなのを、今までは惜しくて折らなかつたが、かう散そうでは早く今日の内にこそ、この桜は思い切って折るなら折ろうわさ。
評 折って花瓶になりとも挿して大事に長く賞翫しようの心構えと見られる。

○
折りとははをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散るまでは見む
大意 この櫻の花はあまり見事で見捨てては帰りにくいから一枝折って行かうと思ふか折りとりょうならばいかにも勿體なさそうにまあ見える事よ。それよりはこの邊に宿を借りてこの花の散るまでは是非に見て居よう。

評 一度は折り取らうと試みたが、あまり見事なので散るまでは宿かりて見ようと思ひ直したのに花を愛する情の深さか見える。紀のありとも

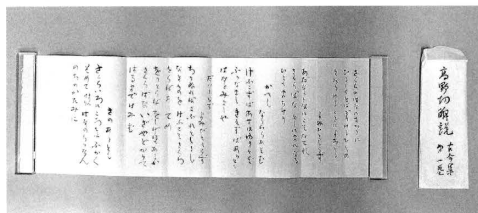
櫻色にころもは深く染めてきむはなの散りなむ後のかたみに。

大意 まことの花でなくとも着物は今から櫻色によろしく染めて着ようと思ふ。それは追付け花か散ってしまうであらう、その後の形見にさ。

評 せめて花の色に似た着物を着て慰ようといふ。全く櫻の執着者の言である。

国文学者であり、歌人の金子元臣（1869-1944）が1901（明治34）年から1908（明治41）年にかけて著した『古今和歌集評釈』の中から、本作品に該当する箇所を抜粋し、書き写したものを。

資料4)



さくらはなのさかりに
ひさしくとはざりけるひとの

きたりけるときによみける
よみひとしらず
あだなりとなにこそたてれ
さくらばなとしにまれなる
ひとまちけり
かへし

なりひらあそむ
けふこずばあすはゆきとぞ
ふりなましきえずはありとも
はなとみましや
だいしらず

よみびとしらず
ちりぬればこふれとしるし
なきものをけふこそさくら
をらばをりてめ
をりとははをしげにもあるか
さくらばないざやどかりて
はるまではみむ

きのありとも
さくらいろにころもはふかく
そめてきん

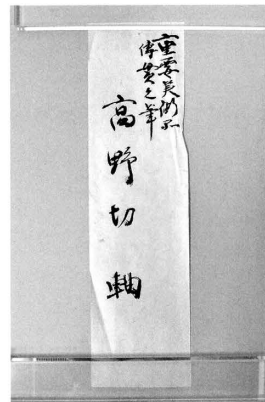
けり はなのちりなん
のちのかたみに

(封筒)

高野切解説 古今集
第一巻

《高野切》の内容を書き起こしたもの。同様の書き起こしが、当館所蔵《伊勢集断簡 石山切》3幅や、豊臣秀吉《書翰》などにも付随している。

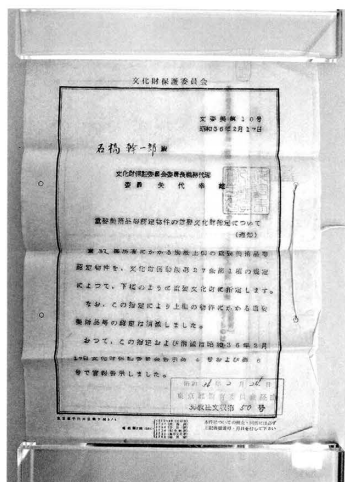
資料5)



重要美術品
傳貫之筆
高野切 軸

何かの札として使われたものか。

資料6)



文委美第10号
昭和36年2月17日

石橋幹一郎殿

文化財保護委員会委員長職務代理
委員 矢代幸雄 *朱文方印あり

重要美術品等認定物件の重要文化財指定に
ついて (通知)

貴殿御所有にかかる別紙上欄の重要美術
品等認定物件を、文化財保護法第27条第1
項の規程によって、下欄のように重要文化
財に指定します。

なお、この指定により上欄の物件にかか
る重要美術品等の認定は消滅しました。

おって、この指定および消滅は昭和36年
2月17日文化財保護委員会告示第4号および
第6号で官報告示しました。

昭和36年2月24日
東京都教育委員会経由
36教社文取第50号

上欄名称

紙本墨書古今集卷第一断簡 (高野切) (さ
くらの)

下欄名称

古今和歌集卷第一断簡 (高野切) (さくら
のはな)

員数

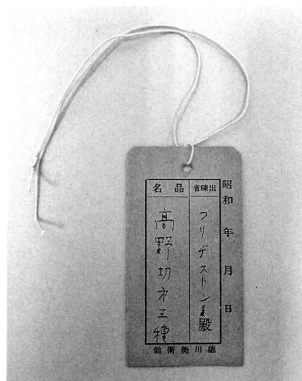
一幅

東京都 石橋幹一郎

*1枚目上辺、および1枚目と2枚目の継ぎ目に割り
印あり

1961 (昭和36) 年2月17日に発行された重要美術
品等認定物件の重要文化財指定についての通知書。
発行者は、文化財保護委員会委員長職務代理をつ
とめた矢代幸雄 (1890-1975) で、通知を受けた
のは、石橋幹一郎 (1920-1997)。幹一郎は、正二
郎の長男で、徳次郎の甥にあたる。この時すでに、
《高野切》の所蔵が徳次郎から幹一郎に移ってい
たことがうかがえる。この通知を受け、同年6月14
日に指定書が公布された。

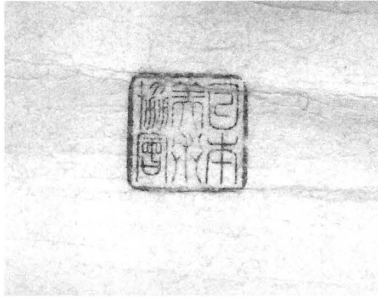
資料7)



昭和 年 月 日
出陳者 プリヂストーン美殿
品名 高野切第三種
徳川美術館

1965 (昭和40) 年に徳川美術館で開催された「仮
名の美展」に《高野切》は出品されており、その
時の札であろう。気になるのは、「第三種」に分
類されているところで、当館の《高野切》は巻一
に当たり、第一種に分類されるのが通説となっ
ている。

資料8)



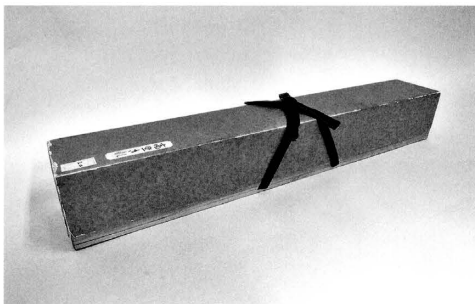
「日本／美術／協会」(朱文方印)

旧巻留紙に使われていたと思われる紙片で、日本美術協会の印を捺す。いつ、どのように日本美術協会と関わったのかは不明。まったくの憶測であるが、1950(昭和25)年から1961年頃まで、先の資料2)に出てきた團伊能が日本美術協会の会頭に就いており、その繋がりか。

以上の資料より、来歴については1944(昭和19)年2月1日に福岡藩主の黒田家から石橋徳次郎に渡り、1961(昭和36)年以前に徳次郎から石橋幹一郎の手を経たことが分かる。財団の所蔵となったのは、1998(平成10)年で、幹一郎の没後に遺族から寄贈された。

ところで、《高野切》は虫食い跡の顕在化、経年による劣化が進んでいたことから、2004年3月から翌年3月にかけて全面的な解体修理をおこなった。これより、太巻での収納保管と改め、収納箱も新調した。これまで作品を収めていた箱は、今後目に触れることも少なくなるであろうので、あわせて書き留めておく。

外箱)



桐屋郎箱紐付

蓋側面墨書：高野切

さくらの歌

石橋家所蔵

唐草文紙製蓋覆に貼紙4種：

イ) 高野きれ

ロ) 改二類

第三號

ハ) 幹

日 K.I.

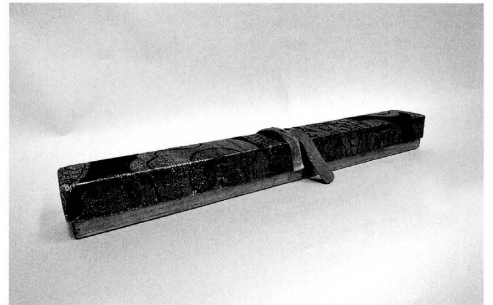
31

古今和歌集断簡

高野切「さくらはな」

ニ) 作品の写真

内箱)



桐屋郎箱皮紐付

蓋表墨書：歌き連 貫之筆

ク 貼紙2種：イ) 世襲財産附属物第 弼

ロ) 第一家賣

種類 掛

番號 三

* 合の朱文円印あり

身側面貼紙：歌きれ

貫之筆

ク 朱書：-3

雲龍文銀欄製蓋覆

外箱の側面に貼られた貼紙ハ)は、石橋幹一郎が所蔵する作品に付けられる管理ラベル。ロ)の貼紙は、ほかの石橋徳次郎旧蔵品にも見受けられるもので、おそらく徳次郎の管理ラベルではないだろうか。また、内箱に貼られたイ)とロ)は、当館が所蔵し黒田家より伝わった雪舟《四季山水図》や、出光美術館が所蔵し同じく黒田家伝来の《高野切》を収める箱にも見られる札で、黒田家の作品管理ラベルと考えられる。いずれも、上述

してきた資料と合わせ《高野切》の伝来を裏付けるところとなる。

当館所蔵の《高野切》に付随する資料以外でも、伝来について、いつ頃黒田家に伝わったのか、黒田家以前はどこに在ったのか、等について考察しうる資料は今のところ確認できていない。継続して調査をおこなっていきたい。

註

- 1) 拙稿「作品解説（雪舟四季山水図）」『雪舟等楊—「雪舟への旅」展研究図録』163,164頁、「雪舟への旅」展実行委員会事務局・山口県立美術館、2006年

ブリヂストン美術館

Bridgestone Museum of Art

所在地 東京都中央区京橋1-10-1(〒104-0031)
TEL (03) 3563-0241
URL <http://www.bridgestone-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時～午後6時
午前10時～午後8時(祝日を除く金曜日)
休館 毎月曜日 年末年始
入場料 個人：
一般 800円 シニア(65歳以上) 600円
大・高生 500円 中学生以下無料
団体(15名以上)：
一般 600円 シニア(65歳以上) 500円
大・高生 400円 中学生以下無料
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo
104-0031, Japan
Phone +81 (3) 3563-0241
Hours 10:00 to 18:00
10:00 to 20:00 (Friday except for holidays)
Closed on Mondays, New Year holidays
Admission Individual :
Adults ¥800; Seniors 65 or over ¥600;
Students ¥500; Children under 15 free
Group (15 or more):
Adults ¥600; Seniors 65 or over ¥500;
Students ¥400; Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

石橋美術館

Ishibashi Museum of Art

所在地 福岡県久留米市野中町1015(〒839-0862)
TEL (0942) 39-1131
URL <http://www.ishibashi-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時～午後5時
休館 毎月曜日 年末年始
入場料 個人：
一般 500円 シニア(65歳以上) 300円
大・高生 300円 中学生以下無料
団体(15名以上)：
一般 400円 シニア(65歳以上) 200円
大・高生 200円 中学生以下無料
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1015, Nonaka-machi, Kurume-shi,
Fukuoka-ken 839-0862, Japan
Phone +81 (942) 39-1131
Hours 10:00 to 17:00
Closed on Mondays, New year holidays
Admission Individual :
Adults ¥500; Seniors 65 or over ¥300;
Students ¥300, Children under 15 free
Group (15 or more) :
Adults ¥400; Seniors 65 or over ¥200;
Students ¥200, Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

(2014年12月現在)

